# 話の特集 5

第184号
昭和56年5月1日発行
昭和42年2月14日
国鉄東局特別承認第25
昭和41年3月18日
第三種郵便物認可

今月登場
横尾忠則

向田邦子
鴨下信一

上條恒彦



五衛寤語醐檎瑚䕶
蜈午吳忤御碁慶濩
午户伍吾扈誤護捂
語の特集　五月號
洒悉後圄晤篌薔洄
后洒拒昨梧鋙艪魚
娛逌珸焐馭還齬期

話の特集5月号・目次——*may 1981*

話の特集5月号・目次——*may 1981*



目次・本文レイアウト／吉冨浩

## 編・集・前・記

和田誠（わだまこと）イラストレーター。『小説新潮』に連載中の「今月の三人」が『3人がいっぱい』と改題され、新潮文庫よりオールカラーで発売された。続いて二巻目が六月に上梓される。a

安野光雅（あんのみつまさ）画家。引きも切らないエッセー、講演、テレビ出演などの依頼をことわりながら準備中の『西洋古都』（岩崎書店）に全力を傾注しているとの由。完成が楽しみだ。b

横尾忠則（よこおただのり）イラストレーター。谷内六郎さんとは永年、家族ぐるみのつき合いが続いていただけに、突然の訃報が信じられないという。『美藝公』（文藝春秋）の装幀装画担当。c

八木正生（やぎまさお）ジャズ・ピアニスト。『マダム』六月号で、料理人としてデビューすることとなった。酒と料理にも一家言あるこの人が、旨い酒の肴を自ら調理し、ご披露するのだそうだ。d

舟橋全二（ふなばしぜんじ）イラストレーター。十年振りに嗅ぐ沈丁花のニオイに、つくづく日本に帰って来て良かったと実感で感じるこの頃だそうだ。日本の四季は得がたいものだと力説した。e

湯村輝彦（ゆむらてるひこ）イラストレーター。新築された自宅、三階建ての最上階、陽のさんさんとふりそそぐ仕事部屋で、あい変らずトレードマークのフラミンゴに囲まれニコニコしている。f

長新太（ちょうしんた）イラストレーター。『内外タイムス』で再開した狭間組との企画にご注目を。例によって、遅れがちな文字原稿を待ちながらも、かつての職場での仕事が楽しそうです。g

蓮實重彦（はすみしげひこ）仏文学者。最近刊の『事件の現場』（朝日出版社）では、吉本隆明、柄谷行人、大岡昇平ら各氏との対談に加えて、巻末の「彼自身による弁明」が興味津々の読物だ。h

矢吹申彦（やぶきのぶひこ）イラストレーター。何もすることのない夜は、大抵、一人で酒を呑みながらビデオの小津映画をくり返し見ている、熱心で不真面目な小津映画愛好家なのだそうです。i
















## 編・集・前・記

**戸井十月**（といじゅうがつ）ルポライター。『週刊ポスト』で新連載の「人間探検」が始まった。実際にボクサーと対戦しパンチを喰らうなどしながら、対象の実像に迫っていく取材振りが好評だ。j

**岩城宏之**（いわきひろゆき）オーケストラ指揮者。二十年来の親友である妹尾河童さんがサントリー音楽賞を受賞した、との報を海外で聞き、わがことのように歓喜、一人で祝盃をあげたそうだ。k

**黒柳徹子**（くろやなぎてつこ）女優。来日中の上海雑技団を訪れ、パンダのウェイウェイと対面した。パンダ研究家として、すでに中国でも著名な人物とあって、団長以下大歓迎。特別の計らいで出演前のウェイウェイ君の勇姿を撮影出来た。l

**山田宗睦**（やまだむねむつ）哲学者。体には自信のある人だが、三月中旬、珍らしく人間ドック入り。検査の結果がちょっぴり気にかかる。三月中には『市民の政治とは』（三一書房）を上梓。m

**山口喜造**（やまぐちきちぞう）イラストレーター。恒常的な不眠症に悩まされているらしい。周囲からは怪奇映画の見すぎだと揶揄されるが、ご本人には深刻な問題だ。春は毎年調子が悪いという。n

**永瀧達治**（ながたきたつじ）音楽評論家。シャンソン狂いからスタートした評論家稼業だが、若い人達にシャンソンを聞く人が少なく、レコードも出ないという許しがたい事態に焦立つ毎日だ。o

**金井一郎**（かないいちろう）家の中にじっとしているのが嫌いで、あてもなく都内や近郊を歩き廻るのが習慣のようになっているが、警官の不審尋問に度々会うのが面倒で仕方ないとおっしゃる。p

**上條恒彦**（かみじょうつねひこ）俳優、歌手。TV『金八先生』が終ると四月一日から二十一日まで銀座の博品館劇場で『ファンタスティックス』に出演。ミュージカル・タレントとしても活躍中。q


j


k


l


m


n


o


p


q

# 編・集・前・記

**三上寛**（みかみかん）フォーク歌手。ニューアルバムのレコーディングが終了し、とりあえずは一段落。四月からは、静岡のUHFテレビで、レギュラーの生番組が毎週はじまる。乞う、御期待。r

**田原総一朗**（たはらそういちろう）ジャーナリスト。『週刊朝日』に連載中のルポルタージュ「電通」には、かなりのエネルギーを投入している様子だが、読者の反応も良く一安心。是非ご一読を。s

**小田島雄志**（おだしまゆうし）英文学者。五十五年度芸術選奨を受賞した。本来は、演劇部門の審査員のメンバーであるご本人にとって、受賞する側にまわるのはなんとも恥しいとテレている。t

**糸井重里**（いといしげさと）コピーライター。糸井事務所には、時折り信じがたい新製品が存在するので評判だが、最近の白眉はやはり、弁当箱大の小ざかしいシンセサイザー以上の物はあるまい u

**浅葉克己**（あさばかつみ）グラフィック・デザイナー。海外のロケとロケの間に、まるで観光旅行のように滞在する日本では、日本料理を食べるのだけが楽しみ。好きな卓球も思うにまかせない。v

**井上ひさし**（いのうえ）作家。朝日新聞「文芸時評」執筆のために目を通す作品の数は膨大なもの。並の図書館ではかなわぬほど資料の充実した書庫に籠り、三昼夜、ひたすら読み耽るのだそうだ。w

**山下勇三**（やましたゆうぞう）イラストレーター。広島カープとまったく同じユニフォームの草野球チームを結成した。実力のほどは定かではないものの、監督とセカンドの兼任とはかっこいい。x

**永六輔**（えいろくすけ）作家。タレント。神田に生まれ、浅草、小諸、四ッ谷、五反田、隼町、並木橋を経由して、三月、わが編集部のある神宮前に転居した。旅の合間の引越し作業に疲労困憊。y

**吉冨浩**（よしとみひろし）グラフィック・デザイナー。めでたい事なのだろうが、昨今、仕事が殺到し眠る間もないらしい。元々、小柄な人がまた一回り小さく縮んでしまった。z（文責・鈴木隆）


r


s


t


u


v


w


x


y


z

# ホームドラマの食卓



向田邦子　鴨下信一

## 食べ方のうまい俳優

**鴨下**　向田さんが脚本を書いて、ぼくが演出したテレビドラマ『寺内貫太郎一家』で、向田さんから「ここの食べ物は何でもいいけど音がするものにして下さい」と言われて、鉄板焼きにした覚えがあるけど、随分印象に残っているな。

**向田**　そう、そう。おばあちゃんが鉄板焼きを食べる所ね。

**鴨下**　味覚の話をする時に、視覚というか、見た目にきれいというのはよく言いますが、聴覚というのはあまり言いませんね。

**向田**　私がラジオからきたこともあるんですけど、ホームドラマの茶の間は一種のサウンドだと思うの。例えば家族が五人いたら、お父さんのバリトンがあって、お母さんのアルトがあって、長女のソプラノがあって、というふうに五人の各々の音階がある合唱だと思うんです。

**鴨下**　なるほど。

**向田**　それに、タクワンを噛む音とか、皿小鉢の触れ合う音とか、コップの音とか、せき払いとか、そういうちっちゃな句読点といいますか、サウンドが入るほうがとても生き生きして、いいような気がするのね。タクワン噛む音なんかすごく好きだから、噛んでくれない女優さんがいるととても腹が立つ（笑）森光子さんは、そういう意味では好き、音立てて食べるから。

**鴨下**　お茶漬けもちゃんと音を立てて食べるし。

**向田**　私が書いたホームドラマは食卓のシーンが長いんですけど、慣れない人たちは、自分の台詞の番だなと思う頃になると、ご飯を

食べないの。口に入れない。食べないで、口に入ったふりして口だけ動かして喋べると、台詞は明確に聞こえるんですけど、嘘なんですね。森光子さんは、誰の番が来ようと、口いっぱいほおばっていて、それで台詞を言われるといかにもいいわ。

**鴨下**　森さんは食べるということに関しては本当にうまい。ちゃんと段取りがついて、ここでお代わり、となるように食べる。

**向田**　おみおつけもちゃんとするし、素晴らしい。

**鴨下**　ご飯を盛るときに、山盛りにしない人もいやだな。ちょぼちょぼってよそったりするのは気持悪い。

**向田**　ほんと。それから森繁久弥さんもうまい。いつかびっくりしたのは、蟹を食べながらうまく喋べったの。

**鴨下**　それは難しい。

**向田**　俳優さんにとっては残酷だけど、その時の森繁さんのうまさったらなかった。脚をポキッと折って、爪の先を出して、シャーッてせせるのね。竹脇無我さんのも全部せせってやるの。それでいい所は自分でパクパク食べる。それになおかつ、てにをはを間違えずに膨大な台詞を喋べるんだから。このシーンだけで百五十万円とってもいいと思う（笑）

**鴨下**　加山雄三さんもたくさん食べてくれるね、いくらでも食う。

**向田**　若い頃はドカベンって渾名があったっていうから。

**鴨下**　ぼくらが食卓のシーンで困るのは、NGが出ることなんですよ。取り直しになるともう食べられないでしょう。ところが加山雄三さんはNGが出てもどんぶり飯を何杯でも同じように食える。

**向田**　取り直すと、どうしても食べ方に勢いがなくなってくる。目がイヤになってきちゃうのね。

**鴨下**　食事のシーンがあると、みなさんお腹を減らしてスタジオ入りする。でもNGが出ちゃうともう食べれない。いつか細川ちか子さんがコーラを六本飲んでひっくり返っちゃった。相手の池部良さんのNG続きで。

**向田**　あれは私が書いた本。

**鴨下**　そう。ひどい話。

**向田**　寺内貫太郎をやった小林亜星さんが夜中に起きて、どんぶり一杯水を飲むところでNGが出て、三杯飲んだのね。見てて可哀相だった。

**鴨下**　川崎敬三さんは、一升壜の水を息もつかずに飲む特技がある。

**向田**　ちょっと気持悪い（笑）テレビで食べ物を作るのは小道具さん？

**鴨下**　ええ。

**向田**　食事のうまい局と、意外と駄目な局があるんですってね。鴨下さんの前で言うのは気がひけるけど、テレビ朝日がいちばん味がいいって。だから、みなさんテレビ朝日のホームドラマに出ると食費が浮くよってよろこぶの。これ本当。

**鴨下**　不思議な話で、役者さんて妙なところでケチでね（笑）かなりの高額所得者が、食費が浮いて助かったって言うからね。

**向田**　[illegible]をとる人でも、インスタント・ラーメンとか、カップ・ヌードルばっかり食べているとか。

**鴨下**　朝早く出たり、時間がないってこともあるでしょうけど。

**向田**　西城秀樹さんは、何か好きかって聞いたら、カップ・ヌードルだって（笑）小林亜星さんがそのことを聞いて「そんなことやってるから、俺に少し突きとばされたぐらいで骨を折ったりするんだ。もっとしっかりと物を食え！」って。

**鴨下**　みんな粗食ですよ。ただ、みなさんよ

く食べますねえ。役者は胃が丈夫じゃないとやっていけないと思う。

**向田**　胃が丈夫で、ちょっとの間でも寝られる人が生き残るみたい。

**鴨下**　きれいな顔してて、よくもまああんなに食えるって感心しちゃう。胃弱の大スターはいませんね。

**向田**　偉いと思ったのは、若尾文子さん。夜十時過ぎたら水一杯飲まない。いつか私の家へいらして、お茶をさしあげたら、全然へらないのね。なにか別のものにしましょうかって聞いたら「明日、午前中の撮影がありますから」って。十時過ぎに飲むと顔が少しむくむんですって。のどが乾いても飲まないっていうから、すごいですね。あの克己心は。

**鴨下**　偉いね。

**向田**　偉いわよう。ほっそり見えてきれいでしょ。すごい努力なのね。撮影中でもお昼にサンドイッチ二切れぐらい。私に贅肉がつくのは無理もないと思うわ（笑）



**向田邦子**（むこうだくにこ）作家。雑誌編集者（『映画ストーリー』）をへて放送作家となる。代表作に『だいこんの花』『幸福』『眠り人形』『寺内貫太郎一家』『あ・うん』（脚本）等がある。第83回直木賞を受賞。一九二九年東京生まれ。

## さみしい冷蔵庫

**向田**　ホームドラマを考えた時に、その家族が朝に何を食べて、夜に何を食べるかの献立てが作れる時には、そのドラマはうまくいきますね。お漬物はその家で漬けてあるのか、それともスーパーで買ってきてるのか、そこまで思い浮かぶと、台詞もどんどん出てくるし、ドラマもいきいきしてくるみたい。

**鴨下**　ディレクターとしても食事シーンは本当に気をつかう。

**向田**　普通の所帯の六人家族だったら、おみおつけのお鍋に六杯分入ってればいいんだけど、『時間ですよ！』の時に、この人たちは板場で働いているんだから、おみおつけは二杯はおかわりするって言ったのに、六杯ぐらいしか入らないお鍋だったから文句言ったのよ。

**鴨下**　なるほど。

**向田**　そしたら、何でも大きいものがいいんだろうって思われたらしくて、次の献立てが朝ご飯だったんですけど、お漬物、佃煮、紅生姜、ラッキョウ、と書いておいたら、全部が全部同じ入れものなのよ。紅生姜なんか五十人前くらいあるのよ（笑）食卓の真ん中に真っ赤の紅生姜がドーンってのってる。私、怒っちゃったの。だってそうでしょ。白菜が山盛りになっているのはまあいいけど、家族の頭数を考えれば五十人前の紅生姜はひどいわよ。ちゃんと考えて欲しいわね。

**鴨下**　困るね、そういうことされると（笑）

**向田**　ドラマでお寿司とるときだけど、七人家族なのに二人前ぐらいしかないことがあるのね。そんなことありえないわよね。予算がないんなら、私のギャラから出してくれって言ったわよ（笑）反対に、夫婦二人なのに山ほどってこともあるし――。

**鴨下**　よくあるよ。どういう神経でドラマ作ってるんだろうってのが。

**向田**　だから、私は、すき焼きと書く時に、例えば月収二十万円の家族だったら、四五〇円ぐらいのお肉で、お客さんが来ておごるって時には六五〇円くらいって、お肉を百グラムいくらって書くの。

**鴨下**　大変な人だな。

**向田**　大して暮しが楽でない家で、今日はすき焼きですよっていったら、霜降りが写ったのよ。霜降りなんて百グラム千円くらいするでしょ、一キロ買ったら一万円、そんな馬鹿なことはないわよ。それで、お肉が良すぎるって言ったのね。でも、言うと、どうしてもきつくなっちゃうので、それからは百グラムいくらのお肉って書くようにしたの。

**鴨下**　ぼくも結構値段知ってる。買い出しに行くからね。買物はカミさん孝行じゃなくて、ぼくらは行くことが必要なんだ。デパートの地下をウロウロして、物の値段を見ていると、知ってるのと、そうでないのとでは随分違うからね。

**向田**　新珠三千代さん扮する会社重役の奥さんが、夜中に冷蔵庫を開けたら、キューリ一本しか入ってないことがあったのね。私、とびあがっちゃった。すぐディレクターに、こんな馬鹿なことがあるかって言ったのよ。そして聞いて分かったんだけど、彼は独身で下宿暮しだったのね、俺んちの冷蔵庫はこうですって（笑）それでますます怒っちゃって、自分ちの冷蔵庫と、会社重役の家の冷蔵庫と間違えるな。世の中の冷蔵庫はどういうものなのか見せてあげるから、私の家に来なさいって言ったの。冷蔵庫に対するイメージが貧困なのよ。

**鴨下**　でも、そういうことあるのよ。この間ぼくはわざわざ逆の意味で、とってもいい家で、全然何も入っていない冷蔵庫を出したらみんな爆笑したけど。

**向田**　そういうことはいいですよ。私、ある女優さんに、「あなたの家の冷蔵庫には何が入ってるの」と聞いたら「オレンジとチョコレートしか入っていません」って。食べないからだって。

**鴨下**　悲劇の冷蔵庫だね、それは。

**向田**　私、不思議だなと思うのは、外国の飛行機会社の飛行機に乗ると、例えば、インド航空ってカレーの匂いがするわね（笑）決して卑しめて言ってるんじゃなくて。いつか本場のカレーが食べたくて、インド航空に乗って帰ってきたことがあったの。塔乗する時からサリーを着たスチュワーデスが迎えてくれたりするから、イメージでカレーの匂いがするのかと思ったら、そうじゃないの。

**鴨下**　本場のカレーは辛いね。

**向田**　ほんと、唐辛子を食べてるみたい。それでも外国人向きのカレーだったのよ。インド人が食べてたのは、もうほんとに辛そうだった。

**鴨下**　唐辛子をきかせてあるから。

**向田**　フランス航空だと、チーズの匂い。

**鴨下**　そうすると日本航空は魚の匂いがするのかな。

**向田**　自分の国のことは分からないけど、日本人はおみおつけ臭いって言うから。

**鴨下**　味噌汁臭いと言いますね。外国人に言わせると、味噌汁は非常に匂いがきつい。

**向田**　そうなんですって。

**鴨下**　カツオブシの匂いかな。

**向田**　やっぱりお味噌の匂いじゃないかな。でもこの間アメリカに行ったら、アメリカでは『将軍』のブームだからじゃないでしょうけど、お味噌と、お豆腐がすごいブーム。

**鴨下**　豆腐なんて味が分かるのかなあ。

**向田**　ノンカロリー、ノンファットということ

ともあるんでしょうけど、白くて四角い形が東洋的でいいんですって。

**鴨下** 禅文化みたいな。

**向田** 精神がこもっているように思うって。豆腐は英語で bean card って言うのね。bean は豆で card は裏ごしして固めたもの。bean card の人気はすごいの、専用のクックブックが出てるんですって。人に聞いた話だけど、豆腐でパイを作ったり、ケーキにしたり。

**鴨下** うわあ、豆腐でパイを作るの？ 気持悪いな。カッテージ・チーズみたいになるのかな。

**向田** 豆腐をくだいて、ドレッシングに混ぜて……考えただけでいやだわ。

**鴨下** アメリカ人はいかにもやりそうだな。ぼくは何でも食べてみたいほうだから、一度食べてみたい。

**向田** 私、遠慮します（笑）

**鴨下** 豆腐は匂わないし。

**向田** そこがemptyでいいんじゃない？

**鴨下** 神秘的でね。ところで、向田さんは食べ物では何がいちばん好きなの？

**向田** それはもう絶対、お米のご飯。それにカツオブシと海苔があればいい。

**鴨下** それで何とか暮らせそう？

**向田** あと、梅干かな。

**鴨下** 梅干も最近おいしいのがないから。

**向田** 見つけましたよ、和歌山の方で。

**鴨下** 向田さんは見つけることにかけては天才だからね。

**向田** 今度おすそ分けします。

## 味覚は幼少時代の記憶から

**向田** 鴨下さんはいわゆる両党づかいですよね。

**鴨下** ええ、お酒呑みながら和菓子を食べたりするので、みんなに評判悪い（笑）

**向田** 私、いやだわ。まあ、ブランデーを飲みながら、小さいチョコレートを食べるのはおいしいと思うけど。

**鴨下** 日本酒で、羊羹は妙にうまいものですよ。

**向田** どうかしら。

**鴨下** フランスではお菓子用のワインがありますから。

**向田** 大体、お菓子のおいしい国は料理がうまい。まあ、料理のおいしい国はお菓子がおいしいという言い方でしょうけど。日本でも茶の湯が発達した所は、お菓子がとても洗練されている。松江、金沢、名古屋とか富裕で優雅な殿様がいた城下町では。

**鴨下** 外国にもいろいろお菓子があるけど、日本のお菓子はやっぱり発達してるね。

**向田** おいしいし、色や形がとてもきれい。あんなお菓子はちょっとないですよ。アメリカ旅行に干菓子を持っていったら、よろこばれました。干菓子は太らないし（笑）

**鴨下** いや、太るよ。

**向田** 太るかしら。でも量が少ないから。

**鴨下** それもそうだ。

**向田** 谷崎潤一郎さんの『陰翳礼讃』に出てくる羊羹の話はごぞんじ？

**鴨下** いや。どんな話？

**向田** 谷崎さんの文章を引くと、「羊羹の色あいも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしを瞑想的になる。人はあの冷たく滑かなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う」と

いうんですが、日本家屋の客間や茶の間の、ほの暗い、薄明かりの中で、その闇と光の陰翳が一切れの羊羹に収斂していくというくだりは、素晴らしい。

**鴨下**　それは、素晴らしいなあ。

**向田**　今は、障子を通した月明りとか、部屋の中のほの暗さがなくなったでしょ。どの家も螢光灯の光りで、アルミサッシの窓に色付きのケバケバしいカーテンの部屋で、羊羹を切っても情緒はないわね。

**鴨下**　変な話だけど、竿物が和菓子屋さんですたれ気味なんだって。



**鴨下信一**（かもしたしんいち）TBSプロデューサー。『岸辺のアルバム』『女たちの忠臣蔵』『幸福』等を演出。ディレクターとして多くの向田作品を手がける。現在、『東芝日曜劇場』プロデューサーとして活躍。一九三五年東京生まれ。

**向田**　竿物って言い方も洒落てると思うわ。若い方はもう分からないかも知れないけど、羊羹を一本買うのを、一竿買うって言うのね。でも、竿物の羊羹というのは、パチンコの景品で取ってくるようなのじゃなくて、もっと持ちおもりがして、どしんと重くて、竹の皮に包んであるようなものだって気がする。

**鴨下**　重いんですよね、凶器にもなる（笑）

**向田**　そう、そう。ぶん殴られたら、ちょっとまいっちゃう。今の羊羹はぶたれても平気ですよ。

**鴨下**　ふにゃっとして。

**向田**　虎屋の、二千五百円もする羊羹だったら、確実に脳は陥没するわね。

**鴨下**　「夜の梅」殺人事件とか（笑）

**向田**　虎屋の羊羹にはいい名前もあるわね。

**鴨下**　日本の歴史を考えてみると、衣食住の中で、食生活がいちばん変わったでしょうね。

**向田**　一昨年のお正月に『源氏物語』を脚色していて、いちばん気になったことは、光源氏がどんなものを食べていたのかってことで、専門家の方に献立表を作っていただいたの。それで仰天したんです。

光源氏は今の収入にすると年収何十億なんです。巨大な屋敷に住んでいて、機を織る人、塗り物を作る人、履き物を作る人など大人数が住んでいて、大城主みたいな暮らしをしているわけですね。それで何を食べたかって言うと、夜は七、八品付くんですが、玄米か黒米のご飯と、干した魚、大根なんかをおろしと煮たもの、煮たといっても塩味でね。たまには鹿の肉をあぶったもの。それからいちばんのご馳走が、甘葛というんですね。甘いお汁ですね。干しあわびなんか付くのは一年に何回かぐらい。今から考えたら貧しいですよ。これだけ貧しい食生活をしている人は、私の身の回りを見てもちょっといないぐらい。

**鴨下**　それにしては、元気に次々と女のもとへと通いましたね。

**向田**　おそらく光源氏はかなり丈夫な人だったろうとみんなで話したんです。ひびあかぎれもせず、栄養失調にもならず、五十いくつかまで生きたんだから、随分頑丈だったと思うわ。

一般の人が当時何を食べてたかというと、これはもう可哀相な一語に尽きるわね。だから病気になると、すぐ死ぬ覚悟をするんですよ。早く死んで極楽浄土へ行きたいと願うの。なぜそんなに諦めがいいかと思ったら、食べ

物に楽しみがないのと、娯楽がなかったたってことでしょうね。テレビがなかったのも原因ね（笑）これはうぬぼれかな。

**鴨下**　極楽浄土もいいけど、あそこでどういうものを食べてるのかが、何も書いてないんだよね。

**向田**　そうね。蓮の花の上で昼寝をするそうだけど。

**鴨下**　だからぼくはとっても不愉快でね。なるべく長生きをして、いいものを食べたい。

**向田**　長生きしますよ。そういえば、乳幼児の死亡率が減って人間が長命になったのは、瀬戸物の食器で食事をするようになったからなんですって。木の皿で、木のスプーンで食事をしていた頃は、食器にバクテリアが発生して、つまり残り滓が器の中で腐敗発酵して病気になりやすかったのね。

**鴨下**　いい洗剤もないし。

**向田**　瀬戸物だとバイキンが浸み通らないらしいのね。それで食文化が随分と改善されたのは本当でしょうね。

**鴨下**　食べ物の話をしていると、昔からこうだったみたいに、つい錯覚しがちだけど、ものすごく最近のもの、現代そのものだってことですね。

**向田**　私もそう思う。食べ物はファッションよりも、ある意味でナウかもしれない。桃太郎なんかはキビ団子で、犬猿雉をつったんだから、今とは大違い。

**鴨下**　あの程度でつれたんですからね。今だとチーズケーキとか（笑）

**向田**　うちの犬や猫も、キビ団子じゃ動きませんね。

**鴨下**　動物も、うまいものを食わせると、すぐそっちの方へ行っちゃう。まずいものには見向きもしないって言いますね。

**向田**　そういう説もありますね。でも動物は生まれてから二、三カ月以内に食べたものをおいしいと思うんですって。これは学説があるんです。

**鴨下**　人間もそうかな。

**向田**　動物の二、三カ月というと、人間では七、八歳くらいかしら。うちの猫を見ていると、二、三カ月から半年くらいに食べたものしか食べませんね。

**鴨下**　でも、ぼくなんか疎開してて、食べ物の不自由な時代に育ったから、その時に食べた物って、たいがい嫌いだな。

**向田**　私も嫌いよ。嫌だけど、どこか気持の中に、疎開前にお母さんが作ってくださったおみおつけとか、ご飯とか、お煮染めとかが残っているんじゃないかしら。

**鴨下**　それはあるかもしれない。

**向田**　私も、スケソウダラとか、カボチャは嫌い。

**鴨下**　ぼくは、ジャガ芋と、里芋が天敵。恨みと思ってるから、見るとショックを受ける。

**向田**　私は二十代はビフテキ、三十代はビーフシチューが食べたいと思った歴史があるの。でもその頃、父なんか、おソバが好きで、天ぷら、お寿司が好きだったの。なんて田舎っぺだろうと思って恥ずかしかった。ところが最近になって、好きなものがそういうものになったのね。歳のせいもあるんだけど、恥ずかしいけど、だんだん親の好みに似てくるみたい。

**鴨下**　そういうものでしょうね。

**向田**　例えば、私が死にそうになった時に、ローストとチーズなんかいらない。やっぱり梅干のおかゆがいいわ。

**鴨下**　あ、ほんと。

**向田**　あと、カツオブシと。

**鴨下**　じゃあ、御仏前にはそれを供えて。

**向田**　御仏前はいいわよ（笑）

（2月8日　書店・話の特集にて）

――タフガイはだめなんです。たとえば、植村直己は、山を歩くときは、人より遅いんですよ／C・W・ニコル　――いまのアメリカの黒人たちの音楽は、ぼくには第三世界的なパワーを、失いつつあるとしか思えないわけです／中村とうよう　――活字のなかに、人生の答えなんてないでしょう。人生というのはやるもんであって読むもんじゃない／半村良　――ぼくは『七人の侍』は七回観たんですが、あの最後の乱闘シーンだけはどうやってもわからなかった／東陽一　――小学校六年生まではアワとかヒエで作ったおやつを食べてたらしいんです。でも、いわれるまでそんなことは忘れていた／山崎ハコ　――韓国にはハン、つまり恨みの思想はあっても、最後まで生きぬこうとする意志があるというんです／平岡正明　――いまのパンパは鉄条網で仕切られちゃってるんですよ。昔は、誰のものでもない広大なパンパが、結局自分たちのものだった／ソンコ・マージュ　――ぼくのやりたかったのは、とにかく年をとってる人が主役になって、それが映画の画面のなかで、踊ればいいということなんです／鈴木清順　――私もまだ独身で、母とふたりで暮らしているけど、金魚には彼氏を連れてきてあげましょうということで…／太田治子　――魚のくせに、よく頑張っているなと思って。傷だらけになって川を上ってくるんですけど、それがじつにストイックなんだなあ／三上寛　――共鳴じゃないんだな。好きだってことは……。ほんとうはそれを、超えなきゃならないってことなんだと思うんだ／岡本太郎　――二十四、五から三十ぐらいまでのあいだは若い人のようなパワーもないし、かといって成熟した女の魅力もないし、不安定な時期だと思うんです／高橋洋子　――本を書く人間が、なぜ人前で喋るのか？

私は何度となく自問自答してみた。書く場はある。書くすべも知らぬわけではない。喋ることの限界や、制限もみきわめはつく。

だが、私は喋りたかった。目の前の生きた顔に向かって／五木寛之

（『歌いながら夜を往け』本文より）



# 歌いながら夜を往け

五木寛之論楽会

●A5変型判　●256ページ　●定価＝980円

小学館

# 谷内六郎さんの世界

横尾忠則

たった今、玄関のブザーが鳴って、
「ごめんください」
と谷内六郎さんが現われたとしてもぼくはちっとも驚かない。
「どうぞ、どうぞ、あがって下さい」
というだろう。
すると谷内さんは、ちょっと悪そうな顔をして、
「今日はとってもお天気がいいので、久し振りにちょっと外に出る気になりましてネェ」
と、ぼくが突然の谷内さんの来訪をちっともいやがっていない表情をチラッと盗み見して、あの独特の優しい動物のような目を細めて嬉しそうに笑うのだ。
「これお嬢ちゃんにあげて下さい」
と円い小ちゃな木の額に入った谷内さんの原画をくれたりするのだ。
「いつも、いつもスミマセン」
今日もまたもらっちゃった。谷内さんはうちの家にくるたびにいつも何か可愛いお土産をぶら下げて現われる。
自作のカレンダーであったり、自作の手拭いであったり、コンペイトーであったり、ハイカラなケーキであったり、今日のような絵であったり、でいつも「お嬢さんに」である。

玄関の鴨居にぶつかるわけでもないのにちょっと背をかがめてぶつからないような格好でうちの中に、昔の人にしては珍しい長身で入ってこられる。その時、きまってプーンといい匂いが玄関いっぱいに拡がるのだ。ポマードの匂いである。今時こんないい匂いのするポマードの匂いなど滅多にかげなくなったそんな懐しい気分のする匂いだ。
(谷内さんの匂いだ)
とぼくは奇妙に安心するのだ。
玄関でチラッと微笑した後、また急にオドオドした表情になってしまうのは谷内さんのいつものクセだからぼくは決して心配などしない。
そんな格好は、まるで患者さんが呼ばれて恐る恐る診察室に入っていく感じによくにている。そういえばぼくのうちはぼくが入るまで歯医者で応接間が診察室であったのをふと思いだしたりするのだ。
応接室に入っても、まるで診察室に入ってオドオドしている患者さんのように、「どうぞ」といわなければ絶対ソファーに腰を下さないほど遠慮深いところがあるので、逆にぼくの方が恐縮してしまうくらいだ。ソファーに坐っても独身女性のように膝頭をちゃんとくっつけてその上に両手を置いて、あい変らず顔を前に突き出すような格好で、ぼくが何か話すまでジッと黙って考え込んだような様子なのである。
ぼくは割れ物にさわるような気持で谷内さんに優しく声を掛ける。
「お忙しいですか」
「そんなことないです。ぼくの絵はマンネリで、まるでタイコマンジューを次から次と焼いているのと同じですからネェ」
と谷内さん。
「そんなことないですよ」というのも無責任なほど、谷内さんの顔には厳しいモノが感じられ、思わず近よりがたいモノを感じてしまうのだ。ぼくの想像の及ばない深奥な部分で自己をグーッと見つめておられるのだなあ、ということだけはぼくにもわかるが、ぼくの入り込む余地ではない。
突然、谷内さんが口を開いて、
「チョット寄っただけですから、すぐ帰りますから」
と、スゴク遠慮される。ぼくは必死で谷内さんを留めさすために色んなことをしゃべりまくる。谷内さんが次第に饒舌になってくる。芸術の話。政治の話。子供の話。駄菓子

屋の話。時にはＵＦＯやテレパシーの話も出る。

以前、一度ぼくの知人でＵＦＯを呼ぶ人がいるのでそこへ谷内さんを案内したことがある。ところがどうしたことかこの夜は一向にそれらしいモノが現われる気配がない。

「ぼくがいるからでないのかも知れない」と谷内さんは本気にそう考えて建物の陰に身を沈め、ジーッとしゃがんでおられたことがあった。そんな時、谷内さんと同じように、「ぼくがいるからですよ」といってぼくも物陰に身を隠した。谷内さんの心は少年のように繊細だから、こんな風にぼくは谷内さんを庇おうとしてしまうのだ。谷内さんと一緒にいるとぼくはいつも谷内さんのマネをしていることに気づく。谷内さんの純粋な心とひとつになるためには、谷内さんと同じことをしなければ谷内さんの気持になれない。

谷内さんと初めて逢った時、玉川遊園地のメリーゴーランドに乗った。箱のついたブランコにも二人で一緒に乗った。ぼくはとてもテレくさかった。けど谷内さんは嬉しそうだった。谷内さんの嬉しそうな顔を見てぼくは自分が恥ずかしく感じた。

谷内さんは少しお酒でも入ると、陽気になって大きな声で、ちょっとオペラ歌手のような調子で『浜千鳥』や、『赤とんぼ』、時には外国の古い歌などを気持よさそうに歌われる。ぼくはこんなことができないので、こんな谷内さんがとても羨やましく思えてならない。

谷内さんを谷内さんの絵とソックリな人と評して間違いないが、一方谷内さんは政治の話が大好きだ。

「最初は子供の頃の話なんですけど、話しているうちに最後はいつも政治の話になっちゃうんですよ」

といって大声で笑われる。

このことは以前、本誌でも書いたことがあるが、谷内さんと大江健三郎さんが成城の町でバッタリ会ってお茶を飲みに行くと、誰でも谷内さんが子供の頃の話、大江さんが政治の話と相場が定まっていると思うでしょうが、それが反対なのだ。

この前、国立近代美術館で売れない絵描きさんがエライ人の絵を鉄パイプで傷をつけた時、谷内さんは、

「鉄パイプの先きにカマをつけてもっとズタズタに破ぶいて修正不可能にすればよかったのに」

といってカラカラと笑われた。谷内さんは芸術に限らずあらゆるモノの権威、権力にモノスゴイ敵意を表明する政治人間でもある。政治の話になるとぼくはヨワイのでもっぱら相槌を打ちながら聞く側に廻ってしまう。立ち打ちできないほどこれがまたくわしいのである。政治に限らず芸術史など、一体いつの間にこんなに勉強されたのかと思うほどだ。

「インテリですね」

と、ぼくは感心する。

「そうなんですよ、ぼくはインテリですよ。ドイツ語も知ってますからネ」

といって、難かしい病気用語をペラペラ。小さい頃から病院に縁があり、そこでいつの間にか憶えてしまったそうだ。「ぼくはインテリですよ」というのは勿論谷内さんのジョークである。

一見、谷内さんは弱々しく、食欲などなさそうに見えるが、実は食欲旺盛である。谷内さんがモリモリ食べているところはとても不思議な感じがするが、逆に安心する。谷内さんがモリモリ食べている姿を見ると、谷内さんがバリバリ仕事をしている姿がオーバーラップして、これまた嬉しくなり、うちのかみさんに、




表紙・友達シリーズで横尾忠則が描いた谷内六郎さん（1975年11月号）

「谷内さん、モノスゴクごはん食べられたよ」とつい自慢したくなるのだ。

そしてどういうわけか食べるのが早いのだ。早いのは食べる時だけではない。絵を描く時はもっと早い。イメージより先きに筆が先行しているかのように、どんどん筆が運ぶ。まるで霊動にかかったように筆が生きもののように勝手に進むようだ。「違うなあ！」とぼくはいつも感心するのだ。

「色紙にサインを」といわれた時でも、一枚一枚違う絵を描かれる。「エーッと？」なんて考えて描かれるのではない。相手の好みや状況に応じて瞬間的にアイデアがでてくるようだ。絵のアイデアは頭の中に溢れるほど詰っていて、まるで吐き出すように描けるのにはぼくはいつも吃驚する。もうひとつ吃驚するのは絵のマチエルの美しいことだ。マチエルだけを拡大して見るとそれが充分、抽象表現主義的なのだ。谷内さんの絵が単にイラストレーションではないのはこのマチエルの美しさがそうさせていると思う。

実に味があり、長時間見ていてもちっともあきない。意識されたマチエルではなく天性のものだ。谷内さん自身がマチエルの美しい人物だ。実に味のある人物である。何回会っても違う魅力を発見して、ぼくは吃驚ばかりしている。谷内さんは「こんな人だ」という概念は会う度に崩れる。それが谷内さんの魅力でもある。

はっきりいって谷内さんは大人の社会で生きていくのはあまり上手ではない。むしろ下手な方であろう。だが、子供の社会とつき合う時は天才的に上手い。とにかく大人の社会とつき合う時のギコチナサはおかしいほどだ。絶対パーティなど行かないという谷内さんがぼくのパーティにはちゃんと来てくれるのだが、予定の時間三時間前位からソワソワ落ちつかず、ついに一時間以上も前にパーティ会場に現われ、会場の入口にチョコンと坐ったまま、深刻な表情でジーッとしておられるのだ。ところがバンドが入ってギャン、ギャンやりだすと、今度はドラムの横にペッタリくっついて、嬉しそうに目を細めて音とひとつになっておられるという感じなのである。沢山の人（大人）と一緒になってワイワイ遊べないが、独りではいつまでも時間を忘れて遊ぶことができる人である。

この文章の冒頭で、ぼくは、

たった今、玄関のブザーが鳴って、

「ごめんください」

と谷内六郎さんが現われたとしてもぼくはちっとも驚かない、

と書いたが、本当に谷内さんが亡くなったという感じがしないのだ。例え今、目の前に現われたとしてもそれが谷内さんの幽霊だなんて思わないで、ずーっと谷内さんが亡くなったという長い夢を見ていたとしか思えないような気がして、いつものように色々と話に夢中になるに違いない。

もうこの人はこの地球から消えてしまった人だ、と思おうとしてもどういうわけかそんなリアリティがないのである。それはきっと向うの世界とこっちの世界でお互いに感応しあっているからなのかも知れない。このことは谷内さんのデス・マスクを描いている時にも同じことを感じた。

この間、新潮社のSさんと谷内さんの本の話をしている時、ぼくはふと変なことをいいかけた。

「画集に谷内さんのサイン入りオリジナル版画を入れたらどうで…………」と。

すっかり谷内さんがいなくなっちゃったことを忘れていたのだ。

昨夜、谷内さんの夢を見た。

谷内さんが霊界からやって来たような感じ

であった。ひと言も口をきかずに立っておられるだけだった。いつもの感じで、ちょっとアイデアでも考えておられるような風でもあった。

テレパシーの強い谷内さんだからきっとぼくの夢の中に現われてくれたのかも知れない。谷内さんはテレパシーの実験が好きだった。ビルの屋上などから下を歩いているある任意の人に、「こっち向け、こっち向け」と念を送る。いい加減にこっちが疲れ、「もうやめた」と思った瞬間、相手は思わず下からこっちを眺める。

谷内さんにいわせると、「息を抜いた時にテレパシーは通じる」そうだ。ぼくは「なるほど、なるほど」と感心して聞いている。

また、樹木などのオーラなどが虹色に輝やいてきれいに見えるともおっしゃる。オーラはぼくには見えないが、谷内さんの絵には樹木がオーラを発している幻想的なのがある。とにかく谷内さんには常人が知覚できないものを知覚する独特の鋭い感性がそなわっているのに違いない。だから小さなことでも谷内さんにとっては重大問題となって悩んだり、苦しんだりしておられたようだ。

谷内さんが亡くなられた時、テレビで奥さんは、

「谷内は人間が本来しなければならないすべてのことをしてきました」

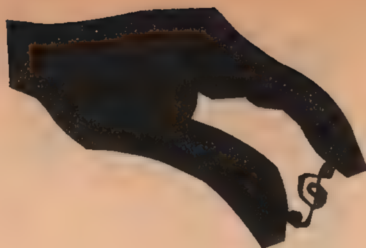
とおっしゃっていたが、ぼくも同感である。谷内さんを見習おうと思ってもぼくには到底無理である。根本的に、「純粋」というものが欠如している。谷内さんと比較するといつも自分の化けの皮がはがされていくからだ。

谷内さんはきれいな花と自作に飾られ、童謡のメロディが流れる中を静かに旅立たれた。もう二度と谷内さんのような童心の画家は生まれないような気がする。谷内さんの世界はわれわれ日本人の永遠の原風景である。谷内さんは今すべてのものから解放され、谷内さんが最終的に憧れ、希求していた宮沢賢治の法華経的宇宙に飛翔していった。

谷内さんはいずれこの地上に再び姿を変えて現われるだろう。今、谷内さんにいえることは、

「長い間ごくろうさんでした。しばらく、ゆっくりお休みになり、もう一度この地上に降りて、また続きの絵を描いてください」

——だ。



# メモランダム　音ランダム

八木正生





How come you're so hubtell tonight? と聞かれてチンプンカンプン。場所はワイキキの灯を見下ろすホテルのバー。相手は日米混血の女の子。こっちもそれ程英語に自信がある訳じゃなし、How come you're so hubtell tonight? って言われても何が何だかわからない。大体 hubtell なんて単語聞いたこともない。何度か聞き返すうちにどうやらフクレているとかスネているとか言う意味らしいと判った。〝どうして今夜はそんなにフクレてるの?〟といったところらしい。別におれはフクレてもスネてもいなかったんだけど、時差ボケで一寸眠かっただけなんだ。その眠い頭がひらめいた。〝おい、その hubtell ってのは日本語だぞ!!〟

〝まさか、でも英語じゃないわね。ハワイ語かな〟なんて女の子はスマしてる。

〝いやこれは日本語だ。広島地方のダイアレクトで、わしゃはぶてて寝とったけんのう、なんて言うんだ〟

〝そう言えばおばあちゃんが良く使ってたわ〟という次第。実際ハワイの日常語は目茶苦茶だ。元の広島でも現在は余り使われていないハブテルなんて言葉が日常の会話に使われているし、ハワイ語も沢山使われていて、それを英語でつないでいる感じだから慣れないと仲々判りにくい。

〝私たちも困るの。本土に行った時なんか、通じなくて困ることがよくあるの。どれがハワイ語でどれが日本語でどれが英語かなんて余り考えたことが無いから〟

そりゃそうだろう。ハワイ語や日本語まじりの英語なんて米本土で通じるわけはない。でも一度慣れてしまえばこんなに楽な英会話は他にない。文法なんか考えることもないし、ボキャブラリーも全く少なくてすむし、疑問文なんかも要らない。肯定文のあとに〝ヤー〟って付ければこと足りてしまう。一種独特の節回しはあるけれど、大体語尾を下げればよい。疑問文だったら下った語尾のあとに〝ヤーッ〟て上げてくっつければすんでしまう。その中にハワイ語の単語五つ六つ覚えてはさみ込めばもうロコ・ボーイ。ロコはローカルのこと、つまり土地っ子ということ。実生活にもハワイ語が使われることも少なくない。通行禁止などのサインにKAPUなんてよく書いてある。DON、Tの意味だけど、もとの意味はもっと広く〝禁忌〟を意味する言葉らしい。何となくTABOOと音が似ていて面白い。音が似ているといえばマウイ島にハワイの軽井沢といった感じの高原があって、そこは快適に涼しくて住み易いので、リタイアした老人なんかが住みたがる所なんだけれど、その場所の名がKULAという。おれの勝手な想像だけど、キャプテン・クックかその仲間がこの場所に来て、〝ここは much cooler である〟なんて言ったので現地人がKULAと呼ぶようになったのではないかしら。

ワヒネが女でカネが男、白人がハオレでストレンジャーがカマアイナ、山側がマウカ・サイドで海側がマカイ・サイド、食事がカウカウで美味しいがオノオノ。しゃれてオノリシャスなんとも言う。この位識ってれば可成りロコ風にやって行ける。もう一つ欠かせない言葉はダカイン。元々は that kind 又は the kind なんだろうけれど、これはダカインと発音する。意味は説明しにくい。あれ、これ、それ、あんな、こんな、そんな、全部ダカインだ。このダカインが上手に使えると本当にハワイアンらしくなる。〝ユーノーダカインヤ?〟なんてやれば相当にロコっぽく聞こえることうけあい。何の意味だって?

〝あれ知ってる?〟っていう位の軽い調子でよく話の継ぎ目に出てくる。大した意味はない。

人々はやさしくて親切だし、気候も風土ものんびりしていて、言葉も楽だし、ハワイを旅すると本当にのんびりできる。しかし先程のハブテルのような昔の日本に出会って驚かされることもしばしば。マウイ島に住む八十歳を過ぎた一世のお婆さんの浪花節なんて、もうそのまま明治。そのお婆さんの節回しが正調かどうかは判らないけれど、明治時代の浪曲の節回しがそのままの姿で残っている。大正、昭和と段々に変化する段階が抜けてるから、浪曲が祭文からつながっている様子が良く判る。マウイ島で昔のままの日本に出会うなんてとっても面白い。時間や時代のずれがそのままそこにあって、考え込まされてし

まうような出来事にも良く出会う。

最近のハワイで残念なのは、ハワイ音楽が段々聞かれなくなってしまったことだ。観光客目あてのホテルのショーなどでは今でも細細とハワイアンを奏っていたりするけれど、一般には余り聞かれなくなってしまった。恥ずかしながら打ち明けてしまえば、戦争が終っておれが始めて奏ったのはハワイアンだった。あの頃はみんなハワイアンからポピュラー・ミュージックに入っていったものだ。ハワイアンは先ず音楽的に素朴だし単純だからとっつき易い。もうひとつ楽器の安いことも見のがせない。ウクレレとギターとスティール・ギターくらいあれば、もうすぐバンドが出来てしまうから、学生たちがハワイアン・バンドを沢山作った。それに今でこそハワイなんて誰でもひょいひょい出掛けて〝ワイキキなんてまるで熱海よ〟なんて言ってるけれど、当時はハワイといえば遠い南海のパラダイスって感じ、なにしろ〝憧れのハワイ航路〟なんて流行歌が大ヒットした位のものだ。だからその頃の若者にとってはハワイアンを奏るのは相当恰好良いことでもあったのだ。そんな頃へのノスタルジーもあってハワイで本物のハワイアンを聴くのは好きだけど、民俗芸能の常で、観光用にアレンジされたものが多く、また若い人たちは見むきもしないこともあって、仲々本物には巡り会えない。

ハワイアンには大別すると三つのパターンがある。まずもともとのハワイアン、これが主流で、その他に白人が作ったハワイアン、映画やレコードでハワイを唄ったもの、たとえば〝ブルー・ハワイ〟とか〝ハワイアン・パラダイス〟とか、そして三つ目はタヒチやサモアンのポリネシアから入って来た音楽、大きく分けるとこの三つになる。おれはもともとのハワイアンが特に好きだ。とても素朴なのと演奏パターンが決まっていて、判り易いし、その決まりきった演奏パターンの故に、とても安心して聴くことができるからだ。もともとのハワイアンて言ったって、サンドウィッチ諸島（昔はハワイ諸島をこう呼んだ）に宣教師たちがウクレレをもたらしてから、まだ二百年そこそこだから民俗音楽と言うにはまだ新しすぎるかも知れないけれど。ハワイアンもまた他の民俗音楽と同じように語りをリズムとメロディに乗せたものだ。その語るものは月や海や風や花や自然であり、そして恋や愛を唄っている。

構成は単純でワン・コーラスの長さも短いけれど、そのくり返しが多く、長いものは十数コーラスにもなる。典型的なパターンは短いイントロのあとまずワン・コーラスをソロが唄い、短い終止形をはさんで同じ歌詞をコーラスで唄う。この短い終止形は二小節かそのくり返しの四小節かなのだが、フラと呼ばれる形でこれがないとハワイアンにならないし、これが鳴ればハワイアンという程特徴的なフレーズだ。イントロもこのフラで始まるものが多い。つまり一節の語りに対する合いの手のような感じのものなのだ。そして二番をソロが唄いフラが入ってコーラス、またフラが入って三番のソロ、といった具合に続いていく。そして面白いのは最終コーラス。これはどんな曲でも同じ歌詞なのだ。〝アイナイアマイアナカプアナ〟で始まるのだ。これが出てくると、ああもうおしまいなんだなと判る。浪花節の〝丁度時間となりました〟みたいなもので、最終コーラスは必ず〝アイナイアマイ……〟で始って、多くはワン・コーラス目の歌詞につながっていく。いろいろの人にその意味を尋ねるのだけれど、諸説あって正確には判らないが、〝これでこの話もおしまい〟というのが大体の意味らしい。



そして欠かせないのがフラ・ダンス。どうも今日では観光用フラ・ダンスが大勢を占めているから、あのコダック・フラ・ショーみたいなのがフラ・ダンスだと思っている人が多いけれど、本物のフラ・ダンスはもっと典雅なものだ。手の指のポーズが歌の詞の意味を表していることはよく知られているけれど、この手指の表情の豊かさには驚かされる。そしてその手と足と顔で創り出す表現は幅広く、あくまでも上品で、雅びなものだ。元来ハワイ民族は誇りの高い民族だし、厳しい王制を布いていたこともあって、礼節に富んだ民族だ。フラ・ダンスと言うと何か土人の煽情的な裸踊りのように思われているのは、ファンとしては残念でならない。しかしフラ・ダンスも女踊りは上品で美しいけれど、男踊りとなるとそうはいかない。フラ・ダンスの男踊りはコミックなものが多く、猥雑で生命力あふれるものだ。何ともユーモラスで可笑しい踊りが多くて楽しい。パイナップルから作るオコレハウという地酒を飲りながら、月の下いつ果てるともしれないハワイの宴の中にいると、本当に桃源郷に遊ぶ思いがして心が和む。

　そんなハワイの歌や踊りも、ごく少数伝統を守ろうとする人たちが居るには居ても、一般的には頽れるばかりで、若者たちはやっぱりロックやソウルでディスコなのだ。ハワイもアメリカ合衆国の一州なのだし、世界中何処でも同じように若者の好む音楽は今日的なサウンドなのだけど、二、三年前から一寸面白い試みが始った。それは〝ホーム・グロウン〟と呼ばれる運動で、ハワイ人としてのアイデンティティを強く打ち出した文化活動みたいなもので、小さなラジオ局が音頭をとって若い人たちの共感を呼んでいる。音楽的にもロックやカントリーや、勿論ハワイアンも含めての影響をふまえた上に、ホーム・グロウンの音作りをしてみようと、レコードも何枚か作った。未だ未だみんな手さぐりだし、理屈が先走っているような感もないではないが、新しい形のハワイアン・ミュージックが生れようとしている。おれ自身は昔懐しいハワイアンの方が好きだけど、ハワイのような土地からどんな新しい音楽が生れて来るのか楽しみだ。いろいろな人種や文化のるつぼのようなハワイでのホーム・グロウンの音楽は果してどんなものになるのだろうか。



INTER・PLAYという言葉がジャズ界で大流行りしたことがある。インター・プレイというのはジャズの演奏の状態を言い表す言葉で、二人なり三人なりの奏者がお互いに影響しあって密度の濃い演奏を展開していくことを表しているのだけれど、一寸言葉では説明しにくい。もちろん何人かで曲を演奏していく以上、ジャズであれクラシックであれ、奏者同志が影響しあわないわけがない。ことにジャズは即興演奏の部分が多いから、一緒に奏るプレーヤーの影響はもろに受けてしまうのだけれど、ただ影響しあって演奏している丈では余りインター・プレイとは呼ばない。もっと奏者同士の親密な関係といったものが生れて来ないとインター・プレイにはならない。同じピアノ・トリオならピアノ・

トリオの演奏でもドラムとベースの奏るリズムに乗ってピアニストが弾きまくるやり方もあるけれど、それとは違ってピアノ、ベース、ドラムがそれぞれからみ合って曲があやなして進んでいくのもある。前者がオスカー・ピーターソン・トリオだとすれば、後者はビル・エヴァンス・トリオだろう。このビル・エヴァンス・トリオのようなのをインター・プレイと呼ぶのだと思う。同じ即興演奏でも随分違うものだ。たとえばジャム・セッションのような時にはインター・プレイと呼べる状態が生れることは少い。だいたいジャズ・プレイヤーは唯我独尊型が多いからどんどん自分を主張した演奏をしかけて来る。ことにジャム・セッションになればなおさらのこと、周りにおかまいなしに吹きまくり弾きまくる奴が多い。そして自分のパートがすめばあとは知らん顔といったのが多い。それはそれで面白いし、唯我独尊の集りが又一つの大きなパワーを生んでスイングして魅力があるのだけれど、インター・プレイと呼ばれるものになると、もっと相互のからみ合いが重要になって来るので、プレイヤーのコンビネーションもむずかしくなってくる。

　ジャズの演奏なんて可成りいい加減なところがあって、たとえばピアノを弾いていても、その曲のメロディーとコードさえ判っていれば適当に付き合って居られる。誰かがソロをしているバックなんか全く制約なんかないし、そこが即興演奏の良いところ、勝手気ままにコードなんか打ち鳴らしていれば結構つとまってしまう。〃やっこさん大分乗って来たな、もう少し乗せてやろう〃とか〃つまんないソロ長々とやりやがって〃とか、〃次の休憩に飯喰いに行こう〃〃あの女の子一寸良いな〃なんて考えながら適当に遊んでいれば済んでしまう。でもインター・プレイと呼ばれるようなのは、そんなことをして居られない。うかうかしてると置いてけぼりを喰らってしまう。相手の出す一音一音に気を配り、それに反応して音を出さなければならないし、こっちの出した音に対しても相手が何か仕掛けて来たりするから、出す音は責任持って出さなければならないので、とてもスリルがある。

　なんでこんな話を書きだしたかと言うと、チック・コリアとゲーリー・バートンのデュオを聴いたからだ。二人ともおれの好みのプレーヤーだし、チック・コリアのピアノ、ゲーリー・バートンのヴァイブ共に一級品、その巧さはもう誰でも知っているところだけれど、この二人の演奏がとっても面白かった。二人の音楽的な傾向はそれほど大きく違わないし、又この二人ならお互いの音楽に合わせるなんてことも楽にできる人たちだけど、どうしてもインター・プレイにならないのだ。誰が考えてもチック・コリアとゲーリー・バートンだったら最高のインター・プレイができると思うだろうけれど、二人の演奏でインター・プレイと呼べるような瞬間はとても少い。とても素敵なデュオなんだし、繊細なプレイでエキサイトさせてもくれるけれど、いつもどっちかが伴奏に回って、からみ合いが少いのだ。お互いに相手を立て過ぎると言うか、尊重しすぎると言うか、達者な人たちだから相手を上手に乗せるし、それは心持の良いジャズになっているのだけど、仲々二人とも相手に斬り込もうとしないのだ。二人ともが建設的にすぎるのだ。二人ともが素晴しいミュージシャンでそれが建設的に奏るのだから、とても質の高い音楽になっているのだけれど、仲良く手を取り合ってといった感じで、二人の斬り合いを期待したおれには不満が残った。

　同じチック・コリアでも、ハービー・ハン

イラストレーション＝舟橋全二



コックとのピアノ・デュオは一寸違っていた。同じピアニストということで競争心があるからかも知れないが、この二人のデュオはスリリングなインター・プレイだった。真剣勝負ってな雰囲気もあって可成り引き締ったプレイだった。お互いに秘術をつくして斬り合う風で、なにより聴いて楽しいのは斬り込み方より返し方なのだ。片方が何かの手で斬り込むと相手がどう受けて返すかが楽しい。ハービー・ハンコックならこんな時あの手で返すだろうと想像していると、こっちの期待を裏切って、予想もつかないやり方で斬り返

したり、またそれをチック・コリアがとぼけてかわしてみたり、時にはおれの期待通り真正面から受けて見たり、二人ともピアノを弾くことでは自由自在の人だからそのやり取りが凄く面白かった。ことに〝あ、この辺から気を合わせて盛り上げていくな〟と思う間もなくどちらかがふっとはずして後から追いかけていくところなど、ゾクゾクするほど面白かった。ボルグとコナーズのテニスの試合の球のやり取りにも似てその駆け引きが面白いけれど、スポーツと違ってその音のやり取りは決して相手を打ち負かそうとしたり、失敗を誘おうとしたりするものでないだけに遊びとしては高級な感じがする。もっともおれがチック・コリアなんかと奏ったらすぐ打ち負かされてしまうけど、とにかくすぐ真剣勝負なんかにたとえてしまうけれど、音楽をそんな風にたとえるのは良くないな。音楽はそんな悲壮なものじゃない。

そもそもインター・プレイなんて言われだしたのはビル・エヴァンスとジム・ホールのデュオが最初だった。それは素敵なアルバムで〝アンダー・カレント〟というタイトルなのだけど、この二人のインター・プレイは実に見事だった。そこには斬り合いなんてイメージは出て来ない。しかしお互いに端正に厳しくせまり合う。斬り合いといったような荒荒しさは無いが、静かに鋭くせまり合い、そして暖かくつつみあう。もともとビル・エヴァンスもジム・ホールも知的な演奏をする人だし、演奏のスタイルにも似たところがあるので二人のいきの合ったインター・プレイは実にしっくりいって迫力がある。どちらも主とならず、どちらも従とならず、どちらもが主であり従であり、お互いの発する音のエネルギーが時に引き合い、時に寄り合い、微妙なバランスを保ちながら美しい音楽を創り上げていた。そこには二人の性格を表すような、端正で静かなぶつかり合いとからみ合いがあった。チック・コリアとハービー・ハンコックのからみ合いは、子猫がじゃれてふざけ合ってるような感じがあって楽しかったけれど、ビル・エヴァンスとジム・ホールのからみ合いはもっとひっそりとしていて、秘めやかなインティメイトなものだった。二人の顔を思い出すと気持が悪いけれど、一種エロティックな瞬間すらあったのだ。

ビル・エヴァンスという人はこのからみ合いが殊に好きだったようだ。初期のトリオでのスコット・ラファロのベースとのからみ合いも凄かった。それまでのベースと言えばリズムをきざむのが普通だったし、多少パターンが変っても基本的にはリズムを保つのが役割りだったのだが、スコット・ラファロのベースはその役割りを離れてメロディックに動いてビル・エヴァンスのピアノにからみ合っていた。その二人のあやなす関係は実にしっくりといっていてそれまでにないピアノ・トリオのスタイルを創り出していた。スコット・ラファロが事故死して、その後エディ・ゴメスなどが一緒にやったけれど、どうしてもエヴァンス・ラファロのインター・プレイの緻密さには及ばなかった気がする。

スコット・ラファロもビル・エヴァンスも、もうこの世には居なくなってしまったけれど、彼らが生み出したとも言えるインター・プレイの形はこれからもいろいろのミュージシャンが試みて呉れるだろう。そう思ってチック・コリアとゲーリー・バートンのデュオに期待したのだけど、一寸残念だった。

前号でフランク・シナトラが引退前はゴードン・ジェンキンスと付き合って無いと書いたのは当方の全くの思い違い。不勉強おわびして訂正いたします。

# 映画の夢・夢の女⑥

## ——リタ・ヘイワース

文・山田宏一
画・山口はるみ
提供・マンズワイン

テクニカラーだったら燃えるような赤毛(オーバーン・ヘア)だったにちがいない長いブルネットの髪をなびかせ、身体にぴたりとはりついたノーストラップの黒いサテンのイブニングドレスを着て、同じ黒の、オペラグローブのような、長い手袋(グローブ)を手から腕まですっぽりとおおうようにはめ、すべるような足取りでキャバレーのステージに躍り出てきて、スポットライトを浴び、暗闇のなかの男たちの無数の視線を心地よさそうに受け流しながら、彼女は、〈だってみんなママのせい……(プット・ザ・ブレイム・オン・メイム)〉と軽快に、たのしそうに、踊るような調子で、歌いだす。と、黒い闇に囲まれたモノクロの映像が、なまなましく、なまめかしく、躍動した。

しなやかに、かろやかに身体をゆすって歌いながら、彼女は、両腕を頭上に長々と伸ばし、まるでストリップ・ショウで女が床に寝転んで両脚を高く上げ、ゆっくりとガーターをはずしてストッキングをスルスルとすべらせながら巻き取ってゆくような感じで、彼女の腕から長い手袋(グローブ)を抜き取ってゆくのであった。リタ・ヘイワースを一九四〇年代のハリウッドのセックスの女神に決定的に祭り上げた『ギルダ』のこの〈手袋(グローブ)のストリップ〉は、『ガンモール/おかしなギャングと可愛い女』のハイカラ・チャーリー(マルチェロ・マストロヤンニ)やリタ・ヘイワースの背信にロマネスクな霊感を得たマヌエル・プイグならずとも、身も心も——ほとんど倒錯的に——狂わずにはいられないほどのエロチックな衝撃であった。

『ギルダ』のリタ・ヘイワースは、若い男(グレン・フォード)を誘惑し、夫(ジョージ・マクレディ)を死に追いやるのだが、この三角関係における二人の男は、じつは敵対する存在ではなく、ただどちらか(あるいはどちらも)が死ななければならないというだけのお膳立てのように思えた。悪女には男のいけにえが必要なのであり、三角関係はそのいけにえを悪女の祭壇に供えるための儀式にすぎないのである。モノクロのフィルム・ノワールのリタ・ヘイワースには黒のイブニングドレスがよく似合ったが、たしかに、『ギルダ』の彼女の肩と胸と背中を大きく見せた黒のイブニングドレスにしても、愛人(シャルル・ボワイエ)を死に追いやる『運命の饗宴』の彼女の金のスパンコールをちりばめた黒のイブニングドレスにしても、このいけにえの儀式にふさわしい悪女リタの礼服であり、愛する男たちへの哀悼をこめた喪服だったのだ!

『ギルダ』につぐ『上海から来た女』が悪女リタの神話に運命的なオトシマエをつけることになる。天才と美女の遭遇と言われたオーソン・ウェルズとリタの結婚から生まれたこの最も美しく最も天才的なフィルム・ノワールが衆愚の不眠症をいやす麻薬とヘンリー・ミラーによって定義されたハリウッドの映画の夢をいやおうなしにぶち破ってしまったとしてもしかたがなかった。天才市民ウェルズは、誰も描かなかったリタ、誰も知らないリタの魅力をお見せすると宣言し、まず、映画の製作発表の記者会見の場でみずからハサミを取って、リタの長いふさやかな髪をばっさりと切ってみせ、さらに、映画のなかでその赤毛をブロンドに染めてしまった。リタ・ヘイワースがこの映画で演じたヒロインは、大金を一人占めしようとして男たちをつぎつぎに惨殺し、無実の水夫(オーソン・ウェルズ)をその殺人犯に仕立て上げてしまうという、かつてないすさまじい悪女であった(しかも、彼女は、いつも、天使のように美しい金髪をかがやかせ、清楚で純白なドレスに身を包んでいた)。ラスト・シーン——サンフランシスコのチャイナタウンのルナ・パークの〈鏡の間(ミラー・ハウス)〉における惨劇の果てに銃弾を受けて倒れ、助けを求める瀕死のリタを、水夫ウェルズは見捨てて去っていく。不眠症をいやされなかった衆愚は、自分たちの赤毛のリタを勝手にブロンドのショートヘアに変え、金といういやしい目的のために男たちを食いものにする性悪女におとしめ、そのうえ——たとえ悪女であろうともヒロインは屈強な水夫の腕に抱かれて死ぬべきなのに——彼女を見殺しにしたウェルズをゆるさなかった。『上海から来た女』はハリウッドの最も呪われた映画になり、天才と美女の別れの映画になった。その後、マルガリタ・カルメン・カンシーノという本名を持つこのスペイン人の血をひく情炎の女、『血と砂』と『カルメン』のヒロインは、映画よりも現実の人生を情熱的に生きることになる——渚の果てにこの愛をかげろうのように追いつづけて見失うまで。





# 浮世絵の美意識は、世紀末のヨーロッパに飛火した。

## ジャポニスムとアール・ヌーボー

ハンブルク装飾工芸美術館所蔵／世紀末ヨーロッパに開花した日本美

[illegible]めて浮世絵を目に[illegible]19世紀末[illegible]の[illegible]
いかばかりだったろう。
それは、全ヨーロッパを席巻したアール・ヌーボーと[illegible]
美術様式への影響を見ればわかる。
日本美術が、大陸文化の時代の感性と[illegible]て開花した[illegible]作品の[illegible]
グラフィックの分野を選び約200点を展示中です。




「うちわ」1881/2

会期＝4月19日(日)まで
主催＝西武美術館／朝日新聞社／ハンブルク装飾工芸美術館
後援＝外務省／文化庁／ドイツ連邦共和国大使館／東京ドイツ文化センター
テレビ朝日／朝日イブニングニュース社
入場料＝一般700円(600円)／大・高生500円(400円)／小・中学生300円(200円)
( )内は前売・団体20名以上料金

# 西武美術館

西武百貨店池袋店12階 木曜休館

日中アニメーション文化交流のためのシンポジウムと上映。

# 中国上海美術電影制片廠作品展

——アニメーション——

会期＝4月3日(金)~8日(水)　第1回上映：午後3時~4時30分／シンポジウム：午後5時~7時／第2回上映：午後7時~8時30分
主催＝日本アニメーション協会／中国上海美術電影制片廠作品展実行委員会
料金＝会員・前売り1,600円／臨時会員1,800円
紹介作品＝哪吒鬧海：1979年・カラー・35㎜／好猫咪咪：1979年・カラー・35㎜・日本初公開／その他13作品

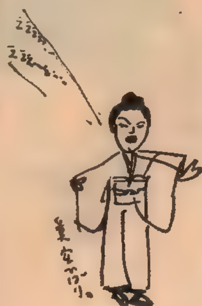
# Studio 200

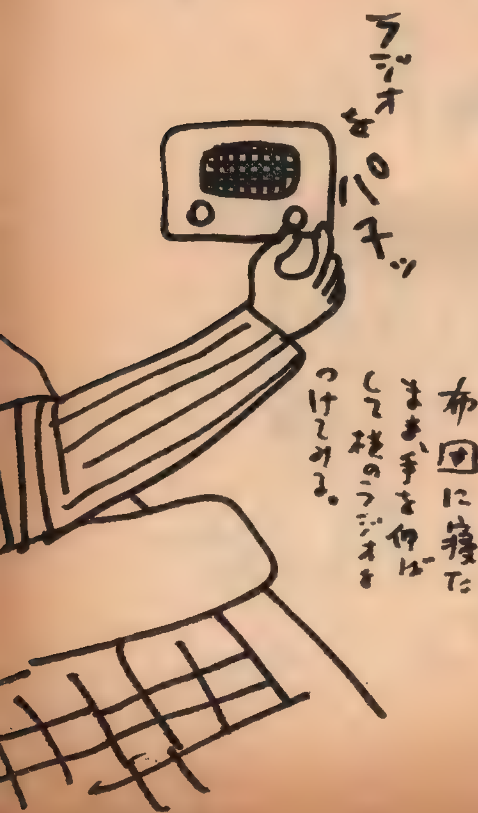
予約お申し込み・お問い合わせ：スタジオ200(西武百貨店池袋店8階)電話981-0111大代表(内線)5328-9

# なんとなく、新丸子。

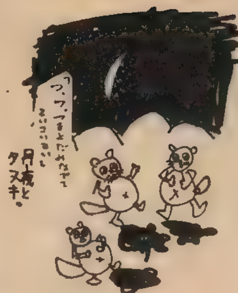
船橋全二・文　湯村輝彦・画

布団に寝たまま、手を伸ばして横のラジオをつけてみる。なんと朝から、美空ひばりさんの「リンゴ追分」が流れている。嬉しくなる。そのあと島倉千代子さんの「りんどう峠」でもかかってきたら最高なんだけど、それは無かった。つーきよにーつきよーに、そおっと、えええええええーえええーえええ、えええーえ…。月の光の中で白いリンゴの花びらが風にそっと散った……。何ときれいな表現なんだろう。きれいな唄だ。世界中の唄の中でも傑作の一つだろう。ぼくが、この間迄働いていた、カリフォルニアでのスタジオで、よくこの唄は仕事しながら口づさんでいた。隣りの相棒ハーレーに、つきよの——という部分にきたとき、「そのつきよは何という意味?」と聞かれた。



月夜の事だと教えてやる。理由を聞くと、むかし彼が幼稚園にいた時、先生が日本の「しょじょ寺の唄」をみんなに教えてくれ、変な発音でも結構今でも覚えていた。ぼくもつけ足してやりながら「つ、つ、つきよだみなでてこいこいこい」と一緒に唄ってやった。子供の頃おぼえた唄っていうものは大人になっても結構、歌詞を忘れないもんでその時も改めて感心する。ぼくだって「荒城の月」の「ちーよのまつがえ、わけいーでし……」なんて意味が何だか解らないけど、覚えているもんねえ。まあそれはどうでもいい。




朝だ。起きてみる。カーテンをそっとめくる必要はない。何故ならまだカーテンは取りつけてないからです。ガラッとガラス窓を開ける。いいお天気だ。窓の外は渋谷のビル街。晴れているのに、東邦生命ビルも第一勧銀の事務センターのビルも見えない。当然だ、どこにあるのかも知らない。カラスが飛んでいく、大きなカラスだ。神宮の森に住んでるカラス達なんだろうが、とに角ここら辺はカラスが多い、バタバタ飛んでいる。

アッアー・アッアー・アーアーアー・アーアー・アーアー、どうしてもぼくにはカーカーとは聴えないのだけど、ここにしばらく住めば、あのそれぞれ違った声色が何を意味するのか解ってくるのだろうか?。聞けば食ってるものは街のゴミらしい。ぼくはまだ日本に帰って来てから日も浅いので、曜日によるゴミの出し方に慣れてなく、分別ゴミは何を意味して、燃えないゴミ、燃えるゴミは食い物が入っているやつか、入れちゃいけないのかよくわからないのだけど、あのカラス達は、今日は何曜日で、今日のゴミは食えるゴミだとこっちに貯っているぞ……なんてまさか曜日で覚えているわけじゃあるまいね。




カラスと云えば、この間、青画廊の主人の青木さんが要らなくなったガスストーブがあるので、舟橋さん必要でしたら、というのでいただ

く事にした。その時青木さんの所から、ぼくのアパートまでそのストーブを乗せライトバンを運転してくれた、青木さんのもとで働いている和田さんという、小柄でとても美しい人が、運転中ずっと、はなしてくれた。彼女が小さい頃、一羽のカラスが近所のお風呂屋さんにまよい込んだ。居合わせた大人達がドギマギしている中、彼女がつかつかと近づいて、バサッと抱きかかえた。その時の大きな手ごたえのある重量感が素晴しく、それ以来カラスが大好きになっちゃったの……ウフフ、それにね、わたし都会に住むドブねずみも大好きなの、何か大都会のその中で自分だけで必死に生きている動物が、わたしいじらしくて、いとおしくてとっても好きなの……。いい話だ。でも、でっかいんだよねえ、あのカラスの口ばしなんて。今度、和田さんにあった時は、ぼくが住んでたミルヴァーレーの動物の事はなしてあげよう。街中をのそのそ歩いている大きな野性の鹿、色とりどりの鳥たち、ぼくの住んでたアパートの部屋の真下に住みついてしまったタヌキ一家の話など……でも和田さんは、そうゆう自然に恵まれた土地に住んでる動物達には余り同情しないかも知れない。

　窓の下から、いい声が聴えてくる。「サオヤー、サオダケ――」いいひびきだ。「アーアー、アーアー」、見上げれば、又カラスが一羽、

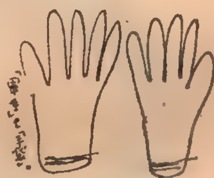


むかいのビルのテレビアンテナに止った。

　仕事が一段落したので今日は新丸子の実家にたまっている手紙を取りに行く。外に出る、結構まだ寒い。今日は特に寒い、先日古着屋で買った綿入ればんてんを着ているのに手だけは冷える。途中の呉服屋に寄る、

「手袋ないですか？」

「ありませんけど、軍手ならありますよ」



　軍手も手袋だよね――

「それちょうだい」

純綿で出来た素晴しい手袋だ、定価80円、安い。お金を受け取りながら、おじさん

「おたく個性的な格好してるね――、やっぱし、そうゆう方の御商売？」

　変に思われるのがやだから

「はい、そうです」

「いいねえ、いいよお――」。

あとで、そうゆう方の商売……というのは何の方面なのかなあと

思う。原宿駅に向う。どうしていつもここら辺は、ウンコ臭いんだろう、畑で匂うこやしの匂いはそれなりにとても好きなんだけど。この近くの下水のマンホールのフタがいつも開いているんじゃないのだろうか?。この「話の特集」の編集部は、その原宿のどまん中にあるので、編集部の人たちには本当に同情してしまう。電車に乗りいったん渋谷駅で下りる。東横線に乗る前に駅前の食品街をのぞいてみる。あるわ、あるわ食いもの天国。いつもここに来ると、ただ通り過ぎるつもりがつい30分、一時間と興奮して過ぎてしまう。食品の種類の多さ、そしてそのバリエーション。漬物コーナーを見て歩くのも好きだけど、ぼくは特に魚の干ものを見るのが好き。余りの美しさに見とれてしまう、きす、かます、あじ、さより、ひらめ……じいっと見入ってしまう。ぼくの左右にもこれ又おばさんとおばあさんが、じいっと覗き込んでいる。ぼくが「うまそうだねえ」と声をかけると、右のおばさん




「そうなのよ、ここはいつもいいものが置いてあんのよ」

「でも結構高いね、これ見て、このしたびらめ一匹、一二〇〇円だよ」

すると今度は左側のおばあさん

「頭の一という数字、間違えてつけたんじゃない、無くてもいいねえ」

いい事云うなあ、このおばあさん、全く同感、嬉しくなっちまう。でも本当に高いよここは。だから今日は買わない、新丸子で買おう。



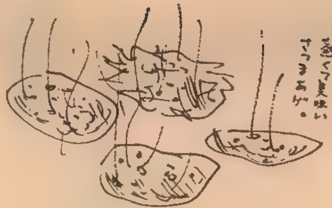
作者26才の頃。

新丸子駅。ここは、ぼくが生れて育った地だ。むかし、不二拳闘ク

ラブのあったとこ。よくこのホームに当時のボクサー、前溝や勝又が電車待ちで立っているのを見たもんだ。前溝とは、町をロードワークしている姿にも、よく出逢った。勝又は電車の中で、ぼくのまん前に坐ったことがあった。意外と背は低かった。彼の手を見たいんだけど、見ちゃいけないような気がして時々視線は手からそらした。彼は当時東洋ジュニア・ライト級チャンピオン。これ又当時ピカ一の世界フェザー級一位だった帝拳の、高山一夫との一戦は今でも忘れられない。予想では勝又断然劣勢、一方高山は自信満々のピーク。事実、試合が始まるや、高山のやや一方的。中盤、勝又こりゃやばい、と思っていた矢先、勝又、必殺のカウンター気味の内側からの右アッパーカット、高山のあごにもろに命中。腰が完璧に入っていた。まさに勝又必殺の一発。高山、ガスンと崩れ落ちるや、マットに大の字。そのまま意識不明。ゆっくりと自分のコーナーに歩いていった、勝又のあの背中姿。勝又にとっても一生一代、男の勝負だったろう。不二拳というのが今でもあるのかは知らない。10年以上も前の話だ。ピストン堀口を生んだ不二拳、ちょっとニヒルな翳りのある拳闘、不二拳じゃなきゃ生れないボクシング、そんなボクサーがそこにはいた。つまり神風特攻隊式ボクシングか。そして、当時の吹きっつぁらしの、新丸子の長いホームは、冷い風をうけて立っている、そんな勝又によく似合ってた。




ぼくの家は東口だが、西口の医大通りを歩いてみる。夕方の買い物かごの人達でいっぱいだ。斎藤写真館も昔とそのままだ、ここでは10年前初めて日本を出る時のパスポート用の顔写真を撮ってもらった。照てられたライトがまぶしかった、その時の二階もそのままだろう。その二、三軒先が、さつまあげ類を揚げているお店。揚げたてが道にはみ出した台の上に並べてある、うまそうでみんな買いたくなってしまう。おばさん、油のはねしみたカッポー着を着ている、そして「おいしいよ――」。ミルヴァーレーに住んでいた頃、よく友人らと食いに行った隣町サウサリートの日本レストラン「ふるさと」でも給仕のおばさん達まっ白いカッポー着を着ていた。あれも良かったけど矢張りカッポー着というものは、こうやって着ていて欲しい。さつま揚げ



と云えば、トロントでの親友マーティーとキニー夫婦もさつま揚げが大好物で、よく日本食品店に行っては袋入りのを買いこんで、車の中で窓の外に降る雪をみながら、ほおばったっけ、彼らにこんな揚げたての、あったかいやつを食わせてやりたい、何というだろう。この間のクリスマスには、ニュージャージー州に帰っている彼らより楽しいカードが届いた。鳩と植物の絵柄のあるガラスコップの写真のカードだ。

とに角ぼくも、そこで二種類買う、勿論すぐ食べてしまう、熱くて美味い。その向いのお店はお茶屋さんだ。のり二帖買う、これは矢張りトロントにいる日塔君に送るもの、日塔君、お世話になりました、どんなに遅くあがり込んでも酒と美味いもの作って食べさせてくれた奴だ、ありがとう。店のガラス棚にカン入り椎茸茶を見つける、これは去年の春、一時ぼくが日本に帰ってきた時偶然知り合ったイレーヌと一緒に飛騨高山に旅行した折、そこで初めて飲み彼女が欲しいというので一個買いスイスにお土産として持って帰った。これも又彼女に送ってやろう。コンクリート製の立橋を渡り、東口に出る。駅前の花屋のおばさんより梅の枝一本だけ折って売ってもらう、「一〇〇円でいいけど、本当に一本でいいの?」オヤジの仏前用だ。途中の魚源のとこで何か魚を買っていこう。行けばまだ開いてない、隣りの八百作のおばさんにきくと、まだ早いからとか。肩をすぼめての「ヘェイ、いらっしゃいー」「酒もやめたいんだけどよー、タバコの方がむずかしいんだってよ。酒は一日一回だけまあ飲みたくなんだろう、でもタバコは一日何十回って吸いたくなるんだもんなあ」と云ってた、この魚源のお兄さんは、ぼくの大好きな人だ。ぼくの家は、二軒長屋、の、その片面、庭なし、あるのはものほし二本。ぼくの生れた家だ。母が、ぼくがまだお腹に入っていて歩けないので、大八車の上に坐らされ、牛に引かれてここに引っ越してきたという。







しばらくすると、玄関がガラガラと開く。

「えー、ごめんください」

魚源のお兄さんが入って来た。

「さっき、来てくれたんだってねえ」

「え、よくわかりましたね」

「八百作のおばちゃんに聞いたんだよ」

見ると大きな皿をかかえている、余りもんだけど……と云うけど見りゃわかる、素晴しく上等のまぐろの刺身だ。上っていただく。




「そいでよー、まあ俺たちほそぼそと寄り合いでやってんけど、結局のとこ大手のスーパーにゃーかなわねえんだよなあ、だからあとは結局生きのびるには、スキンシップしかないもんな」と肩をすぼめる。
「すいません、スキンシップって何ですか」
「つまりさー、何ていうのかなあ、買ってもらうお客さんに一対一サービスっていうのか……そいで、アメリカの方じゃ、どうなってんのかねえ、スーパーマーケットというのは？」
「ぼくは、将来は大きなスーパーマーケットのシステムというのは無くなると思うのね、確実に滅びると思う、つまりアメリカじゃ、いくらスーパーマーケットできれいに売っても、その今お兄さんの云う、スキンシップっていうの、それが無い事の味気無さにもうみんなへきえきしているし、みんな、そのスキンシップに飢えているから。将来確実に滅びると思うの、予言するよ」

この町の多摩川よりのはずれには、大楽院というお寺がある。昔は木造、どっしりとした見事な造りだった。境内のまん中にある一本の




大きな木の回りには、夏によく黒あげは蝶が集っていた。子供の頃つかまえたくても、高くにヒラヒラしていて、届かなく、ただじっと網を手にして見上げていた。昔一度、秋も暮、そのお寺を写生した事があった。高校の頃だろう。黒々とした大きな屋根と紅く染ったケヤキの群を水彩で描いた、夕方だったと思う。今の大楽院は新幹線建設のため敷地も半分けづられ、新しくコンクリート建て。たまたまその絵を母の知り合いである、町内の内山さんというおばさんで、そのお寺の檀家の方が持っていて部屋に飾っておいた。最近おしょうさんが来て、その絵を見て是非ゆずって欲しい、と云われ今はそのおしょうさんが持っているという事だ。そんな話を母から聞く。その絵は今でもなんとなく覚えている、少し見てみたい気もする。



その晩は家に一泊する。夜は横になってずっとテレビを見る。塩をかけたきゅうりが美味い、何故か矢鱈と漫才コンビで番組に出てるのが眼につく、余りテレビが面白くなったとは思わない。







次の日、午後遅く渋谷のアパートにもどる。ぼくの住んでるアパートの横に小さな神社があります。その昔は、だだっ広い田んぼに、ぽつんと立っていた神社だそうで、今は勿論アパートと家の谷間にひっそり。鳥居も参道も30メートル程はある。その時のどが渇いていたので、そこの水飲み場で水を飲もうと近づくと、可愛い五、六歳の女の子二人ひしゃくで水を飲んでいる。余りに可愛いので、ついいたずらっ気を起こし、

「あのー、この水の中にお砂糖入ってんの？」と聞く。しばらくじっとぼくの顔を見つめていた、そのうちの一人の子が、

「あのー、たぶん入ってないとおもいます」

うーんと声が出なくなってしまった。何という素直な正直な心なんだろう。全く感動してしまった。ヤボな質問した自分が全く恥しくなる。部屋に戻ってからも、余りにさっきの女の子の言葉が嬉しいので、何とか誰かに聞せてやりたくウズウズ。近くに住んでる友人の山田はる江さんにダイヤル。

「お電話ありがとうございます、ただ今ちょっと出かけております、

この電話は留守番電話になっております。ピッという音が………。ピッ」

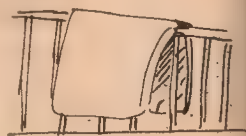
「舟橋です、今、実はあのー、このアパートの隣りに神社がありまして――」どうも録音電話というと、こんな話がしどろもどろ説明調になって、

「それで――」そのうちツー。時間切れ。話の三分の一もいってない。ひとまず受話器を置く。このままじゃ山田さん変な電話だと、気味悪く思うに違いない、何で神社とこのアパートの位置関係を話しに電話




したんだろうかと。一時間後に又電話する。今度はいらっしゃった。ほっとする。

はっと気がつくと、このアパートの屋上に布団を昨日から干したままだ。雨が降らなくてよかった。じっとり冷たくなっている布団をかかえ階段をかけ下りる。そう云えば、この春には友だちの、イレーヌ、リンダ、キャロルがそれぞれスイス、カナダ、アメリカより訪ねてくる。新丸子の実家より布団も、もう一組は持ってこなくては。それともベッドを一つ買うべきか、結構高いし、何とか仕事のお金がそれまでに入ってくれればいいんだが。かち合ったらどうするか、まあ



屋上のフトン干し。

ここで雑魚寝してもらうしか仕方ない。リンダはウドンに野菜と肉を混ぜ、しょう油で味つけ、それを油でいためたのが好きだった。必ず又これを作ってやろう。イレーヌは料理が得意だから、何か美味しいもの作ってくれるかも知れない。ストーブをつけ、その前に布団を置く、部屋の中も暖まってきた。サテ、今晩は何を食うか。ソバが残っている、それにさっき途中で買ってきた野菜のテンプラをのせ、テンプラソバといこう。これで今日はもう外に出なくてもすむ。外は今日も寒そうだ、又いい声が聴えてきた。






「いーしやきいもー、おいも、おいも、おいも、おいもー、やきたてのおいもだよー、ほっかほっかのおいもだよ――」

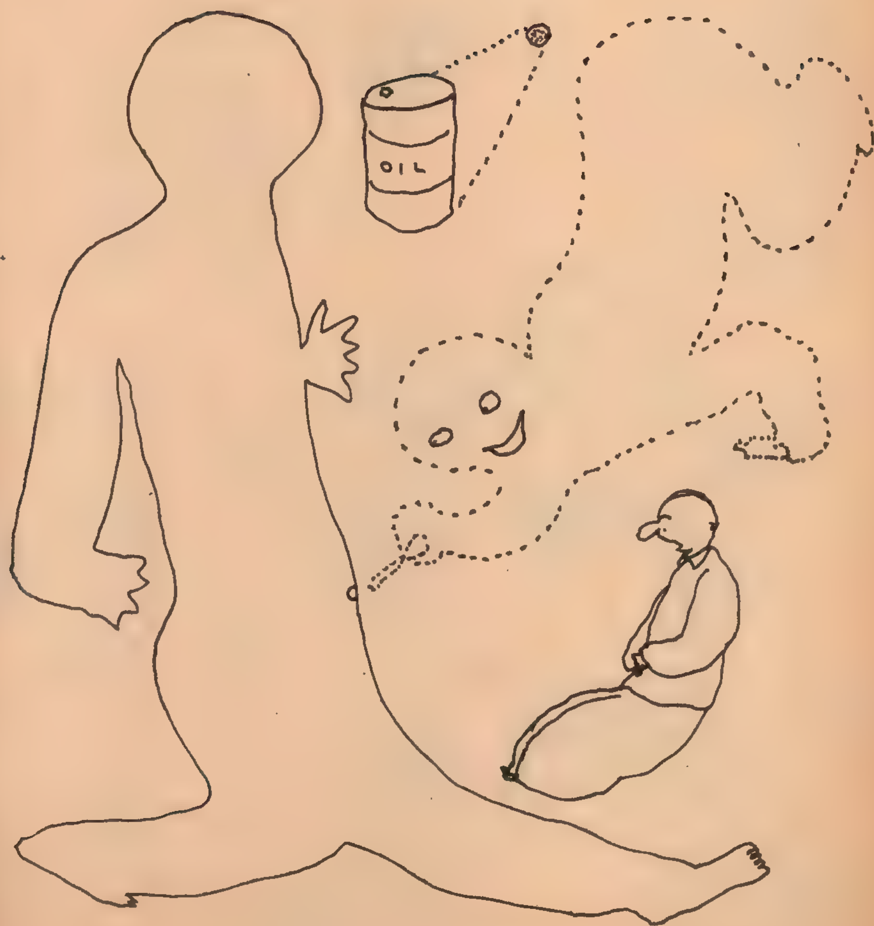
突然電話が鳴る。母からだ。

「あのねー、ぜんじ、さっき魚源のお兄さん、食べてくれって又お刺身、お店しめてから持ってきてくれたよ」

今月の事件——❺

# ヘソごま窃盗団

長新太



この数日、原因不明の腹痛症状のため、救急車などでかつぎ込まれる患者が、全国各地で激増していることについて、警視庁は当初、ウイルスなどの感染によるものと推定していたが、この腹痛は人為的なもので、複数の何者かが「ヘソのごま」を掘り出して盗み取ったのが原因と発表した。

七日午後二時十五分ごろ、東京武蔵野市境南町七の三四六の二五八、かすみ荘、会社員、村山修さん(三五)が、下半身を露出して気絶しているのを訪ねてきた友人が見つけた。

武蔵野署の調べによると、村山さんは六畳間の中央にへの字になって、腹部をおさえるような格好で気絶していた。気絶推定時刻は六日午後六時ごろの模様。これより十分後ぐらいに、一人の男が暗やみにまぎれて村山さんの部屋から逃走するのを、隣の部屋の主婦A子さん(二六)が目撃している。

A子さんの話によると、不審な男は、ウイスキーのミニボトルのようなビンと、耳かき棒のようなものを持っていたらしい。

また、正気にもどった村山さんは「いきなり男が侵入して来て、あっという間にこちらのズボンをおろし、ヘソの中に棒を入れてかき回すんです。いやはや、びっくり仰天して気が遠くなってしまいました」と話をしている。当局がもっと早く腹痛患者からくわしく事情を聴取していれば、ウイルス感染などではなく人為的なものということが、明らかになっていたと思われるが、犯人が侵入してからヘソごまを盗み去るまでの時間が、想像を絶するくらい早いため、被害者たちは何が何だかわからなかった、というのが実情のようだ。また、事実を述べても世間の物笑いになる、という気もちがあったようだ。

警視庁は、各界の権威と協議を重ねていたが、この「ヘソごま窃盗団」は、世界的な石油危機による脅威から自衛するため、ヘソごまを集積して「ヘソごま油」をつくり出すのが目的の秘密結社の仕わざと断定した。

政府は十日午後閣議をひらき、精製されたヘソごま油が、そのうち大量に出回るとみて、業界にきびしく対処するよう緊急声明を出した。いっぽう、全国せんべい販売組合は、十日午後「このたびのヘソごま事件は、ヘソごま油を石油のかわりに使うため仕組まれたものとは、ぜんぜん違う。これはヘソごまをふりかけた新しい〝ヘソごま入りせんべい〟をつくるために、ヘソごまを集めている者がいるのである」と声明を発表した。このため通産省が間に入り、近日中に石油とせんべいの業界の代表との話合いが行われることが必至となった。

事態が意外な方向に発展したため困惑している警視庁は、水泳のとき使用する「耳せん」を、ヘソにするように呼びかけている。

いずれにしても、国際石油資本(メジャー)に反抗したグループか、はたまた、画期的なせんべいを製造するグループの犯行か、皆目見当がつかないが、ヘソごまのほとんど無い出ベソの人だけがニコニコしているヘンテコな事件である。

**草野葉三郎博士(植物学)の話**　ごまはインドまたはエジプトが原産です。約1メートルくらいの高さの植物で、夏になると淡紫色の花が咲く。種子はご存知のように食用及び油をとる。白、黒、黄といった品種がある。問題になっている「ヘソごま」は黒ごまですかな。わたしとしては石油よりも、せんべいのほうがいいが、入れ歯なのでちょっと困る次第です。わたしのヘソごまは、もうコチコチで油っ気はありません。

column［シネマの煽動装置］——cinema

# ときにはイギリスと口にしてみるのも映画的環境の活性化には有意義なことである

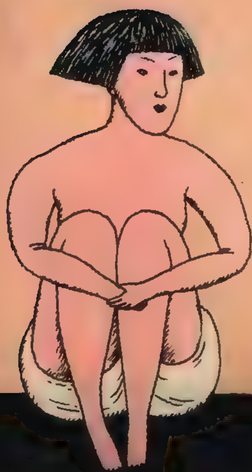
蓮實重彦

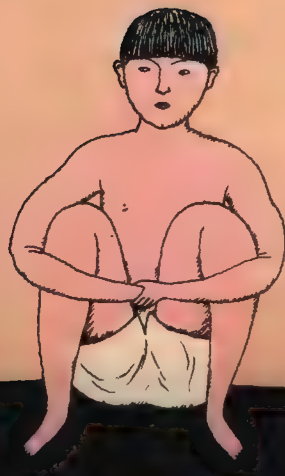
どうせはじめから大して期待していたわけではないし、マーチン・スコセッシやウィリアム・フリードキンにフィルム的感性の動揺を求めることじたいが映画的不条理だと確信してもいたわけだが、ときにはこちらの予想が何かの拍子で狂ってしまってもいいではないかと自分にいいきかせつつ映画館に足をはこぶと、やはり『レイジング・ブル』も『クルージング』も惨憺たる出来ばえで、なかには小栗康平の『泥の河』などを引きあいに出しながらやはりモノクロームには捨てがたい味があるなどと口にする人もいるが、いくら何でもそんな郷愁の対象となるほど映画は頽廃しているわけではないのだから、画面が白黒であろうと色彩であろうとそんなこととは無縁の領域でフィルム体験は生きられるべきであり、そもそも何度か別の場所で触れる機会もあったように、映画が視覚芸術だなどというのは途方もない虚構にすぎず、事実、人は決して画面などは見ていないし、またかりに、スクリーンに視線が注がれているのが確かだとしても、そこに推移する光と影の戯れを万遍なく視界におさめうる瞳など絶対にありうるはずもないのだから、モノクロームの美しさなどというものは、映画とは無縁の次元でいくらも語られうる神話として、むしろ視線を廃棄する説話論的な機能しか演じえないはずであり、実際、モノクロームでありながら、マルセル・カルネの『天井桟敷の人々』のように、その楽しみ方はいくらもあるとはいえ、そのどれをとっても映画作家マルセル・カルネの凡庸さしか証拠だてぬようなフィルムはいくらもあるし、またマイク・ニューエルの『ピラミッド』のように、積極的に評価さるべき細部はほとんど見当らぬし、別だん凝りに凝っているわけではない色彩設計や照明技法にもかかわらず、間違いなくカラー映画として楽しめる作品だって上映されているのだから、要は、環境としての映画に向けて存在をありったけおし拡げ、瞳に限らず、皮膚であれ粘膜であれ、持てる肉体の表層という表層をくまなくフィルムとの遭遇に向けて解放させればそれでよいわけであり、そのときモノクロームも捨てがたいといった神話はきれいさっぱり視界から一掃されていると思うが、ところでジャック・カーディフがカメラを担当しているからというわけではないが、この『ピラミッド』はなかなか捨てがたい作品で、そもそもエジプトに長期ロケされたにもかかわらず、例のピラミッドと呼ばれる観光資源がほんの数ショットしか画面に姿をみせず、それもカイロの病院で娘を出産しつつある妻のもとに急行すべく、そうするほかはなかったから仕方なくその脇を主人公がジープで駆けぬけるだけという物語の設定が如何にも洒落ていて、あるいはピラミッドの脇を走りぬけるのは、産気づいた妻を病院に収容する救急車の方だったかもしれないが、とにかくそれがあくまでも二義的な背景にすぎずカメラの真の対象ではないといった撮り

方は誰にでもできるといった芸当ではなく、とりわけ斎藤貞郎の『子どものころ戦争があった』を見るために改めてつきあわされてしまった『遙かなる山の呼び声』などと比較してみると、その風景の映画的処理の手腕がきわだってくると思うのだが、オカルト映画としての興味はほとんど満足させられることがないとはいえ、離婚した夫婦をめぐるホーム・ドラマ、とりわけ父と娘をめぐるメロドラマとしてはなかなかに綿密な演出設計がほどこされていて、考古学者である父親の助手と娘とが、つまらない芝居を見せられたあとで散歩するテームズ河のほとりの場面とか、娘が精神分析医と交わす会話の場面とかは、むしろ繊細すぎるほど念入りな画面からなっており、こうした挿話の演出に手を抜いていないから、やがてその霊が娘に乗り移ることになる王妃の墓の中で、父親と娘とが演じる一瞬の抱擁が妙に生なましいエロチシズムを漂わせもするのだろうが、たとえばカイロの病院のエジプト人女医の顔がよかったとか、その他、アラブ映画では名高い役者に違いない人たちの顔もよかったとかさまざまな細部が記憶によみがえって来て、ことによるとこのマイク・ニューエルという監督、こんごはかなりの仕事をするのではないかとさえ思われもするのだが、まあ傑作でも何でもないがあまり不快な印象を残さないこの『ピラミッド』を見ながら考えたのは、『クルージング』や『レイジング・ブル』のそれなりに野心的でないわけでもなかろうハリウッド系の監督の作品の出来ばえのひどさにひきかえ、このマイク・ニューエルにしても、あるいは『レイズ・ザ・タイタニック』のジェリー・ジェームソンにしても、イギリス系の合作映画の作り手のほうが、作品のスケールに見あった職業意識に徹しているというかつてのハリウッド的伝統を踏まえていはしまいかという事実であり、それは『エイリアン』でリドリー・スコットに接したところから感じられた現象でもあるのだが、モンティ・パイソンのシリーズのように典型的なイギリス映画はひとまずおくとしても、『ラフ・カット』をはじめとする最近のドン・シーゲルの作品がそのいくぶんかちぐはぐなユーモアによって明らかにイギリス映画的な感性を身にまとっていったり、初期のヒチコックのもとで撮影監督としての修業をつみ製作者として40年代の英国映画のある種の風格確立に大きく貢献したロナルド・ニームが『ポセイドン・アドベンチャー』以来のハリウッドのパニック映画の大作に主導的な役割を演じているといった点を考えあわせると、今日のイギリスの作家たちの生きる映画的な環境はことによるとハリウッドのそれよりも遙かに濃密なものであるかも知れず、第二次大戦後、たんにデヴィット・リーンとキャロル・リードといった二大巨匠の活躍にとどまらず、パウェルとプレスバーガーのコンビやマイケム・バルコンといった個性ある製作者たちや名高いハンマー・プロなどに支えられて充実した仕事ぶりを残してきたイギリス映画界が、才能ある中堅監督の海外流出や外国資本との合作を余儀なくされてその輪郭を曖昧なものにしてしまったとはいえ、現在の日本の映画的言説におけるイギリス映画という一語彙の不在はいかにも不健康というほかはなくジェームズ・ボンド・シリーズさえが若者たちからアメリカ映画と見なされてしまうとき、黒白映画の魅力に目覚めたりするぐらいなら大して期待できるわけでもなかろうニコラス・ローグやケン・ラッセルの新作を通じて、イギリス映画の虚構的不在を反省してみることの方が気が利いていると思う。

矢吹申彦画・讃

# 対位法





難しいですよ



容易(たやす)いですわ



よほど痛（いた）いです



よほど為いです



私にはやっぱり無理ですよ

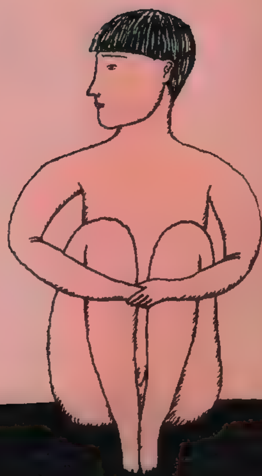


無理なところが良いのです



駄目ですね

駄目でした





# 放送基準の「公共」

戸井十月
とチーム・ザ・ラッツ
森田幹雄　滝田義博



『新聞紙法』、『出版法』、『映画法』、そして『放送用私設無線電話規則』（逓信省令）——人々の〈表現〉をがんじがらめにすべく作られた、戦前の法律共である。勿論、現在は『憲法二一条』の保障のもとで、タテ前上これらはすべて廃止されている。そう、ただひとつの例外を除けば……。唯一、未だに露骨な法律的規制のもとにあるメディア、それは、放送である。いわゆる「電波二法」と呼ばれる法律——『電波法』と『放送法』によって、我らがメディア、放送は、未だに官製の足枷をはめられているというわけなのだ。『電波法』とは、〝電波の公平且つ能率的な利用を確保することによって、公共の福祉を増進する〟（第一条）ことをタテ前とするもので、具体的には、放送局をはじめとして、すべての無線局の免許、設備、運用、監督などのあり方について規制している。

『放送法』は、〝放送が国民に最大限に普及されて、その効用をもたらすことを保証する〟、〝放送の不偏不党、真実及び自律を保証することによって、放送による表現の自由を確保する〟、〝放送に携わる者の職責を明らかにすることによって、放送が健全な民主主義の発達に資するようにする〟なる三つの原則に基づいて、〝放送を公共の福祉に適合するように規律し、その健全な発達を図ることを目的とする〟（第一条）ものらしく、具体的には、NHKの設立、NHK及び民放の放送番組、放送運営についてなど事細かに規制している。

　こういった法的規制は、新聞、出版、映画などの表現ジャンルにはみられない。なぜメディアの中で、放送のみがこうした規制を受けなければならないのか。つまり、口実はこうだ——放送は電波という特殊な伝達手段を用いるものである。放送に利用できる電波の周波数には限りがあるため、無制限に利用するわけにはいかない。そのため、法的に電波

の利用を特定の者に限定することが必要となる。こういった技術的側面から、法的な規制を認めざるを得ない理由がある……。

さらに、こうした官製の法律による規制は、具体的な放送内容（表現内容）にまで及んでいる。たとえば……

一、放送事業者の訂正放送等の義務（第四条）

一、国内放送の放送番組の編集等の規定（第四四条）

一、公職候補者に対する同等放送の義務（第四五、五二条）

これらの規制は、許可を得た者が、その周波数に関して、独占的な使用権を認められるという放送の特性に基づき、その公平性の確保を義務づけるためのものと理由づけられている。

つまり、〝みんなのモノだから勝手はさせないぞ〟というわけだ。しかし、誰が〝みんな〟を代表するのか、できるのか……それは明示されていない。

勿論、『放送法』においても、先に示した〝放送法の目的〟（第一条）や〝放送番組は法律に定める権限に基づく場合でなければ、何人からも干渉され、又は規律されることがない〟（第三条）にみられるように、放送番組編集の自由は、一応謳われてはいる。

しかし、その一方で〝国内番組基準の制定〟（第四四条二）や〝国内放送の放送番組審議会設置〟（第四四条三）を義務づけているのだ。要するに、内部検閲と自主規制を強要しているのである。そうである以上、そこにあるのは、あくまで〝与えられた自由〟と〝見逃がされた自由〟でしかない。新聞などのように、自由意志のもとに生まれたメディアならまだしも、郵政大臣から許可を受け、その監督下に置かれている放送事業は、その生い立ちからして国家の直接的な統制下にある。そのため、前述の内部検閲、自主規制は、いっそう保守的、体制的にならざるを得ない。だからこそ、以下の如きお寒い状況の中で、我らが放送は日夜悶々としているのだ。

『民放便覧』（一九八〇年）によれば、〝放送法は放送番組については編集の自由を保証し、その是非の判断はもっぱら放送事業者の自主規制に委ねている〟とある。その民放各社が自主規制する上で、まず基本とするものは、「日本民間放送連盟」（東京都千代田区紀尾井町三の二三／以下、民放連）によって制定された『放送基準』であろう。

「民放連」とは、テレビ、ラジオの民放各社が共同の利益と親睦を図る目的で設立された組織で、現在、ラジオ単営一七社、テレビ単営五八社、ラジオ・テレビ兼営三六社の計一一一社が加盟している。

この一一一社にくまなくゆきわたっている『放送基準』には、〝人権〟から〝広告時間基準〟まで、一八章、一四三項目にわたって放送表現の基準となる目安が示されている。また、この『放送基準』の各項目について詳しく説明し、さらに関係法令や、どんな場合にその規定が適用されるか、という具体的な事例を示した『放送基準解説書』なるものもつくられている。

ところで、この『放送基準』及び『放送基準解説書』が、放送を正しく導いているかどうか……それが、モンダイだ。

たとえば、〝三章　児童および青少年への配慮〟の中の〝未成年者の喫煙、飲酒を肯定するような取扱いはしない〟という項目には、事例として次の三つがあげられている。

ⓐ未成年者の喫煙を主体にしたドラマがあったが、喫煙の場面を極力制限し、最後に未成年者の喫煙は法律に違反することを強調した。



ⓑ夜のショー番組に十代のパパを募集するフリップカードを出したところ、その中にマンガでタバコをすっている場面があった。(厳重注意)

ⓒ中学生を対象としたお昼のワイドショー番組で、司会者が次のような質問をした。「タバコをすったことのある人は?」未成年者に対する質問としては好ましくない。(厳重注意)

望ましい例としてあげてあるⓐのように、未成年者の喫煙を主題としながら、喫煙の場面を極力さけたドラマにどれほどの説得力があるというのか。又ⓒのような質問は、単に好ましくないという理由だけで避けて通ってよいのだろうか。この二つの例からは、社会的な問題に積極的にとり組もうという態度が基本的に欠けている。

同じことは、〝二章 法と政治〟の中の〝ホームドラマの本編中に「シナソバ」という言葉が放送された〟という実例に対して、〝国際親善を害するおそれがある〟ため厳重注意するという態度にも現われている。問題を単なる用語のレベルにおとしめているのだ。

各放送局では、こうした用語による多くの問題をさけるため、『言い換え集』や『禁句集』なるものをつくっている。

これは〝きまりというほどのものでなく、放送にたずさわる者の目安として社内用につくられたもので、対外的に見せる(知らせる)というものではない〟(テレビ朝日広報室)というように、一般にはあまり知られていないが、その中には、次のようなバカバカしい言い換えも目安として示されている。

給士→ボーイ　　芸人→芸能人
日雇い→自由労働者　運ちゃん→運転手
産婆→助産婦　　移民→海外移住者
老婆→老婦人、老女　毛唐→外国人
裏日本→日本海側　後進国→開発途上国
日本のチベット→岩手県北部
片手落ち→不公平　淫売→売春
すけこまし→漁色家、プレイボーイ
きんたま→こうがん　アオカン→野合
くそッ!→うぬッ!　しりぬぐい→後始末
ちくしょうッ!→ざんねんだッ、くやしい
(汐文社刊「差別用語」第四部、未公開資料総覧より)

確かに、何気なく無意識に使われた言葉が、時と場合により、人を不当に差別したり、侮辱したりする場合が多々あるのは事実だ。だが、単に言葉さえ言い換えれば事足りるとい

った発想で、一体何が解決するというのか。真実は、ひたすら藪の中に身を隠すだけではないのか。

以上のような、自主規制の実態を目のあたりにすると、〝公共の福祉、文化の向上、産業と経済の繁栄に役立ち、平和な社会の実現に寄与することを使命とする〟（民放連『放送基準』前文）といった御立派なセリフも、途端に色褪せてしまう。

ちなみに、NHKの場合はどうなのであろうか。

『放送法・第四四条二』に従って、NHKも独自の『番組基準』を持っている。しかし、〝基準の解釈についての一切の責任は、現場のチーフ・プロデューサーが持っています。その判断基準となる情報を流すのが、考査室の役目になるわけです。たとえば、山口百恵の「プレイバック・パートII」の中に「真っ赤なポルシェ」という言葉がでてくるが、これは商品名であるので、放送に出すのは好ましくない、といった具合です〟とNHK広報室、部次長、宮沢勇氏は言う。

そこでさらに、考査室の業務内容などについて直接NHKに取材を申し込んだが、〝いやー、それはカンベンして下さい〟と、これはあっさり拒否された。何をカンベンして欲しいのか、よくわからなかったが……。

実際、民放、NHKを問わず、どこの放送局でも、自主規制がしっかり守られているかどうかをチェックする機関として、編成局の中に考査部（室）を置いている。ここが放送局における自主規制の砦になっているわけだ。そこで、この考査部（室）なるものが、具体的にどのような業務を行っているのか、以下は、日本テレビの場合である。

㈠台本の事前考査

台本原稿は印刷所へ廻る前に必ず編成課においてチェックし、放送基準に抵触する所があれば、訂正、又はディレクターに連絡して演出上注意をし、要すればカメラリハーサルに立合う。抵触甚だしい場合は台本を拒否し、作家に書き直しを要求することもある。

㈡出演者の調整

（略）

㈢要注意歌謡曲のチェック

（ディレクターより編成課に提出される）『確定連絡表』の歌謡曲の曲目をチェックして、民放連制定の『要注意歌謡曲』に抵触するものがあった場合拒否する。

㈣CMフィルム、スライド、ナレーション等の考査

（略）

㈤他からの持込フィルムの考査

（略）

㈥『考査月例』の作製

月一回、抵触例を記載した『考査月報』を作製し関係各部に配布する。

㈦民放連考査専門部会、東京考査懇談会との連絡

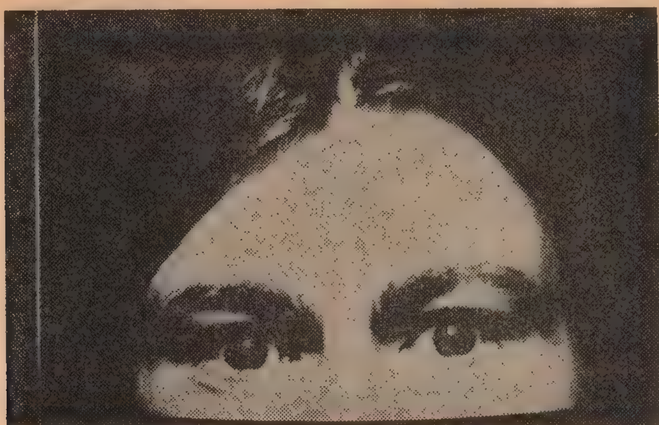
民放連考査専門部会において、民放各局と考査上の連繫を保ち、東京考査懇談会（毎月一回開催）において在京各社と特にCMの協定を行う。

㈧オンエア番組のモニター

随時、機会ある毎にモニターを行い、事前考査に洩れた抵触例があった場合にはチェックして各ディレクターに連絡、注意を促す。

（日本テレビ『大衆とともに二五年（沿革史）』より）

一八章にわたって、コマゴマと定めてある『民放連・放送基準』も、最終的な判断は民放各局にまかされる。しかし、音楽に関して



だけは別扱いになっている。これは、『日本民間放送連盟放送音楽などの取り扱い内規』によって定められており、この審査で一旦「要注意歌謡曲」に指定されると、最低でも五年間（その後再び審査）は、すべての民放から完全にシャット・アウトされることになる。

現在約百曲ほどあるといわれる（自主規制のため、一般には公開されない）この要注意歌謡曲には、その取り扱いにA、B、Cの三つのランクがある。Aは、『網走番外地』（高倉健、藤圭子ほか）、『ゴッド・セイブ・ザ・クイーン』（セックス・ピストルズ）のように、一切放送してはいけない曲。Bは、『ジュテーム・モア・ノン・プリュ』（ジェーン・バーキンほか）のように、メロディは使ってもよいが歌詞は放送してはいけない曲。そしてCは、ピンク・レディの『S・O・S』、『オーチンチン』（ハニーナイツ）のように、問題の個所を削るか改訂すれば、放送してもよい曲（たとえば、『S・O・S』は曲中のモールス信号音を除けば放送OK）、といった具合である。

審査項目は一〇項目に分かれているが、大きくまとめると、次の四つに分類できる。

㈠国家や個人などの名誉、身障者の感情を傷つけるもの（一〜三項）
㈡犯罪、暴力など反社会的なもの（四項）
㈢風俗的にみて、ワイセツ、退廃的、下品と思われるもの（五〜九項）
㈣その他（一〇項）

しかし、どれも抽象的な表現に終始し、具体的な基準はほとんど明らかにされていない。

この審査は「民放連」、「放送基準審議会」の下に設けられた「放送音楽専門部会」が行うもので、その構成は、部会長に現在TBS常務取締役及びテレビ本部長の濱口浩三氏。委員として、TBS、文化放送、日本テレビ、ニッポン放送、短波放送、テレビ朝日、フジテレビ、東京12チャンネル、FM東京、ラジオ関東、以上一〇社から一人ずつ、各社の音楽資料責任者（レコード室部長など）、又は考査責任者（考査部長、編成部長など）によって組織されている。

〃委員の任期は2年。だいたい四〇歳代の方が多いですね〃と、民放連審議室の坂戸範子さんは言う。〃以前は定例会という形で定期的に行ってきましたが、最近は問題となる曲が減ってきていますので、問題が起きたと

きに集まるというように変ってきました。昨年一年間で、確か四～五回ほどでしたね。審査は、レコードとなった曲をすべてチェックするというのでなく、民放各社から出された審査要求に基いて行なわれます。委員を出す局がすべて東京の放送局であるのは、単に集りやすいという地理的な理由によるものです。

「要注意歌謡曲」に指定された場合は、内規に示された一〇項目のどれに抵触するかという理由を付けて、すぐに全国の民放各社に文書で連絡します。決定した曲に対して、それはおかしいのではないか、といった反論は、これまで例がなかったように思います。もちろん自主規制ですから、外部の方には知らされませんし、その曲をうたっている人にも連絡は入りません。指定されている曲のリストですか？　いえ、それはちょっとお見せすることはできません……〃

作詞者に事情を聞くわけでもなく、直接の受け手となる視聴者（聴取者）の意見を聞くわけでもなく、たった十一人の人間によって秘密のうちに決議されるその審査は、まるで戦事中の検閲制度を思わせるものがある。

TBS「パック・イン・ミュージック」のDJとして知られる、TBSアナウンサー林美雄氏は、〃ボクが要注意曲の中で、個人的に不満に思うのは、憂歌団『おそうじオバチャン』と下田逸郎『ラブホテル』の二曲だけ。確かに聞いていて、品性的に不快にさせられる曲もありますから、完全にオープンにするべきだとは思いません。しかし、その選び方については多少疑問が残りますね。どういった人たちが、どういう理由で指定するのか、という点にね。事実『ラブホテル』は、ラブソングとして名曲の部類に含まれるものだと思いますよ。たぶんそのストレートなタイトルと、歌詩の「まわるベッドの上、あかりは少しだけ、鏡で揺れながら、抱き合うだけよ」あたりがひっかかったんでしょうね。いきなり通達としておりてくるのでなく、もっと話し合いのようなものが持たれればいいですね。いってみれば、これは曲をかける当事者の問題でしょ。その曲、そのミュージシャンをどれだけ愛しているか、ということですよ。だから音楽から離れた所にいる人には関係ないと思うんだ。だから、できる限り現場で番組をつくる人間の自由裁量にまかせるというのがいちばんいいのではないですか。表現すれば、何かしら問題が起きる。その問題を恐れるがゆえの処置であるなら、ボクはマズイと思いますね〃

確かに、「要注意歌謡曲」の審査には首を傾けたくなるものがいくつかある。たとえば林氏の発言の中に出てきた、『ラブホテル』という曲が、審査基準の〃(五)情事を露骨に、あるいは扇情的に表現しているもの。肉体関係を連想させるおそれのあるもの〃にひっかかったものであることは間違いない。だとすれば、七八年にヒットし話題となった『時には娼婦のように』はどうして放送が許されているのだろうか。

時には娼婦のように（作詞　なかにし礼）

時には娼婦のように
淫らな女になりな
真っ赤な口紅つけて
黒い靴下はいて
大きく脚をひろげて
片眼をつぶってみせな
人さし指で手まねき
私を誘っておくれ
バカバカしい人生より
バカバカしい
ひとときがうれしい　ウー

（以下略）

この歌詞を読んで、〃情事を露骨に、あるいは扇情的に表現して〃いない、〃肉体関係を連想させるおそれ〃がない、と言える人が何人いるだろう。このあたりの審査の基準は、実に不明瞭、且つ曖昧である。

とは言え、「要注意歌謡曲」に定められた曲は、現実に五年間、日本全国の放送から締め出されてしまうのだから、事は大きい。不明瞭で曖昧なままにされていたのでは納得できないのだ。

NHKの場合はどうなっておるのか。七六年四月から一年間、NHKラジオ『若いこだま』のパーソナリティを務めたロック・ミュージシャン、パンタはこう言う。

〃NHKにはレコード資料室というのがあって、そこのレコードの要注意曲には、A、B、Cのハンコが押されているんだ。確か、Aが全部ダメで、Bが詩はダメだがメロディだけならOK、Cは部分的な詩を直せば放送していい、となっていたと思う。ボクの頭脳警察時代のレコードは、ほとんどみんなABCのどれかにひっかかっていたね。まあ、それは、ボクらの曲に毒があったという証拠だと思うから、ある意味では喜ぶべきことかもしれない。

しかし、実際の放送では、こうしてチェックされているはずの曲も、けっこうかけていましたよ。ほとんど問題はなかったですね。最終的には、現場の判断にまかされているのでしょう。だから、それほどきびしいチェックもなく、わりと自由にできたように思うなあ〃

また現在、NHK・FMの『サウンド・ストリート』でパーソナリティを務める森永博志氏によれば、〃だいたい、政治的な歌、人権を無視した歌、わいせつな印象を与える歌、商品名の入った歌は、何らかのカタチで要注意曲の指定をうけているんじゃないかな。それから、CMがらみの曲も、そのキャンペーン中は、難しい。あとは、事件をおこしたシンガーの曲もムード的にはかけられない。たとえばシャネルズなんかはまだムリだろうね。もちろん、ヒット・チャートでトップにでもなればわかりませんけどね。

こういったことは、ほとんどチーフ・プロデューサーの判断にまかされているから、逆に民放よりも自由かもしれない。事実、下田逸郎の『ラブホテル』もNHKで何度か、かかったことがあるし、泉谷しげるの『オー脳』（民放ではAランクの要注意歌謡曲）もかけたことがありますよ〃

七〇年代前半に比べ、最近では、民放の指定する「要注意歌謡曲」は約半分に減っていると言われる。しかし、決して事態がよい方向へ向っているのではない。前出の林氏は、

〃最近はどの番組もヒット曲中心の番組構成になっている。だから、かからない曲、歌えない曲をつくってもしかたがないというわけで、作詞する段階ですでに自主規制してしまうケースも十分考えられます〃と言う。成程、自主規制の精神は、現場でモノをつくる人間たち一人一人の中に深く、無意識の内に浸み込んでいるらしい。

最後に、日本テレビが開局二五周年を記念して編集した『大衆とともに二五年』なる本の一部を紹介する。

――（自主規制は）差し当たり現状を維持、推進していかなければならないが、今後の媒体力の強大化とテレビに対する国民の批判力の増大を考えれば、全社員の自主規制への意識、認識がいよいよ必要となってくるであろう。（考査業務の将来的展望）

――放送に携わるすべての者は、この（テ

レビ）強大な力の意義を十分に認識し、放送に際しては、自主規制を強めなければならない。（放送における自主規制）

かくの如くして、『憲法二一条』の〝表現の自由は〟、増々我々から遠去かってゆく……。

**資料①　日本民間放送連盟「放送基準」**

民間放送は、公共の福祉、文化の向上、産業と経済の繁栄に役立ち、平和な社会の実現に寄与することを使命とする。

われわれは、この自覚に基づき、民主主義の精神にしたがい、基本的人権と世論を尊び、言論および表現の自由をまもり、法と秩序を尊重して社会の信頼にこたえる。

放送に当たっては、次の点を重視して、番組相互の調和と放送時間に留意するとともに、即時性、普遍性など放送のもつ特性を発揮し内容の充実につとめる。

一　正確で迅速な報道
二　健全な娯楽
三　教育・教養の進展
四　児童および青少年に与える影響
五　節度をまもり、真実を伝える広告

次の基準は、ラジオ・テレビの番組および広告などすべての放送に適用する。（条文中「視聴者」とあるのはラジオの場合「聴取者」と読みかえるものとする。）

**一章　人　権**

(1)　人命を軽視するような取り扱いはしない。
(2)　個人・団体の名誉を傷つけるような取り扱いはしない。
(3)　プライバシーをおかすような取り扱いはしない。
(4)　人身売買および売春は肯定的に取り扱わない。
(5)　人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない。

**二章　法と政治**

(6)　法令を尊重し、その執行を妨げる言動を是認するような取り扱いはしない。
(7)　国および国の機関の権威を傷つけるような取り扱いはしない。
(8)　国の機関が審理している問題については慎重に取り扱い、係争中の問題はその審理を妨げないように注意する。
(9)　国際親善を害するおそれのある問題は、その取り扱いに注意する。
(10)　人種・民族・国民に関することを取り扱うときは、その感情を尊重しなければならない。
(11)　政治に関しては公正な立場をまもり、一党一派にかたよらないように注意する。
(12)　選挙事前運動の疑いがあるものは取り扱わない。
(13)　政治・経済問題等に関する意見は、その責任の所在を明らかにする必要がある。
(14)　政治・経済に混乱を与えるおそれのある問題は慎重に取り扱う。

**三章　児童および青少年への配慮**

(15)　児童および青少年の人格形成に貢献し、良い習慣、責任感、正しい勇気などの精神を尊重させるように配慮する。
(16)　児童向け番組は健全な社会通念に基づき、児童の品性をそこなうような言葉や表現はさけなければならない。
(17)　児童向け番組で、悪徳行為・残忍・陰惨などの場面を取り扱うときは、児童の気持を過度に刺激したり傷つけたりしないように配慮する。
(18)　武力や暴力を表現するときは、青少年に対する影響を考慮しなければならない。
(19)　催眠術、心霊術などを取り扱う場合は、児童および青少年に安易な模倣をさせないよう特に注意する。
(20)　児童を出演させる場合には、児童としてふさわしくないことはさせない。特に報酬または賞品をともなう児童参加番組においては、過度に射幸心を起こさせてはならない。
(21)　未成年者の喫煙・飲酒を肯定するような取り扱いはしない。

**四章　家庭と社会**
（略）

**五章　教育・教養の向上**
（略）

**六章　報道の責任**
（略）

**七章　宗教**
（略）

**八章　表現上の配慮**

（略）

**九章　暴力表現**

(59) 暴力行為は、その目的のいかんをとわず否定的に取り扱う。

(60) 暴力行為の表現は最小限にとどめる。

(61) 殺人・拷問・暴行・私刑などの残虐な感じを与える行為、その他精神的、肉体的苦痛を、誇大または刺激的に表現しない。

**一〇章　犯罪表現**

(62) 犯罪を肯定したり犯罪者を英雄扱いしたりしてはならない。

(63) 犯罪の手口を表現するときは、模倣の気持を起こさせないように注意する。

(64) とばくおよびこれに類するものの取り扱いは控え目にし、魅力的に表現しない。

(65) 麻薬を使用する場合は控え目にし、魅力的に取り扱ってはならない。

(66) 睡眠薬・覚せい剤などの乱用を肯定したり、魅力的なものとして取り扱ってはならない。

(67) 銃砲・刀剣類の使用は慎重にし、殺傷の手段については模倣の動機を与えないように注意する。

(68) 誘かいなどを取り扱うときは、その手口をくわしく表現してはならない。

(69) 犯罪容疑者の逮捕や尋問の方法、および訴訟の手続きや法廷の場面などを取り扱うときは、正しく表現するように注意する。

**一一章　性表現**

(70) 性に関する事柄は、視聴者に困惑・嫌悪の感じをいだかせないように注意する。

(71) 性衛生や性病に関する事柄は、医学上、衛生上、教育上必要な場合のほかは取り扱わない。

(72) 一般作品はもちろんのこと、たとえ芸術作品でも、極度に官能的刺激を与えないように注意する。

(73) 性的犯罪・変態性欲・性的倒錯などの取り扱いは特に注意する。

(74) 全裸は原則として取り扱わない。肉体の一部を表現するときは、下品・卑わいの感を与えないように特に注意する。

(75) 出演者の、言葉・動作・舞踊・姿勢・衣装・色彩・位置などによって、卑わいな感じを与えないように注意する。

**一二章　視聴者の参加と懸賞・景品の取り扱い**

（略）

**一三章　広告の責任**

（略）

**一四章　広告の取り扱い**

（略）

**一五章　広告の表現**

（略）

**一六章　医療、医薬品、化粧品などの広告**

（略）

**一七章　金融、不動産の広告**

（略）

**一八章　広告の時間基準**

（略）

**資料②**　日本民間放送連盟放送音楽などの取り扱い内規

日本民間放送連盟は、歌謡曲などの放送にあたり、家庭とくに青少年への影響を考慮して、連盟放送基準にもとづく取り扱い内規を定め、自主規制を行なうものとする。

I　審査基準……次の各項に該当するものは、要注意とする。

1　人種・民族・国民・国家について、その誇りを傷つけるもの。国際親善関係に悪い影響を及ぼすおそれのあるもの。

2　個人・団体・職業などをそしるとか、軽蔑するとか、その名誉を傷つける表現をしているもの。

3　心身いずれかに欠陥のある人々の感情を傷つけるおそれのあるもの。

4　違法・犯罪・暴力などの反社会的な言動を扱い、共感をおぼえさせ、もしくは好奇心をいだかせるおそれのあるもの。

5　情事を露骨に、あるいは扇情的に表現しているもの。肉体関係を連想させるおそれのあるもの。

6　不純な享楽や不倫な関係などを扱い、社会の秩序をそこなうおそれのあるもの。

7　男女の性的特徴を扱い、品位に欠けるもの。

8　頽廃的・虚無的・厭世的あるいは自暴自棄的で、著しく暗い印象を与えるもの。

9　卑猥・不潔・下品・愚劣など、不快な印象を与えるもの。

10　表現が暗示的、あるいはあいまいであっても、その意図するところが連盟放送基準に触れるもの。

# からむこらむ

数年来、ぼくはずっと外為法違反をやらかして来たらしい。らしい、と書くのは、この法律の細かいことに関してはチンプンカンプンで、角栄さんがコーチャン氏に五億円もらったのを、とりあえず外為法違反で逮捕したとか、浜田先生のラスベガスの一五〇万ドルの大負けは、外為法にはひっかからなかったというのを新聞で読んで、いつもフーンと感心していただけだった。

毎年一度、仲間うちのゴルフのコンペティションがあり、ゴルフの嫌いな人にはわからなくて、むしろ腹立たしい言葉だろうが、ぼくはベスト・グロス賞というのを出している。要するにハンディなんてインチキを別にして、本当の実力ナンバーワンの人に出している賞なのだ。現金で百ドル。百ドル札一枚を進呈している。ぼくが参加出来ない年もあるが、その時は人に託して賞の提供を続けて来た。

最初はアメリカのシアーズというでっかいデパートの商品券を出したのだが、提携している西武デパートが、ドルの商品券を受け付けないので、現金にすることにした。二万ナンボなどと、円に換算せずにドルで渡すところがミソで、その頃ドルが下ったり、円が下ったりし、受けとるゴルフの実力者がニンマリとか、口惜しがるふりをしたりするのが、面白い。

これをある時、外国駐在の商社マンに自慢したら、声をひそめて、あなた、それは出す方も受け取る方も外為法違反になるからマズイですよ、と心配してくれた。別の銀行マンにきいたら、カラカラ笑って、もうそんなことは違反にならないと言う。以後いろいろな人に尋ねるのだが、意見が分れ、要するに誰も知っちゃいないらしい。なら、日本のそれ専門のお役所に電話すれば一度に解決なのだが、バカバカしくてやったことがない。だからそのまま、もしかしたら外為法にひっかかるかもしれないのを、毎年面白おかしく続けている。

賞金を出す時期の直前にアメリカにいる時は、銀行で手の切れそうなヤツをもらって、本に挿んで日本に帰る。パリンパリンを保つためだ。忘れて帰る時もあり、その時は、国内の銀行で円をドルに替えてもらう。今は国内で自由に外貨が買えるのだが、それはあくまで本人が近い将来外国に行って、自分で使うためで、日本で日本人同士が、どんなに少額でも、外貨のやりとりをしてはいけないのだ、というのが違反論者の意見だ。

そうなると、コーチャン氏関係は何だかわからなくなるが、まあいい。でも、外国から帰って来たばかりの人と、これからすぐ出て行く友人が、お互い銀行に行くのが面倒だと、円とドルの交換をしているのなんかざらだし、残っているドルをお餞別にするのも多い。こんなのが違反なら、たいていの日本人は、外為法違反者だ。誰でも、ある日突然別件逮捕、ジャジャーン！　の資格があるわけだ。

賭博法違反という名前があるかどうか知らないが、これにひっかからない人なんて、よっぽどつまらないヤツで、まあ人間のクズと言ってもいいんじゃないだろうか。

ぼくは高校の頃、麻雀でかなり小遣いを稼いでいた。芸大に入ってからピタリとやらなくなり、といったって別に心を入れ換えたわけじゃない。勉強に追われてそれどころではなかっただけなのだ。二十年程それっきりで、十年ぐらい前に、偶然、三日間の連続麻雀をやった。

某オーケストラと四国、中国地方に演奏旅行をした。「某」と書くのは、ぼくの法を敬う心のあらわれだが、松江での音楽会の最中に集中豪雨で宍道湖の水が溢れ出し、翌朝は一米を越

# 岩城宏之の

す出水で、オーケストラ全員、ホテルから一歩も出られなくなった。勿論街中すべてがストップである。テレビばかり一日中見ているわけにもいかず、楽員の多くはプロ雀士みたいなもので——だから「某」オーケストラと書いたのだ——あっちもこっちもジャラジャラ盛大だった。そこで普段あまりやらないのが四人集って、ぼくの部屋で始めたのだが、というよりは、プロ共が相手にしてくれない四人のトウシロウのさびしい部屋だった。

ホテル中に、われわれがやっているという情報が流れたらしく、二ヌケとやらでひまになったプロ雀士が、しょっ中われわれの麻雀を見に来た。まるでパンダを眺めに来るような按配だった。何故かというと、ぼくの部屋は賭けていないからなのだった。籠城が三日目になると、いつも黒山の人だかりという有様だった。

「ヘエー、こんなものを賭けないで、三日もやれる珍獣がいるもんかね」誰もが感心していた。

それ以後、再び日本で麻雀をするチャンスがなく、だが最近外国で時々やっている。大使さんの家とか、日航の人のところなんかで。勿論賭けているし、長い間のブランクも取り戻し、ドラ、ドラ、ドンドンにも馴れて来た。

凡そ賭けない麻雀なんて、それこそ珍獣扱いされる程、麻雀人口の百パーセントが千点イクラでやっているのに、当局はどうして検挙に精を出さないのだろう。警視庁詰の新聞記者さん達の、事件を待つ間のどえらいポーカーなんて有名だし、第一、当局の方々だって、千点ナンボの筈だ。その気になればお巡りさんは、赤ン坊以外の国民の全部逮捕して、大手柄をたてられるのだ。上司をふんづかまえることも出来て、カッコイイし、第一、とてもフェアではないか。

賭博行為法律的違反即取締は、清いお国のために結構だが、国が儲かるとなると、競馬、競輪、競艇、宝くじはOKなのだから、どうもわからない。私設馬券屋はお国の儲けの邪魔になるからイケナイのだ。ドリフターズの二人は運が悪い。よその国では、公営の馬券売場の横に、何十と私設屋が店をかまえているのだが。でもあの二人が、運が悪かったなんて言ってごらんなさい。新聞は寄ってたかって、反省の色がないとか、フテブテしいなんて書きまくるだろう。

それにしても朝日新聞記者の盗聴器設置事件は面白かった。今アメリカにいるので、毎日新聞しか読んでいないのだが、代議士の秘書が同じことをやったら、何日もあと追い記事が続くだろうに。「毎日」では最初の報道と、夕刊の「近事片々」のコラムの片隅に一寸カラカイが出ただけだが、「朝日」は事件を載せたのだろうか。少なくとも週刊朝日には全然出ないみたいだ。他の週刊誌の広告にも、何故かまだ出て来ない。

日本中の新聞社で働く人達と、その家族の合計は何十万人にもなるだろうが、その全員が悪いことをすることがないなんて有り得ないと思う。しかしそういう記事はまず出ない。自分のところの関係者の悪いことをデカデカと出してくれると、フェアな新聞だなあと、いつでも信用出来るのだが。しかも御同業同士は暖く庇い合う。

話がそれたが、日本国は本当にオリコウだ。国の利益を危くしない限り、外為法違反とか、ゴルフ、麻雀バクチには目を瞑っているふりをして、要するにお上は、誰でもいつでも別件逮捕出来るように、国民を泳がせていらっしゃる。

1981.3.6 CINCINNATI

## 我が友、ポリスマン

千代丸健二

980円

無法ポリスの不祥事の続発、市民と警官のトラブルの頻発は今の警察機構に問題がある——自らの逮捕体験をもとにあえて日本の警察機構に苦言を呈す

## 花柳幻舟　我が闘争

花柳幻舟

980円

旅役者の娘として生れた筆者が、どう生き、闘い、愛したかを、ユーモラスに、かつやさしく書いた、いわば〝革命的礼儀作法〟を説いた本である。

## 魔術の花　短篇小説集

由木匡ほか

1200円

〝全十六篇からなる短篇小説集。時代小説があればSF童話もある。艶笑スキャンダルは奇怪な評論家がおどろくべき事実を発表。なにやら忙しい小篇集

## ちょっとコーヒーのみに行ってます

小山内富子

1200円

軍事評論家故・小山内宏氏夫人の著者が亡き夫の三回忌に世に送った、メルヘンタッチにして至高の愛を謳いあげる感動のエッセイ集。生そして死とは

## お聖千夏の往復書簡

田辺聖子・中山千夏

950円

本誌紙上での「往復書簡」と、その後交わした数通の手紙をまとめて一冊に男や女、日常生活のすみずみの事象を忌憚なく交わした興味津津の書簡集。

## 手のうちはいつもフルハウス

久保田二郎

980円

心は戦場に在り、食は広州に在り、酒は新宿に在り、楽しみはここに在る。キラ星のごとき不滅の逸話の数々……痛快無比、抱腹絶倒の大冗談エッセイ

# 話の特集の単行本



# 黒柳徹子の『動物劇場』

## ㊹中国上海雑技団のパンダ

写真と文　黒柳徹子

子供たちの歓声と笑い声と興奮した叫び声の中で、私は夢を見てるように思っていた。
まんまるい体を、もっと丸くして、ウェイウェイ君が、でんぐり返ししてる。白と黒で、
まるで大きい、サッカーのボールみたい。ぬいぐるみのようなパンダが、いま、サーカスの照明の中で、芸をしている。木馬に乗って、大きくこぐ。ナイフとフォークで、ちゃんと御飯をたべる。おすべり。ラッパを吹く。
(来てよかった!) 私は何時も、くり返し、そう思っていた。もし芸をするパンダを見て、可哀そうだったら、いやだ! そういう気持が、私を、すぐに、このサーカスに来させなかったんだけど、この「世界でたった一匹の芸するパンダ」は、〝やらされてる〟という風じゃなく〝自分で研究しながら出演してる〟から、安心して見ていられるのです。そう(来てよかった)と思ったのは、芸そのものより、彼が芸を始めるときや、終ったとき見せる、信じられない面白さ、まじめさ、を近くで見られたことでしょう。例えば、大きなテーブルの上に寝ころがって、四本の手足の上で、本物の大きいサッカーのボールを、クルクル廻す、という芸のとき。彼は、まずテーブルが運ばれると、そばに寄って、シゲシゲと見る。それは、まるでテーブルが大丈夫かどうか、慎重に点検しているようだ。次に彼は、テーブルに、よじ登る。そして凄い、いきおいで、ドサッ!!と上むきに寝る。これはボールを廻すときに、もっとも工合のいい位置に体が来るように準備してるわけ。ところが彼は、まだ子供っぽくて(八歳)おまけに体の四分の一はある大きな頭が重いから、ちゃんと寝たつもりが、はじすぎて、頭がテーブルからはみ出して、ずり落ちそうになる。すると彼は、上半身を起し、足を投げ出した恰好で、自分の、のっかってるテーブルを真剣に見つめる。(…どうも、この場所じゃうまくない)。彼は、注意深く、お尻を左右に動かして場所を変える。そして、また、もの凄いきおいで、ドタッ!!と寝る。あれれれ? また頭が下っちゃう。起き上ると、(おかしいな?)という風に頭を掻く。この間、だまって様子を見ていた若い調教師の青年が、声をかける。中国語で。たぶん「もう少し下って、少し右だよ」といったに違いない。なぜなら、それを聞いたパンダは、すぐに、お尻をモゾモゾと動かして、まず少し下り、それから右に移動したからだった。そして、寝てみる。(丁度いい!!)。彼は納得する。その証拠に、四本の手足をパッ!と上げた。ボールが飛んで来る。足でうけとめた。次の瞬間、ボールはクルクルと勢いよく廻り始めた…。割れるような拍手の中で、彼はラッパを吹きながら、犬のひく車に乗って、ステージから消えた。ブワ〜!!というラッパの音は、いまも耳に残っている。パンダの芸は、楽しく呑気で、お客にこびない最高の芸だった。



日本の皆様"ニイハオ（今日は！）"



お散歩は気持がいい

ぼくゴリラだぞ！

そーぼく哲学⑤

# 意気消沈

山田宗睦

このところ気が重い。いくらか意気消沈のおもむきもある。疲れているのかもしれない。三月の半に人間ドックに入る予定でいる。どこかが悪くて、入院加療を要するということになった方がいいな、とも思っている。そしたらいくつかのことを整理できるチャンスだ。

ボランタリーで、市民政治運動に参加する。いろいろ、あちこちでやる。わりと律儀な方だからだんだん深入りする。気がついたときはもう逃げられない。逃げられないだけではなく、周囲が（わたしがやるのは）当り前だと見なして、いつのまにかそこの〝主〟のようにされている。とどのつまり、その運動に市民が参加してくれるよう〝お願いします〟と言わなくてはならないハメにおちこむ。どこかでひっくりかえった関係にはまっているのに気づくのである。こうなるともう、やめた、やめた、とは言えない。しかも、やめた、と言いたい。このはざまで意気消沈していくのである。

それが一つや二つではない。三つ、四つ。数えあげると五つもある。病むほかはない。病気願望をする所以である。

いったんこの消沈におちいると、もはや大

義はなんの力ももたない。世の中がこんなに危険なところへ行こうとしているのだから、ここで身をひるがえしてはいけない、と言われても、お前さんやってくれよ、俺はちょっと休みたい、という気分はいっこうに自分から去っていかない。消沈というのは根づよいもので、たんにあることがいやだと受身に拒否しているだけではなく、沈みこむことへの情熱のようなものにかりたてられている。消沈は積極的な情念である。自分で自分を消沈させる意志がある。

これまで、ニーチェのいわゆる消極的ニヒリズムについて、あるいは矢崎泰久のいわゆる「友よ、酒でものもうよ」派について、折にふれて言及してきた。そのいいかげんさ、そのうさんくささ、そのいやしさを批判してきた。

意気消沈と消極的ニヒリズムには、どこか通じるところがある。

意気消沈すると、この数年——にそれは二度かなりつよくやってきたが——、緒形昭義を訪ねる。

いちどは三年前の横浜市長選挙の最中にやってきた。横浜市長の飛鳥田一雄が、日本社会党の委員長に擬せられ、はじめは市民に横浜を捨てないと約束しておきながら、とどのつまりは捨てた。捨てただけではない。市長の後釜に自治省の事務次官をした男を天下りさせるのに手をかした。自民党から社会党にいたる六つの政党がこの男に「相乗り」した。

市民の方は立つ瀬がなくなった。選挙前にすでに市長が決ったようなものである。市民の基本的な権利——ごくわずかにのこった選挙で首長を決めるという権利——が危うくなった。わたしたち横浜市に在住在勤の学者は、この事態についてきちんとした批判だけはしようと、「市民自治を考えるシンポジウム」をつづけた。飛鳥田は市民の市政への参加ということを口にしていた。市民の参加は、たんに市長が決ってからあるのではない。市長があっての市民ではなく、市民があっての市長である。市民の参加権は、市長候補を決めるところから発動されなくてはならない。六党が密室で候補「相乗り」を決定するのでは、市民不在を決定づけるものではないか。

とどのつまり、学者たちは、市民に対し、「市民の市長をつくる会」の結成をよびかけ、市民自身が手作りで市長をつくる運動を展開することになった。

相手は、自民、新自ク、民社、公明、社民連、社会の六党である。こちらは「市民の市長をつくる会」が主体で、共産、革自連と協定を結んだ。結果は、十対一で問題にならないというのを、五対四までおいつめた。

わたしたちの運動にはいくつかの難点があった。その一つに市民の中からどうやって市長候補を決めるか、という問題があった。誰もすき好んで市長候補になろうというものはいない。市民とはそういうものだ。その市民の中から、しかし、なんとしても選び出さなくてはならない。結果として医師朝倉了がわたしたちの候補者になるのを、ひきうけてくれた。(彼は善戦した。そして一昨年の暮にこつ然と死んだ。横浜の運動をつづける中で、いつでも彼のことを思い出す。)

朝倉了が最終でひきうけてくれるまで、候補者選びは難航した。市民の会は、全市の職場、住域に、猛烈な勢いでつくられていった。最終でおよそ千二百の会、十八万人の会員になった。そのくせ、候補者は決らない。苦しい時期だった。

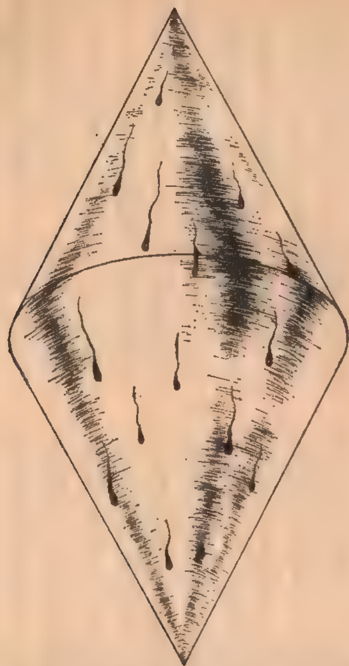
わたしはおよそ市長候補にはむかない。一箇の自由を好んで、機構の枠にはまるのを嫌う。ボランタリーに参加はするが、職業としての権力の座につきたくはない。運動に参加

イラストレーション—山口喜造

していちばんおそれたのは、候補者におしあげられることであった。だが、選挙告示の日が近づくのに、候補をひきうけるものがでてこない。このままでは運動が空中分解してしまう危険があった。

どうしても候補者がでないのなら——とわたしはホゾを噛むように——さいごは自分がひきうけるしかないだろう、と思った。たいした思想家でもないが、思想家として運動にたずさわったからには、それぐらいの責任は覚悟しなくてはならないだろう。くりかえすが、これはいやいや覚悟したことである。

ところがわたしの名が出るにつれ、共産党のほうからいろいろ横槍が入った。わたしは一九四七年から六二年まで、一五年間、共産党員だった。六二年に離党届を出して党をやめた。党員だったとき、やめるとき、その当時の問題で、その当時の党指導部とちがう意





見をもっており、それを書いたりした。このため共産党の方からみると、わたしは「反党修正主義者」ということになった。わたしが党をやめてから、さらに一五年たっていたが、これがまだ尾をひいていた。

候補者選定委員のメンバーのところに、共産党の方から、山田が出るのでは、まとまるものもまとまらなくなる、といった事がつたえられ、選定委員会の席上でも、共産党員の人が、山田が出るのなら共産党系は手をひくという発言がなされた。

この共産党の意向のおかげで、わたしは候補者にならずにすんだ。だから終局的には共産党に感謝している。だが、市民の運動の中で、自分では好まぬことであるにせよ、誰もいないときには責任をはたそうといやいやながらホゾを嚙むように決心したとき、相共に進んでいた共産党が、妙な選別でわたしを拒否したことは、やはりわたしの意気を消沈させた。

その時、緒形昭義を訪ねた。彼は建築家で群建築事務所を主宰している。予告もせずに訪ねたが、心よく迎えてくれた。彼も選挙に独特の参加の仕方をしており、事情は知っていたが、双方そのことに一言もふれなかった。

先にも書いたように、消沈は一種の情念である。そのことだけが気になり、気にすればするほどその中に沈みこむかたくなな情熱に支配されてくる。こういうときは気を紛らわした方がいいのである。

緒形といると気が紛れる。彼の独特な発想での話を聞いていると、沈みこもうとする狭搾した情熱が紛れて、まるでちがう気分になってくる。気を紛らわすアミューズの神が、二人の話をリードするようなものである。

今年の二月一四日から一五日にかけて、同じような出来事があった。共産党からたのまれてあることに協力していたのに、とつぜん真向からひっぱたかれる事態が生じた。またか、と思った。数日、そのことの波紋に対処しているうちに、こんども意気消沈してきた。

そこでふらっと群建築事務所へ寄ってみた。幸い——というのはわたしにとってで、彼にとっては不幸にも——彼はいて、ほんとは仕事があったのに、都合してくれて、真夜中までつきあってくれた。

緒形とつきあっていると、彼とわたしとがまるでちがう人間であることがわかる。ちがうけれども、というよりちがうから、彼の考え方、感じ方、発想の仕方に魅力がある。それは、わたしの考え方、感じ方、発想の仕方とちがいながら、どこかで通じるものがあり、結果として同じ判断にいたる。ちがいを通じて同じところへいたると、その同じさが、単一の同じさではなく複合的な同じさになる。単一の同じさはもろいが、複合的な同じさはつよい。

横浜市長選挙でも、緒形と組んでこの複合的な同じさの妙を発揮できたことが多い。

皮肉なことに、こんどわたしの意気消沈をうんだ原因は、この単一の同じさと複合的な同じさとの衝突からきている。神奈川県で共産党からたのまれ、革自連代表として、わたしは共産党の提唱した「統一懇談会」に参加した。この事実について、わたしは、自分が共産党とちがい、ちがうからこそ複合的な同じさの力を発揮できると考えた。この考えは、神奈川の「革新県民懇」のパンフレットにつぎのように表明されている。

「異床同夢

山田宗睦（革自連代表）

県民懇のことで、よく、聞かれる。なぜ山田さんのような人が「革新県民懇」に参加したのか、参加しただけではなく積極的に活動しているのか。

わたしは、個人のことと集団のことと、この二つのあいだにあまりちがいを設けない方がいい、と考えている。集団を個人とちがいすぎるものにしてしまうと、集団そのものが自由や平等やしなやかさ、生き生きしたところを失ってしまう。

個人が人とつきあうとき、どういう人と仲良くなり、どういう人を信用するだろうか。

なによりもまず、同じ人間はいないという前提でつきあう。石母田は自分とはちがう人間だ。伊豆は自分とはちがう人間だ。自分にないものをもつから尊敬し、自分で考えつかないことを忠告してくれるから信頼し、ちがうけどウマが合ったり肌が合うから仲良くなる。集団でも同じにしたい。そう考える。

だから、なぜ県民懇に参加したのかと聞かれると、答えは一つである。わたしは共産党とちがうから参加した。いや共産党とか統一労組懇とかいう集団とちがうというよりも、そういう集団の人と考え方や感じ方や行動のし方がちがうから、参加した。よくあれは共産党の会だから入らない、という人がいる。共産党そのものへ入れというのなら別だが、そうではなくて、共産党の人も入っている会に入るのだし、そうすると共産党一色にしないためにも入った方がいいのではないか。そのことが県民懇をも、共産党（とそこへ入っている人）をも、あるいはわたし自身の入っている集団（たとえば「市民の市長をつくる会」たとえば「革自連」）をも、あまり個人からかけはなれたものにしないのに役立つ。

統一戦線というのは、共産党とその系統の個人、団体だけが集まってもできはしない。どんなに共産党ががんばっても自党派だけでは統一戦線にはならない。当り前のことである。ちがうものが集まるから統一なのである。

戦後の日本の統一戦線の歴史をみると、どうも同床同夢型だという気がする。社会党であれ、共産党であれ、自党派系（つまり同床）のものをなるべく集めて、民主主義擁護同盟とか、労働戦線の統一とか称してきた。統一戦線というのは異床同夢型である。ちがうものがちがうから集まって、同一の目標に向けて協力しあう。

去年、八〇年代の国政革新をめざす中央の統一懇があって、全国からいろいろな人が集まった。この中央の集会でも、われわれの県民懇でも、まだまだ同床という印象をもつが、それでもずいぶんちがう（異床の）人も参加した。このとき宮本顕治さんに質問した人がいた。長野県の人だが、ここへ参加するについて地元で討議した。統一労組懇に賛成するということが、参加の条件になるのかどうか。ならないという結論を出して参加してきたのだが、共産党の方はどう「考える」か、という質問である。

宮本さんは、そのとおり、統一労組懇に不賛成であっても、右傾化に抗して八〇年代の国政の革新をめざす人は歓迎するという趣旨の答えをした。宮本さんが、ということは共産党がそう考えるのなら、わたしも参加しようと思ったことだった。

同じ立場だから集まる、という形のものがこれまで多すぎた。戦後のこの悪い習慣がいま、いろいろな組織を市民から距離のあるものにしている。市民の方は、戦後の民主主義の中で育ち、自由と平等、押しつけではなく自発性といった人間になっている。ちがうのが当り前という人間たちである。ところが政党や労働組合やその他が、同じ立場にして集めようとするものだから、政

党や大組織と市民とのあいだに、たいへんなズレがある。

ちがうから集まる。ちがうから集まろう。そういう新しい習慣をつくることも、わたしたち「革新県民懇」のだいじな努力目標になると思う。

だから訴えたい。「革新県民懇」とちがう、あるいは共産党とはちがうという人こそは、「革新県民懇」に入る資格をもった人だ。ちがう人こそ入ってほしい。ちがうということをちかって保証する。このわたしが、石母田とも、伊豆とも、江口とも誰彼ともちがうのだ。もしちがいが尊重されないのなら、第一にわたしが逃げだす。」

右のように書いたのに、わたしがその〝ちがう〟ところを表わしたとたん、共産党からはなはだ神経過敏症めいた反撃をうけたのである。わたしが、統一懇方式に批判的な意見を書いたら、統一懇に入っていて批判するとはどういうことか、というわけである。このへんが共産党にはいちばん分りにくいところらしい。共産党に入っていて共産党を批判することは許されない。革自連はその対極にある。革自連に入っていて革自連を批判するのは自由である。共産党は統一懇についても自党と同じように考えていて、入っていて批判するのはどうかと疑問に思う。革自連代表であるわたしは、統一懇について部分的な批判をもつものが、そのちがいをもったまま、統一懇に参加する方が、統一をつよめるのに役立つ、と考えている。単一の同じさは内部でのちがいを排除するが、複合的な同じさは内部にちがいがあるからこそ同じになったとき強い。そう考える。

このちがいのために、神奈川で共産党のもとめで、革自連代表として「革新県民懇」に入り、革自連方式でやったところが、ぴしゃりと叩かれた。

わたしは共産党なら当然そういう反発をするだろうと思う。またか、と思ったのは、そのせいである。だから、この衝突を拡大しようとは考えない。なるべくこの衝突が亀裂をひろげることがないようにしようと思っている。だから共産党が反論したわたしの文章(それは「いま連帯を求めて」という文章である)については、ここではふれないし、また共産党の反論に応戦しようとも思わない。

ただ、ちがうからこそ応援しようとしたのに、そこをぴしゃっと叩かれたことが、わたしの意気を阻喪させ、消沈させたことは、正直に言っておきたい。

そういう消沈のとき、緒形とあって、複合的な同じさを感ずる時をすごした。それがしみじみとうれしかったことも、正直に言っておきたい。

さて、お立会い。

男としてはぐちめいたことを申しあげた。ただ、意気消沈してみると、本論のニヒリズムについて、感じるところがあった。すでに言ったように意気消沈には人をひきこむふしぎな情熱がある。この情念は、自分を内に閉じこめ、外への対応をこばむ。なにをしてもむだだという絶望的な情熱がある。そこへ沈みこむことによって自分を甘やかす、自虐的な自己保存である。だから消沈には一種の快楽感がある。消沈はニヒリズムへの入口である。

ニヒリズム。ふしぎな精神状態である。

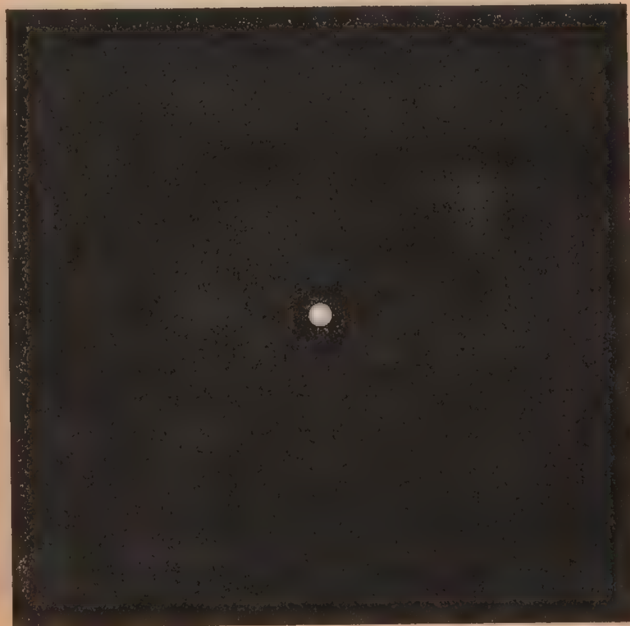
ふつうにニヒリズムは悪いものととられる。すくなくとも近代合理主義はニヒリズムを認めない。近代合理主義は——それが生じたヨーロッパでは——キリスト教とともにあった。ニーチェはこの合理主義とキリスト教との複合的な同じさを撃ち砕くのに、ニヒリズムを活性化し、積極的ニヒリズムを説い

た。ニヒリズムは近代合理主義からもキリスト教からも認めがたいものであった。

キリスト教を抜きとって、近代合理主義だけをうけとった日本でも、ニヒリズムは悪であった。虚無(ニヒル)は欠如の状態とみなされる。有限な人間にとっては、有ることの方が価値であり、有ることを欠く無は恐怖をもってしりぞけられる。現に有る権力体制を倒そうとするロシアのボルシェヴィキ(共産党)が〝虚無党〟と訳されたのも、ニヒルを怖れる常識がもとである。

わたしの哲学の師匠は西田幾多郎(きたろう)である。その哲学は西田哲学とよばれ、その門下は京都学派とよばれた。わたしは京都学派の末端から出た。大学で直接学んだのは二代目の田辺元(はじめ)で、西田とはついに一度もあわなかった。それでも哲学の師匠は西田である。その後、わたしはマルクス主義へふみこみ、いろいろ





の経緯があって今日にいたっている。しかし若い日に哲学に志したときの導師であった西田の影は、どこかにはりついている。■

西田哲学は「無の哲学」である。田辺元の哲学概論の試験は、哲学が「無の哲学」であることを論証せよ、という設問であった。なにを書いたかはもう忘れているが、優をもらったことは、わたしがともかくも京都学派の枠組のなかで育ったことは示している。

じつのところ、無がはたして日本人のメンタリティに根づいているのかどうか、うたがわしい。ヨーロッパ人は東洋の無をニヒルと受容している。日本人の精神は——むろんヨーロッパ人とはちがうが——アジア人ともちがう。無は仏教がもっとも重視したもので、この点では、仏教のひろがったところに無の思想もまた伝播している。これとは独立に、中国の老子の思想の中にも無が出てくる。この





ため無は、仏教あるいはインドだけではなく、ひろくアジアのものとみなされ、東洋的無と概称されるようになった。

たしかに日本列島は東アジアの外延に位置している。そこで仏教も入ったし、老子、荘子の教も入った。仏教、道教（老荘）、儒教とすべて教がついているように、入ってきたものが教え、日本人はこれを学ぶのである。つまりそれらは日本に無かった。学ぶの語源はマネルことである。無いものはマネルことによって受容される。無の思想は日本人に無く、マネルことでなんとかちょっぴりは受け容れられたのである。

問題は〝超越〟ということに関わっていると思う。いきなり超越などという哲学用語をもちだして恐縮だが、超越というのは次元をこえることである。あるいは限度をこえる。人間が生きている場の限度をこえた世界は、超越の世界である。仏教でいう彼岸である。人間の生きている此岸をこえた世界である。

此の世を有限、有の世界とすれば、それをこえた彼岸は無量寿、無の世界である。無というのはなにもない空虚、虚無ではなく、此の世よりも豊饒で、花にたとえるならウドンゲの花咲く繚乱とした世界である。あるいはハスの花弁の上にひらく別世界である。

ただし此岸から彼岸への超越は、垂直ではない。彼岸は此岸の水平の彼方にある。あるいは此岸の裏側にはりついて彼岸の別世界がある。西方浄土というのは水平の彼方にあり、六道の辻というのは裏の彼岸がふと此岸に通じる点である。断絶していながら通じあうという超越の仕方が、仏教である。

この豊饒の無が、なにもない虚無としてヨーロッパ人にうつるのは、超越の仕方のちがいからくる。ヨーロッパ人の超越は、垂直型であり、しかも超越は断絶であって、人間の側からはどうしようもないことである。超越した天上の神は、その絶対の意志によって地上のすべてのことを決定している。その決定には地上の人間のいかなる努力も善もかかわらない。このような超越を上にもつことによって、地上のヨーロッパ人はまことに唯物論的なあり方をとる。地上は有限な人間ながらありとあるものことごとくを利用しつくしてやまない。天上の神と地上の錬金術との共存は、ヨーロッパ人のあり方を象徴している。その延長上に、キリスト教と近代合理主義を共存させる近代ヨーロッパ人がくる。信仰と唯物論との共存はさしてふしぎではない。

一九世紀の半ば、マルクスは、唯物論によって信仰を追放することをこころみた。その出発点においてマルクスが、ラジカルな宗教批判とともに（それまでの）唯物論をもしりぞけていることは、先の信仰と唯物論との共存という近代ヨーロッパの精神構造にてらして、理解できる。その後のマルクスは、自分の唯物論をうちたて、これによって信仰を追放しようとした。

一九世紀の最終の年、二〇〇〇年に死んだニーチェは、キリスト教と近代合理主義の共存を、ニヒリズムによってしりぞけようとした。このときのニーチェが、ヨーロッパ人の受容した東洋的〝無〟すなわちニヒルに依拠しているのがおもしろい（ニーチェはそれをショーペンハウエルからうけついだ）。

日本人に超越という方法は無縁だった。無という思想も無縁であった。日本人は、アジア人ともヨーロッパ人とも精神の構造がちがっていた。天地（自然）のリズムの中に――むろん喜び哀しみ怒り楽しみながら――天地とともにいて、超越もしなければ、無の世界に移ろうともしなかった。

このような日本人の精神構造に、ニヒリズムは根づくはずもない。ニヒリズムがいくら

か根づく条件は、キリスト教抜きの近代合理主義が、日本に受容されてからできた。

西田哲学はいろいろの側面、要素、性格をもつ哲学である。よく言われたのは、禅体験の哲学化ということである。若い日の西田は、その精神的な悩みをのりこえるのに、禅にうちこんだ。そこでその経験を哲学化しようとしたというのは、通俗的には分りやすい言い方である。人間の思想は彼の経験と無関係ではないから、右のように言ってもけっしてまちがいではないが、またそう決定的なことを言ったわけでもない。

わたし自身は、西田哲学のもっとも基本的な性格は、まだ実現していない日本の市民社会の哲学だったところにある、と考えている。その考えを『西田幾多郎の哲学』という本に書いたことがある。実現していない市民社会を観念的に先取りした哲学である。まだ無い立場から、未来に有るべき市民社会の思想を形成するのだから、その有るべき世界を無からの形成（無の自己限定）というようにとらえる。そこに西田哲学の特徴がある。

ついさいきん、中国の一哲学者から来信があった。四十代の人のようだが、昨年から西田哲学を研究しはじめたという。自分の所属する機関の図書館には、西田の全集はあるが、西田哲学についての（日本の）文献は二冊しかない。わたしの『西田幾多郎の哲学』という本を読みたいが、それは図書館にないので、手許に余分があれば一冊おくってもらえないか、ということがみごとな日本文で書かれている。

わたしはいまの中国の哲学者が、西田哲学をどのように解するのかに興味がある。中国はもとより政治的には社会主義である。しかしその社会には、四人組追放後しばしば言われるように封建的な残滓がある。資本制、社会主義どのような社会であろうとも、その社会の基底に自立した市民社会の成熟がないかぎり、その社会に真の人間解放はこない。いまの中国社会からみるとき、市民社会は——西田にとってと同じく——未形成である。そこに西田哲学がいまの中国になお一つの参考になる根拠はあると思う。

たしかに無の自己限定という考え方は、きわめて観念的なものではある。しかしある歴史段階——市民社会の未形成——では、西田哲学のような考え方は、日本だけではなく、かなり普遍的になりたつように思われる。

近代合理主義のなりたつ市民社会が未形成のときは、無の形成作用に力点をおいた西田哲学がなりたち、市民社会の中で近代合理主義が支配的となったときは、無の破壊作用に力点をおいたニヒリズムの哲学がなりたつ。

はなはだおおまかだったけれども、無の思想史をなるべく面倒な用語をつかわずに、書いたつもりである。

要は、日本人にとってはわかりにくいしろものだけれども、無というのが、けっして欠如ではなく、生産的であれ破壊的であれ、ある種の力であり、したがってそれが人間をとらえたときには一つの情熱をこめたものとしてあらわれる、ということを知ってほしかったのである。

無と化す。あるいは無為と化す。この世では、あるいは常識的には、なにもなく、なにもしないことだが、この世ではなく、あるいは常識をこえたところでは、無や無為は、もっとも充実し、もっとも人を魅了してやまないものなのである。ニヒリズムに根源的なある可能性を、ニーチェのような思想家が見出したのは、当然だったのである。

ニヒリズムは、その思想の根源において、悪いものではない。ニヒリズムの世俗的な形が悪いのであって、その様態については、先

回「都心の庭つきの家」でのべておいた。しかし世俗的な様態が悪いからといって、ニヒリズムの思想をしりぞけるのは、正しくない。

政治というのは、因果なことにもっとも世俗的なものである。政治が君主制その他の型なる姿をとることはあっても、政治の本性は、徹頭徹尾世俗的である。マキアヴェリがその『君主論』で、政治についてのリアルな考察をはじめて以来、政治のもついやらしいまでの世俗性は、いまでは自明のこととなっている。有の世界は政治という悪い世俗性でとりしきられている。

この政治の次元で、もっとも純粋に政治悪と対決する思想はアナーキズムである。無政府主義と訳されてきているが、政治悪の根源を権力と権力をめぐるみにくい闘争にもとめ、すべての権力と権力的なものを否定しきる、ラジカルな思想がアナーキズムである。

この稿を書いているとき、荒畑寒村さんがなくなった。荒畑寒村の一代の歩みについては、ふれているひまがない。しかし彼の人生、思想の歩みの中に、彼がそこから出てきたアナーキズムの純粋さがつらぬかれていることは、たしかである。日本共産党の創立に参加し、創立直後にでてきた解党の動きに反対し、しかも再建された共産党とは袂をわかつ。この動きをつらぬいて寒村を寒村たらしめているのは、政治を利害の打算や少数前衛の独占から守りぬこうとする情熱である。同じことは戦後の日本社会党の創立に参加しながら、この党が保革連合に走るやいなや、ただ一人、これに反対、袂をわかったさいに、くりかえされた。寒村一代の声望は、これによって決ったのである。

アナーキズムは、もっとも世俗的で、もっとも有的な政治の次元にあらわれた〝無の思想〟、政治の次元でのニヒリズムである。政治を手中にしようとするものは、いまある権力に抗し、それを倒し、自からの権力をうちたてる。アナーキズムはいまある権力に抗し、それを倒すことまでは同調するけれども、かわりに自己の権力をうちたてることはしない。自己の権力だけではない。かわってあらわれるすべての権力をしりぞける。権力とその政府すべてをしりぞける、凛然とした意志をもつ。

権力をめざさない政治運動は可能か。自民党にしても、反対の極の共産党にしても、この問いにはノーという。権力をめざさぬ政治などないという。わたしたち革自連は、権力をめざさない。この点でわたしたちはアナーキズムとかようものをもつ。あるいはニヒリズムとかようものをもつ。

さて、お立会い。

ニヒリズムをめぐって、いくらかど廻りをしている。

先回「都心の庭つきの家」では、ニヒリズムを批判した。奥野誠亮のような積極的ニヒリズムと、「友よ、酒でものもうよ」という消極的ニヒリズムとが、補完しあって、いまの日本をごく危険な方向へ、曲らせることを、批判した。

今回、意気消沈したわたしは、ニヒリズムへの共感をのべ、政治におけるニヒリズムとかようものがある、という。

論旨の矛盾撞着もはなはだしい。そう言われそうである。

整理してみよう。

ニヒリズムは、価値の転換にさいして生じる。それまでゆるがなかった時代の価値が、ある日とつぜん無価値になる。平和、民主主義、人権といった戦後の価値がゆらぐ。この価値の転換にさいして、喜び勇んで、別の価値をうちたてようとする「超人」が、積極的ニヒリズムを採る。平和のかわりに国防、軍備増強を、民主主義のかわりに政治指導力を、人権のかわりに公共の秩序を。「超人」はこの機をとらえて別の価値をもちこもうとする。

これに対し、価値の崩壊におびえた「小人」は、消極的ニヒリズムにおちいる。政治の大勢よりも日常生活での安穏をもとめる。政治の汚ない動きからはなれ、私的領域の上品な愉楽の保全をめざす。

積極的ニヒリズムと消極的ニヒリズムとの補完が見えるものにとって、消極的ニヒリズムはなんともやりきれないしろものである。もしも彼らが、意気消沈の状態から立直って、ノーという声を上げてくれたなら、状況は一変するものを。

そのために消極的ニヒリズムを正面から撃つか。撃つのが正しいか。撃てるのか。

答えは、否である。そこがいらだたしい。

消極的ニヒリズムの中には、まことにこまった面と、政治におけるニヒリズムつまりは権力争いとしての政治への拒否反応という面とが、ないまぜになっている。

わたしたち革自連の内部にも、選挙はぜったいいやだというメンバーがいる。市民としての政治発言はするけれども、たとえ市民の代表としてではあれ、権力争いにつながる政治決戦=選挙はいやだ、という気分の持主である。革自連のメンバーに、こういう人たちがいることを、わたしは大事にしたいと考えている。その思想は政治的ニヒリズムであり、政治的ニヒリズムから政治発言をしていくことは、消極的ニヒリズムにおちいっている市民たちとの関係では、きわめてだいじなことなのである。今回ふれているのは、この問題である。

消極的ニヒリズムについて、簡明にいえばこうなる。

その世俗的な形は批判しよう。政治の歪みに沈黙し、私生活でだけ「都心の庭つきの家」をもとめるような形は、撃て。

しかし、思想としての政治的ニヒリズムは尊重しよう。いかなる権力といえども、市民にとっては支配を強いる権力なのだから、権力を政治的ニヒリズムで根源的に否定する態度は必要なのである。

次へ進もう。

この連載を、感情と理性の問題からはじめた。ニヒリズムは理性ではなく根源的な感情の問題である。しかし同時にニヒリズムは理性の問題でもある。

ニヒリズムが価値の転換、古い価値が崩壊して新しい価値がおしつけられてくる転換期に生じることは、たびたびのべてきた。

理性というのは、価値、目的、全体について考え、決定する能力である。人生というものの価値、目的、全体はどのようなものか。世界の価値、目的、全体はなにか。そう問い、これに答えるのが理性である。理性とは価値決定の能力である。

いまの日本社会で、市民は価値決定力をもつか。

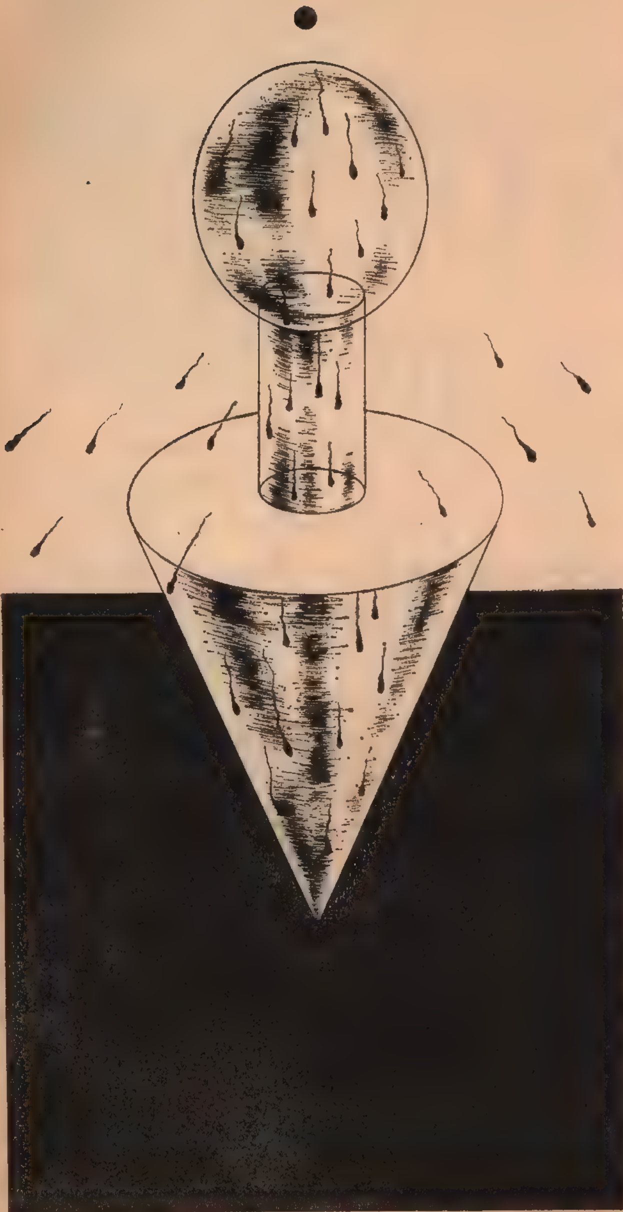
能力についていえば、人間であるからには、だれでもがもっている。能力という可能性を現実の力として発揮できるか。

もうずいぶん前、わたしがまだ大阪のある私学の教師をしていたころだから、十五年ほど前のことだが、ある週刊誌が、ある清涼飲料製造会社の社員規則のようなものを、紹介した記事を読んだ。大学を卒業して入ってきた社員に、まずこの規則が示され、ついでそれを実行するのに、めいめいがそれぞれ割当てられた小売店へ出むいていく。くわしいことは忘れたが、趣旨からいうとつぎのようなことであった。

まず小売店へつくと、入る前に、自社のマークの看板が、その店のどこに掲げられているかをたしかめる。もしあまり目立たぬところにあったなら、店主にていねいに話して客

の目のつくところへ移すことの了解をもとめる。了解をもらったら、つぎには自分の労力でそれを移す。このとき、そのマークがよごれていたら、ぞうきんなどを借りてきれいに掃除しておく。これらを通じて、店主には、こうすることが販売がふえて店の利益にもなることを、けっして教訓的になったり押しつけになったりしないように、分ってもらい、労力は自分がはらい、さいごにそうしてくれたことにお礼を言うのを忘れないように——と、まあいたれりつくせりの手引きがしてある。

この社員規則のようなものをみて、わたしはマックス・ウェーバーの『職業としての学問』を思い出した。彼はこの本で「目的合理性」ということを言っている。ドイツ語でいうとツヴェック（目的）ラティオナリテート（合理性）である。言葉は目的合理性だが、



意味からいうと「手段合理性」である。

つまり、ある目的が決っているとき、その目的をはたす手段が合理的に保証されているのを、目的合理性というのである。たとえば上野駅で青森行の列車に乗る。目的は青森へ行くことである。乗れば確実に——予想外の事故がなかったら——着く。乗ったのに列車が逆行して大阪へ行ってしまうということはない。これが目的合理性である。

ウェーバーがこういう概念を出したのは、ヨーロッパの後進社会であったドイツにおいても、近代合理主義が社会管理のシステムにまで貫徹したからである。確定された目的を確実に実現する手段の体系が、社会の中に、網のようにはりめぐらされる。

それにつれて、管理社会特有の階層化が生じる。のち、二次大戦後、M・ウェーバーの影響をうけたライト・ミルズは、管理社会のパワー・エリートとマスとを区別した。パワー・エリートとは、広大なアメリカ社会でもごく限られた少数者であって、アメリカの「意志決定（デシジョン・メーキング）」に参画するもののことである。すなわち、パワー・エリートだけが、目的や価値を意志決定する能力をもつ。他はどうか。マスは、パワー・エリートの決定した目的や価値について、その「目的合理性」にだけたずさわる。目的はパワー・エリート、手段はマスという分化が生じたのである。

これが理性の現代的分裂である。

だから、いまの市民に価値決定、目的決定の力があるか、と問われるなら、ない、というほかはない。力はただ「目的合理性」についてだけ許されている。その具体相がつまりは、先の清涼飲料製造会社の社員規則のようなものである。

ウェーバーの「目的合理性」つまりは手段合理性に押しこまれ、閉塞された市民は、その理性能力を価値、目的の決定にトータルに発揮する道をとざされている。すなわち、市民は、はじめから価値の決定から疎外されている。

ニヒリズムは価値の転換にさいして生じた。価値および価値の決定からの距離が、ニヒリズムを生む。となると、現代市民は、はじめからニヒリズム的状況の中におかれている。消極的ニヒリズムにひたっているのは、現代市民の宿命なのである。たんに気分においてだけではない。理性においても同じなのである。

市民の自立と連帯ということが、管理社会から脱け出すための方法として、ここ十年ほどのあいだに、アメリカでも、日本でも、説かれだしている。この問題についても、いずれたちいって論じなくてはならないが、市民の自立と連帯を考えるさい、いまのべた市民の気分的、理性的ニヒリズムをどうするかという問題がつきまとうのである。

市民をとらえている消極的ニヒリズムは、気分的に〝シラケ〟と表現されている。シラケの構造の中に、市民とニヒリズムとの相関がひそんでいる。

正直言って、市民運動や市民政治運動を展開していると、市民をとりこんでいるシラケの構造に、こちらまでシラケてくることがしばしばである。自分もふくめて市民が自立するためにと、わが身に鞭うつようにボランタリーに努力しているのに、それに水をかけるようなシラケ市民の無反応にぶつかると、もうやめたという消沈した気分になる。シラケがシラケをよぶところからどうやって脱け出るのか、いつでも頭が痛い。

それだけに、市民の消極的ニヒリズムは、これを撃つだけではたりない。撃つ前に、自分がそれとどうつながっているのかを考える必要がある。

オモチャ狩り反対運動報告

# 改造銃増加ウルトラ大作戦

# 47

を鑑定する仕事も警察権力が一手に掌握している。彼らはその〝職権〟を利用して、「モデルガンは危険物」というイメージをつくる作業を、急ピッチで進めようとしているのだ。

具体的な方法は、暴力団事件で押収した改造モデルガンを、無理に〝銃〟と鑑定する。そしてこれを裁判所に提出し新しい判例を積み重ねていき、ゆくゆくは法改正の根拠にしようというやり方である。

最近、東京地裁で起きている、「PPK論争」もその一例である。

ワルサーPPKというのは、映画007の主人公、ジェームズ・ボンドが愛用した銃で、モデルガンのPPKもポピュラーで人気が高い。モデルガン独自の安全機構でもう十数年もベストセラーを続けているものだ。

警察が行った、一九七一年と七七年の二度のモデルガン法規制にも、玩具性が高いという理由で販売を認められてきている。

このPPKを、警察が〝簡単に銃砲になる〟と一方的に鑑定してきたのだ。

鑑定書によると、このPPKは、火薬を使ったあともなく、勿論弾もついていない。従って、発射実験など、できるはずもない。それを〝銃砲〟ときめつけた理由は、すべて推論によるものである。

ところが、この裁判の最中の三月三日ところも同じ東京地裁で、オモチャ狩り法廷が開かれ、証人として出廷した、警察庁の徳永勲技官は、PPKについて「七七年規制はモデルガンの改造防止について、その措置をきめたが、PPKは、玩具独特の方式でつくられており、改造の可能性は極めて少ないのでそのまま許可した」と証言している。

はからずも、同一PPKをめぐって、警察の言い分自体が、一方で「安全なもの」と言いながら、もう一方で、「簡単に銃砲になる」と主張しているのだ。こんなむじゅんをかまわず、裁判所をも、自分たちのペースに巻き込もうとする警察権力の強引さは、強く批判されるべきであろう。■

「モデルガンは本物とちがい安全につくられ、それを趣味としている人は意外に多いですね」最近、一般の人たちの間でも、ようやくこんな声が聞かれ始めてきた。

健全な愛好家が一段と増えたことによってモデルガンもやっと、市民権を得ようとしているのだ。

ところが、こういった状態をにがにがしく横目に見ながら、相変らず治安維持を口実に、モデルガン規制の策略をめぐらしているのが警察である。

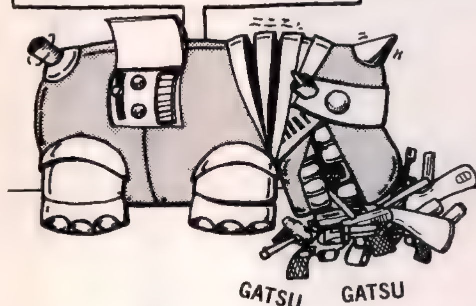
近ごろは、モデルガンを改造する事例も大幅に減っている。

モデルガンの改造数が多くなければ、それによって、法規制はしにくい。

そこで警察が考え始めたのが、いままで一定の規準できめられていた〝銃砲〟の定義を自分たちに有利に、拡大解釈することで、それによって、改造銃の数をなんとしても増やそう、という作戦である。

銃の所持が禁止されている日本では、それ

# 鑑定は簡単です！







二回にわたり、オモチャ狩り反対運動の経過を報告したが、読者の中には、「それでも、モデルガンは、まだ改造され、改造銃としてときおり新聞でみかけることがあるが」と危ぶむ方もいると思う。

事実、数年前に比べて現在は、モデルガンを改造する事例は極端にすくなくなっているが、まだまったく無くなったという訳ではない。

しかし、その多くは、銃砲刀剣類を持ち歩きたがる暴力団によって行なわれているのが実態だ。

そして最近警察は、これら暴力団による改造事件の取締りに名を貸りて、改造銃による〝銃砲〟の規準を、警察に有利なように解釈、それによって減少しつつある改造銃の押収量をふやそうと意図している事実が判明した。

現在東京地裁で、あるモデルガンをめぐり激しい論争が展開されている。

これは、PPKと呼ばれるモデルガンの改造事件。

このPPKは、いまから十五年前からつくられ、まったく撃発装置を持たないスライドアクションと呼ばれる安全な機構で、二度の法改正にもパスしたもの。

ところが警察は、このオモチャの機構そのままに、銃身だけ取替えたものを、射てもしないのに銃ときめつけた。

ふつう〝銃〟と断定するには、発射実験を行なうのが常識であるのにそれもせず、ただ推定だけで簡単に鑑定を行なったのだ。

サントリーノムフィクション 17

あのとき・あそこで

# 三人の美しい女優さんへのアタック。

●白井佳夫(映画評論家)



美しい女性の手に、うやうやしく男性がくちづけする、などというシーンが、欧米の映画にはよく出てくる。これをいつかやってやろうと心に決めて、秘かに機会をうかがっていた。もちろん、そんな勇気(?)の出せる時というのは、パーティなどで、心地よくウイスキーを飲んでいる時に決っている。

まずやってきたチャンスは、大島渚監督の何だったかのお祝いのパーティの時、皆でワイワイいいながらほどよく酔いがまわった頃であった。昔からわが敬愛する女優さんである、吉行和子さんが、にっこりと微笑みかけてくれたので、手にしていたグラスを脇に置き、いつもパーティの時よくやるようにまず握手して、次の瞬間すかさず、初めてのトライを敢行した。

さすがに名女優さんで、吉行さんは、いささかも動ずるところなく、堂々と受け(?)て下さった。だが周囲の人々にちょっと、さざ波のような驚きが走った気配があって、彼女と話をしていた「愛のコリーダ」「愛の亡霊」の共演者である藤竜也さんが、びっくりして、その場面での当面の私の話相手を、急いで買って出てくれた。

二番目のチャンスは、報知映画賞の授賞式とそのパーティがあった夜の、新宿のバーでの二次会の時のことであった。「太陽を盗んだ男」でその年の主演男優賞をもらった沢田研二さんや、作品賞をもらった長谷川和彦監督などと、私が楽しく飲んでいるところに、早目に引きあげることになったらしい、この年「赫い髪の女」で堂々主演女優賞をもらった宮下順子さんが、サヨナラを言いに、やってきた。

そこで、お別れのあいさつの握手をして、その動作につなげて、ごく自然にうやうやしくやってのけた。すると例によってかなりウイスキーを召していると覚しき宮下さんが、艶然と微笑んだかとみるや、やにわに返す手も早く、今度は私の手をとって、何とお返しをしてくれたのである!

職業がら、欧米の映画は、かなり数見ているつもりなのだが、寡聞にしてまだ、こういう例は知らない(?)。しかし、この時、ウイスキーでほんのり頬を赤く染めた宮下順子

さんは、とても可愛くて、自然で、魅力的であった。あの晩の酒は旨かった。

三番目の話は、比較的最近のことである。畏友神代辰巳監督といっしょに、「11PM」に出演して、終了後の深夜、彼の行きつけのバーで、ウイスキーのボトルなどをあけていた時のことである。談たまたま原田美枝子さんのことに及んで、神代監督が「じゃあ、彼女に電話しようよ」と連絡をしたら、近くに住んでいる彼女が、間もなく合流してくれた。

ちょっと眠そうな眼をして、そのバーに現われた彼女に、「やあ、お久しぶり」と、まず握手をしてから、次の瞬間、実行行為に及ぶつもりだった。しかしその時、一瞬私の手は、実にさり気なく、かわされてしまったのである。

そのわけは、すぐに、納得がいった。実はその夜の番組で私は、彼女が主演して神代監督が演出したある大作映画のことを「ワースト映画」だと発言していたのである。彼女が製作・主演したもう一本の近作についても、私はある雑誌に酷評を書いていた。

でも、後はまったく、何のわだかまりもなく酒宴の席に加わった彼女を見ながら、私は、ううん、こういう突っ張りというのもまた、実に彼女らしくていいなあ、と心地良い酔いの彼方から思ったのであった。

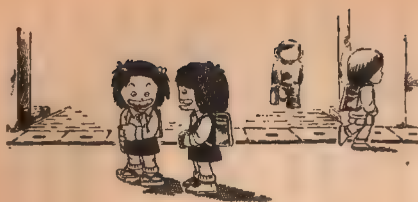
イラストレーション●小島　武



# じゃりン子チエ

## ［対談版］

はるき悦巳　中山千夏





**はるき悦巳**（えつみ）漫画家。『漫画アクション』で好評連載中の「じゃりン子チエ」で小学館漫画賞を受賞した。現在、連載二本月百枚を超える原稿をこなし、週二日は徹夜という生活が続いているという。一児あり。一九四七年大阪生まれ。

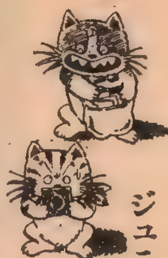
**中山千夏**（なかやまちなつ）作家。参議院議員。以前から、「じゃりン子チエ」のキャラクターづくりには、この人のイメージがあったのではないかとの説が濃厚だった。ご本人も、そう言われるのが楽しげな様子だ。一九四八年熊本生まれ。



撮影——百瀬恒彦

原作者のはるき悦巳さんは、大のマスコミ嫌い。テレビ出演や雑誌の対談も断わり続けてきたが、相手が中山千夏さんならということで、禁を破ってかけつけてくれた。

『じゃりン子チエ』の舞台になっている大阪の下町は、同世代のお二人にとっても、思い出の深い場所でもある。四月に封切られるアニメーションで、チエの声を担当している千夏さんと、生みの親であるはるきさんとが、漫画のキャラクターにだぶらせて、大阪とそこに生きるさまざまな人間を語りながら、現代社会を痛烈に批判する――




**千夏**　私ね、このごろ漫画をあまり見ないから、映画の声の話がくるまで『じゃりン子チエ』は知らなかったの。話がきて原作を読んだら、すっごく面白いし、チエの役は私しかいない、と思った（笑）

**はるき**　ようやってくれましたね。最初、声は誰がいい、と聞かれた時、千夏さんがええと思とったんですよ。でも最近、そういう仕事やられてないから、アカンと思て、誰でもええわ、言うたんですわ。そやから意外やったですね、やるいうの聞いた時。

**千夏**　アニメには、全然、関係してない？

**はるき**　ノータッチ。人によって手ェ出す人もあるんでしょうね。俺は、どうせ忙してやっとられへんから、とにかく一切、好きなようにやってくれいう感じで。

**千夏**　よく出来てますよ、アニメ。原作よりちょっと人情っぽくはなってるけど。

**はるき**　ぼく、舞台やったの見たけど、あれ人情っぽくやらんとウケへん思てるのかね。

**千夏**　それ、あるみたい。

**はるき**　そんなことないんやけどなあ。

**千夏**　『じゃりン子チエ』をなぜ面白がるのか自分で考えてみると、もちろんキャラクターを始めとして、いろいろ言えるところはあるわけだけど、なにかちょっとしたニュアンスというか雰囲気というか、そういうものの出し方がね、私には面白いの。

**はるき**　ははあ……。

**千夏**　ギャグというのでもないのよね。例えば、テツがぶつぶつ言って歩いてると、「ぶつ」と書いた吹き出しがいっぱい出て、画面が埋まる感じとか、みんな「わっ」と驚くとデンとひっくりかえって画面に足しか見えなくなるとか。忘れられないのは、小鉄とジュニアがパチンコした時があったでしょ。あの時、ジュニアが夢中でトットットッと走って、転がった玉をパッと押さえる、その押さえ方がおかしくてね。ああいうの、どこから出てくるのかしら。

**はるき**　なんていうのかな、重要な人物が、まともな話してるというのが退屈なんですよね。いやでしゃあないの。それが、四枚も続いたら、いや気さすんやね、自分で。そりゃ、いきなり、パチンコへは行けないから、おばあさんと、チエがなんか言うて、それでパチンコ屋へ行くことになるわけでしょ。その過程というの、描いてるけど退屈なんよね、自分では。ほんで、ページめくると、何かおきてんといやなんよね。

**千夏**　ハハハ。

**はるき**　あんまり退屈したくないから、勝手にやってるだけですけどね。

**千夏**　漫画で言えば、私たちは手塚治虫の漫画で育ったのかな。

**はるき**　一番ガキの時は、『赤胴鈴之助』なんか読んどったでしょう。

**千夏**　あ、そうか。

**はるき**　そんで、貸本屋で借りるようになって……、丁度、白土三平が出だしたころやったんですよね、『忍者武芸帳』を読んで、それで、それが完結したところになったら、漫画がおもしろなくなったんですよね。高校と大学の間、漫画を全然、読んでなかった。そんで『あしたのジョー』や『ハリスの旋風』の時、ちょっと見て……。他は全然、見いへんかったですね。

**千夏**　『ガロ』とかあったでしょう。

**はるき**　全然、見てないですね。ほんで、どういうんかな、『ガロ』は見いへんかったけど、つげ義春だけは好きやったですね。

**千夏**　ああ、なるほどねえ。

**はるき**　ぼくの一番最初の漫画を見た人に水木しげるに似てるって言われたことあるんですよね。考えたら、俺、あの頃言うたら、つげ義春の漫画しか読んでへんもんね。水木しげるさんのバックは、つげ義春が描いてたんだって。

**千夏**　あ、そう?!

**はるき**　そやから、俺はそのバックみて、参考でもないけど、ああいう感じや思てるわけでしょ。そやから、水木しげるに似とるいうより、つげ義春に似とったんやないのかなあ。

**千夏**　ああ、そういえば、線が。ゲタとか、後にある木のものとか、つげさん風ね。

**はるき**　いきなり漫画描いたから、参考にするもんなかったんですよね。最初、古い言われましたね。

**千夏**　へえ。

**はるき**　古いはずや、昔の漫画しか知らんもんね(笑)。ほんで、井上ひさしが、書いたでしょ、なんかで。

**千夏**　『文芸時評』ね。

**はるき**　ええ。なんか新しいとか実験とか書きはったでしょう。あれから、新しいとか、ちょっと言われるようになりましたけどね。ずっと、メチャメチャ古いみたいなことでしたからね。ほんなん、わからへんもんね、古いも新しいも。

**千夏**　あのね、古いってんじゃなくてね……。正統っていうか、私の思ってる漫画としては普通の漫画って感じなのね。だから、古いって言われちゃったんじゃないかね。

**はるき**　コマ割なんかもまっすぐでしょ。最初に漫画見せた時は「今の漫画はもっとダイナミックだ」言われましたね。斜めにコマを切ったりね、コマからパッと人間が出とったり。ビャーッと線が入っとったり、ワーッとか、顔面だけとか。そういうのん、興味ないんですよね、あんまり。なんか気持悪いのね、斜めに割ったりするとね(笑)

**千夏**　ちゃんと四角は四角で行きたいわけね。

**はるき**　こだわってるわけやないけど、斜めなんて一回もないんとちゃうかなあ。

**千夏**　そうね。つげさんの漫画って全部、雰囲気ばっかりというか、話の筋がやたらあるというのじゃないでしょ。はるきさんがつげさん好きだったの、わかるみたい。ところで、朝日新聞の『ひと』によると、はるきさんは多摩美卒なのね。

**はるき**　そうですねん。かくしとったんやけど朝日の人が、「そういうのちゃんと載せなあかん」いうて。そちらは、学校行ったんですか、ちゃんと。

**千夏**　半分ぐらいね、休み休み。

**はるき**　中学までぐらい……?

**千夏**　高校まで行きました。

**はるき**　エエッ! 行ったんですか! 俺、行ってないかと思うた。子供の頃から頑張ってたでしょ。学校なんか行く暇あったわけ?

**千夏**　適当に行くわけ。




**はるき**　ほな、平均したら、アレですね、学歴は中学の半分くらい。

**千夏**　そうね、押しつめれば（笑）

**はるき**　安心するなあ。そういうの聞くだけで（笑）。マトモなコース行かれてると、それだけでも弱いからな、俺は。

**千夏**　油絵やってたわけでしょ、それが急に漫画をやり出したってのは？

**はるき**　アハハ、場所いらんというのが、ほとんどの理由なんですねん。嫁はんと一間のアパートなんかに住んでると、場所ないでしょ。やり方工夫していろいろやっとったんやけど、もう面倒くそうなって来て。漫画やったらケント紙だけでしょ。金もそういらんしね。相当、金なかったから、あの頃。そんで、なんちゅうんか、あんな関係のもんに、ウンザリしとったんやね。ウットウシイんや。間に批評家がからんでくるようなん、大嫌いなんやね。あいつらがゴチャゴチャいうから、マトモに見れる奴も見れんようになるわけでしょ。

**千夏**　そう、そう。

**はるき**　漫画は一番スッキリしてるな、思うたんよね。おもろいかおもろないか、どっちかでしょ。おもろかったら金くれる、おもろなかったらイヤ味のひとつも言われるけど、ハイ、サイナラという感じでしょ。そんなんだけで、もう良かったんや、俺は。ただ、食えりゃええ思とったから。

**千夏**　抵抗は無かった？　もともとは絵描きになろうとしてたわけでしょ。

**はるき**　俺、絵描き軽蔑してたから——。ゲージュツ、いう態度で絵描いてる奴は嫌いやったからね。働けへん理由を、ゲージュツにおっかぶせるのは失礼でしょう、嫁はんに対して。俺は、嫁はん働いて、俺働いてなかったけど、働くのがイヤやいうのが理由やったもんね。ゲージュツとか何かのために働かへんなんて、俺、信じられへんもんな、そんなこと。絵描きはやっぱり金持ちじゃないとダメやないですか、ある程度。

**千夏**　そうね。

**はるき**　ぼくなんて、絵、出品して取りに行ったことないよ。大きいでしょ、運送代かかって、もったいない。

**千夏**　じゃ、絵はどうなるの？

**はるき**　美術館でいつも処理されとった。あれ、一年か二年、取りにきいへんかったら焼却するんですよね。そやから、俺、絵なんて一枚も残ってない。

**千夏**　わー、もしかしたら名作かもわからんのに。
**はるき**　全然（笑）
**千夏**　デビュー作品は？
**はるき**　『ぶっとん音頭』言うてね、マサとトラ言う猫が出てくる。
**千夏**　猫、好きみたいね。
**はるき**　子供の時からずっとこうとったから。猫の写真見て、可愛らしいな、いう感覚は全然ないけど、生きてる猫、好きですよ。
**千夏**　猫って勝手で面白いよね。
**はるき**　そやから気ィ合うんよね。帰って来て、尾ふられたりしたら気持ち悪いでしょ。
**千夏**　ハハハ。
**はるき**　あれやられると負担感じると思うんやね、多分。そんだけやってくれてんねやから、オレもやらなあかんとかね（笑）。それは、嫁はんに対しても一緒やけど、やられると負担感じるんやね。オレが徹夜やってるからって夜食出されたりしたら、イヤやからね、俺。
**千夏**　放っといてくれたほうがええ。
**はるき**　うん。どうでもなるでしょ。ハラへりゃ、なんか食うし。猫が典型的やもんね。
**千夏**　勝手やもんね。
**はるき**　ええ時だけ寄ってくるけど、気に入らん時は全然相手にしてくれへんでしょう。そういうの、こっちこい、いうのも好きやしね。
**千夏**　で、その『ぶっとん音頭』は何年くらい前ですか。
**はるき**　『チエ』を始める直前。『チエ』がもう二年前ぐらいじゃないですか。とにかく、三カ月に一冊、単行本が出るんですね。
**千夏**　連載は毎週。他には？
**はるき**　月に一回『ガチャバイ』いうのを、『ビッグスピリッツ』に描いてます。もうアカンのよね。眠る時間もない感じで。
**千夏**　アシスタントは？
**はるき**　今までは、忙し時には嫁はんが模様とか黒いとこね、塗っとったんですけど、ガキできたんです。そんなん、やってられへんから、間に合わん時は時々手伝ってもらってます。


チエ

**千夏**　チエがホルモン焼やってるでしょ。私も子供の頃、看板はいっぱい見たけど入ったことないの。チエはクシで焼いてるね。あれ、そうですか？　違うんじゃないかって気もするんだけど。
**はるき**　あの頃、変なウワサになってませんでした？　材料が犬やとか……。
**千夏**　あ、なってた、なってた。
**はるき**　そうでしょ。そやから行ったらアカンいわれたでしょ。俺も描いとるけど、行ったことないんですよ、ほんまに。
**千夏**　何か、鍋で煮るんじゃないの？
**はるき**　いろいろあるらしいんですけどね、ぼくが見とったんは、鉄板で、クシに刺して焼いとったハズなんですよ。その鉄板いう感じ、友達に聞いても知らんいいよるんよね。そやから何となく嘘八百描いてるんやね。あの絵、焼肉屋の鉄板大きしただけ。あんなんあるわけないもんね。行き当たりバッタリでムチャクチャ描いとるだけやから。第一、これ、最初はね、「ひとつ描いて持ってこい」いうので持っていって、それで終りの話やったから。
**千夏**　続くとは思ってないからね（笑）
**はるき**　うん。ほんでその次、これで、いう

ので、もうひとつ描いて、三回か四回、月一回ずつ描いたんだけど、そりゃ、いろいろ困ったですよ。つじつまの合わんのがやたらある。

**千夏**　ハハハハ。

**はるき**　どう考えてもおかしいもんな、焼きながら普通、横に洗うもんとか皿がないとおかしいでしょう。

**千夏**　なんにもないね。こゝっちは。

**はるき**　ほんで、後でね、おかしな、ここの家はテレビもなにもないな、思てね。

**千夏**　ミズヤ（食器棚）しかあらへん(笑)

**はるき**　ミズヤもなかったでしょう。

**千夏**　お母はんが来てからやっと出来た(笑)

**はるき**　そう。そやけど、うまいことつじつまおうたんですよ。テツみたいな奴がおったら、金目のものは、みんな質屋へ行くでしょ。こりゃ、どっかで言うといた方がええなあ、思て、「ものを買うと、テツがどっか持ってく」てチエに言わしといた。ほんまは、後で全部つじつま合わしたんやね。最初なんかなんにもない家やもんね。

**千夏**　何にもないのよね、ほんとに(笑)

**はるき**　チエの机はあってもスタンドもないでしょ。どないしてんのかなあ思うよね(笑)

**千夏**　電気はあったかな。

**はるき**　あったけど、つける場面がない。あんな環境やったら、毎日電気ついてなかったらおかしいでしょ。もうムチャクチャやね、そういうのんは(笑)。最初は、わけがわからんで描いてたな。その頃、漫画、読めへんようになってたしね、今の漫画どんなんか知らんし、どういうすすめ方かわからへんかった。どないして描いたらええかわからへんし。ただ、漠然と、ああいう女の子がおって、オヤジおったらおもしろいなあというのだけで描いたから。そやけど、あれ、子供ん時、『がめつい奴』見た記憶があったんと違うかな。そういう役やったでしょ。

**千夏**　そうそう。テコの役。ちゃっかりした生命力のある女の子。

**はるき**　ああいうのんが、ずっと残ってんのと違うかな、と思うけどね。ほんで、おれらのガキの時て、別に働いてる奴て、珍らしなかったでしょう。ぼくの友達の姉さんなんかでも小学校から働いてる子おったしね。そやから、「ガキが働いてんのは、今はない」とか言われたこともあるんやけど、俺だいたい時代なんて設定してへんし。

**千夏**　第一、年とらないもんね、これ。

**はるき**　あの頃のこと思て描いてるだけやから。ぼくの中では一向におかしい奴等とは違う。つじつまおうとるんやけどね。おりましたよ、おれらの辺は。嫁はんがだいたい働きに行っとるんやけど、昼間からゴロゴロしてね。ええ、オッサンですよ、もう。「タバコ買うてこい」いうて、買うて来たら、五円、十円、くれるんやね。尊敬してましたねえ、粋なオッサンや思て。で、ああいうヤーさんでも、地元では絶対悪いことやらへんからね。近所ではちょっとしたええ顔してますよ。住みにくいから。

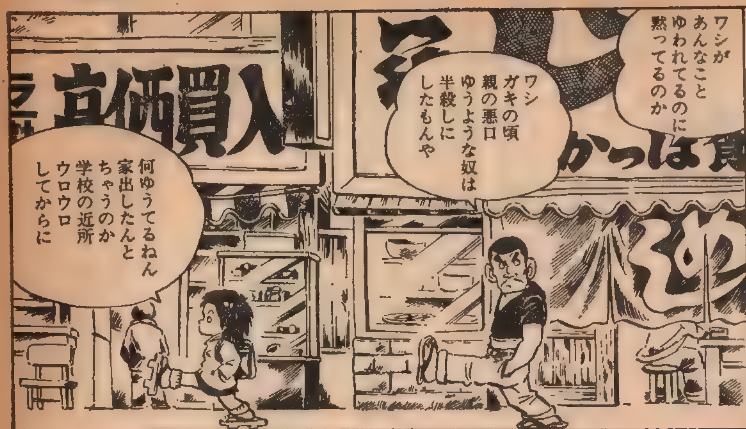
**千夏**　大阪は、どこ？

**はるき**　それが、もろ『がめつい奴』の場所なんですわ。

**千夏**　あ、釜ケ崎。

**はるき**　西成警察署のすぐ近く。萩之茶屋いうとこなんですけど、それ言うと、なんちゅうかな、そういう環境で育ったから、こういう漫画ができた、みたいな感覚で切られるでしょ。あれ、イヤなんやね。山谷とか釜ケ崎いうたら、あるイメージあるでしょ、聞くほうに。けど本人には、地元の人にはそんな気は無いわけや。

**千夏**　そらそうや。




**はるき**　そういうので見られるのん、イヤなんやね。

**千夏**　よく『じゃりン子チエ』のことを、非常に大阪の下町的なムードがあって、そこがいい、と言うのを聞くけど、私はね、確かにセリフは大阪弁だし、大阪のある町らしいけど、大阪的なムードがいいとかってふうには全然、思わなかったな。大阪弁とか場所とかは、要素のひとつであってね。

**はるき**　だからあの場所も、大阪のどこ、という設定は特にないんです。普通、大阪のこと描く時、それらしいとこ写真取材したりするらしいけど、俺はとにかく資料なんて一切ないもんね。全部、考えて描いてるだけ。あんなとこ、あるわけないんよね、「大阪行ったら、あんなとこある」言う人おるけど(笑)

**千夏**　私は布施にいたのよ。

**はるき**　あ、そうですか。

**千夏**　わりと近いよね。ガラ悪いとこや。

**はるき**　まだマシですよ。

**千夏**　でも、隣り町で「正樹ちゃん殺し」の犯人が捕ったの。

**はるき**　俺のとこなんか、目の前で警察が、バーン、ピストル撃つの見たよ。

**千夏**　え、え、えーっ!

**はるき**　考えられへんやろ、そんなん。それもコソ泥やよ。

**千夏**　コソ泥、撃っちゃったの(笑)

**はるき**　俺、思うけど、今そんなことやったら大変な事件でしょ。警察が発砲したなんて。そやけど、あの頃、あんなとこやからね、新聞にも出えへんかったよ。あれどうなったんかなあ。野球やっとったん。バーッとおっさんが走って行きよんや。ほんで学校のへいを乗り越えて逃げようとしたら、警察が走ってきて、バーン撃つんよ。当たって、ケツに。俺あわてて、へい乗り越えて見に行ったら、あれで映画と違うな思たんやけど、ええ大人がケツ押えて泣いてんのよね。「痛あ、痛あ」て。はいずり回って。あれはよう覚えてるなあ。警察も漫画みたいなこと言うのね。「足をねろうたんや」て。「けど、あいつがへいから飛び降りたから、ケツに当たった」、そんなん嘘や、走りながら撃ってんでェ(笑)。しかし、子供の時には、ものすごう納得できたね。

**千夏**　ウハハハ。

**はるき**　理屈に合うてるでしょう。そやからその時は「泥棒アホやな」て思うたけど、今思い出したら、ひどい警察やなあ。あんなんで鉄砲撃つなんてね。それから、大体ヨセ屋が多かったでしょ。どっかで焼夷弾が出てきた言うたら、譲り受けるよね。焼け跡でカンカンカンカンって分解しとったんやろな。そしたらバーンッて。ものすごかったよその時

は。死にへんかったけど、血だらけ。気持ち悪かったなあ、あれ。いろんなことあったわ。風呂から出てきたら、ヤクザが鉄砲の撃ち合いしとったりね。

**千夏**　ヤクザが!?

**はるき**　ちょこちょこあったですよ、あの頃。そんなしょっちゅうないけどね。

**千夏**　でも、その三つだけでもすごいわね。生涯にそうあわないよ、そういうことに(笑)

**はるき**　中学の時に引越したの。いろいろ知るのは、だいたい中学から高校でしょ、年令的に。そやから、おもしろいことばっかりなんよね、憶えてるのは。ガキがおるにはおもしろいでしょ、ああいうとこは。子供もオトナも関係なしに、ゴチャマゼになって遊んでるからね。もう、淋しいオッサンが多かったんとちゃうかなあ。

**千夏**　オトナも子供もゴチャマゼで、それでみんなダメなとこがある。でも、ダメはダメなりにやってて、変にそれを助けようという人もいないというのが、いいね。

**はるき**　いいやないね。ああいうの。そやから、俺は違う環境に人間を置いて、ドラマ作ってくみたいなのが、ものすごく嫌いなの。ある人物を違う環境に放り込んでそいつがそこで錬えられて成長してくみたいなのはヘド出るような感じがしてね。だいたいそこにおりゃ幸せなわけでしょ。とやかく言われへんしね。俺なんて、オモテ出るの嫌いな奴やからね。家におって好きなことやってたら幸せや。金なかっても、レコード聞いてりゃ。そういうタイプやからね。こいつらも、そりゃ、いろいろ描けるよ。金持の所、連れてったり、東京へ旅行させたり。でもそういう状態でこいつらがいろんな目に会うなんてイヤなんよね。もう近所で遊んでりゃいいでしょ、気の合う同志で。

**千夏**　向上したくないのね。

**はるき**　だいたい苦労して立派になるかいな、思うね、俺は。俺自体、あまり苦労せんかったからなあ。

**千夏**　好きなことばっかりしてたんでしょう。

**はるき**　好きなことしか興味なかったなあ。これでたまたま食えたから良かったけど(笑)

**千夏**　そやねえ。

**はるき**　えらいことですよ。三十ぐらいまで何もせんかったら。

**千夏**　ハハハ。

**はるき**　いや、ほんとに。バイトに行って、その金なくなるまでゴロゴロしてたでしょ。

**千夏**　ヘエ。

**はるき**　嫁はん、朝パートに行くでしょ。そうすると、嫁はんのお母はんと、嫁はんの家ですよ、お母はんと一緒にお茶飲みながらテレビみて、歌手の悪口言うてるんやから。

**千夏**　アハハハハ。

**はるき**　あんまり正常やないよね(笑)ちょうど、そういう頃に、たまたま応募したんが、佳作とって金もろうて、そいで食いつないでる間にこんな仕事来たんですよね。ついてるなあー(笑)



ヒラメ

**千夏**　チエはすごい生命力だけど、メチャクチャ恥ずかしがったりするでしょ、あれが好き。それからテツがいいのは、善悪の規準が無いところね。

**はるき**　俺は、あんまり考えたことないのね、

善いとか悪いとかいうのんは。迷惑かける範囲が狭けりゃ済むと思うんね。

**千夏**　ヤクザどつくの一番、好きなんだからいいよね（笑）

**はるき**　テツの設定では、不利なことは絶対やらんという、それだけで描いてる。描いてる時、俺が興味あるのは、「こういうことが起きたらこいつはどう反応するか」だけですね。こういうストーリーでみんなを動かそう、




という気は全然、ない。しかし、俺、最近、気が付いたんだけど『じゃりン子チエ』いうのが主人公やけど、あいつが別に自分で何かやろうとして活躍したことないんよね。

**千夏**　そうね。

**はるき**　全部テツとかヒラメちゃんとかの関係で、脇で動いてるだけでしょ。結局わかりきったことはあまり興味ないのね。チエ、足が速い、マラソン速い言うたら、勝ったり負けたりすんの嫌いなんやね。追い抜かれたりして、疲れてるけど頑張って、最後勝つとか。

**千夏**　私も嫌い！

**はるき**　大嫌い。だからパーンいうたらいきなりビューッと一発でしょ。

**千夏**　そう（笑）

**はるき**　テツでも喧嘩やったらいきなり勝つでしょ。

**千夏**　手に汗握るみたいなの、嫌いなのね。

**はるき**　もう、生理的にアカンな。めんどくさくなってくんのね。わかりきってるもんね結果なんか。チエが走ったら勝つのわかってるやんか。

**千夏**　ハハハ。

**はるき**　と思ってるわけですよ。バクチの時でも、最初負けとって勝ち出したり、ああいうのは嫌なんよね。いきなりつきまくってるという……（笑）

**千夏**　私もう一つ気持ちいいのはね、ハッピーエンドが好きなの。相撲大会なんかの話読んでるとね、勝てばいいと思うわけ。すると必ず勝つんだよね。それも、今、話してたみたいに、実に簡単に、完膚なきまでに、やっつけるじゃない。そういうとこが私の気分にはあってんのね。

**はるき**　俺、映画なんかでも主人公死ぬの嫌いなんよね。

**千夏**　わー、おんなじ!!

**はるき**　ああいう感動のさせ方は反則や思うのね。あんなんしたら誰でも感動するやない。

**千夏**　そう、そう、そう。

**はるき**　ええなあ思うてる奴が死んだらショックやもん。ああいうの嫌いなんよね。クリント・イーストウッドの映画あるでしょう。あれ好きなんは必ず勝つでしょう。ああいうの安心して見れるからねえ。ぼくは今でも覚えてんのは、森繁の映画で、北海道の寒いところで氷割れてはまって死ぬんですよ、おじいさんが。知りません？

**千夏**　『地の涯に生きるもの』かな。

**はるき**　知ってます？　あの映画。

**千夏**　私、見なかった。有名だったよね。

**はるき**　そうですか？　あれ名画なんですか？　たいしたことないんでしょ、しょうもない映画でしょ？

**千夏**　知らんわ。

**はるき**　そやけど、あんなショックな映画はなかったですね。小ちゃい時にあれ見たんですよ。子供に全部死なれたおじいさんがね、漁師が来る時の泊まり場を世話してるだけの人なんよね。漁がすんだらみんなおれへんようになるでしょ。そしたら、あんな寒いところでね、猫だけをこおて静かに生きてるんよね、昔思い出して。もう大変な人なんよ、子供に全部死なれて。はりきっとった男がね、嫁はんにも死なれて、やっと猫だけを頼りに生きてる奴が、猫を捕まえに行ってね、氷の中にはまって死ぬんよ。もうショックやったなあ！　最後の最後までこんな不幸な奴がおってええのか、と思てね。一週間ぐらい学校行っても気分悪かった。夢には見るしね。

**千夏**　もう、すごいわかる、それ（笑）

**はるき**　イヤでイヤで。

**千夏**　あのさ、強盗団主役にした映画って、たいてい強盗団がすごくいいのよ。強盗団の方に全然肩入れしちゃうわけ。そうすると、そういう映画て、どっかでちょこっとしたつまんない失敗でダメになるわけよ。いやあね。

**はるき**　『明日に向って撃て』なんかも好きやったけど、ま、最後の終り方、パッと止まるから、まだ良かったけどね。あんなんバーン撃たれて引っくりかえったりしたら、いややなあ、やっぱり。『大脱走』なんかでも好きなんはね、助かる奴おるでしょ、何人か。あれいやなんよね、全部捕まったら。捕まってもまた逃げたろうかてな奴らでしょ。それでうれしかったけどね。

**千夏**　おんなじ人、いるのね、やっぱり。

**はるき**　テツみたいな奴、描いとったら気分ええでしょ。どんなドジしようが傷に思うたことないもんね。都合の悪いこと全部忘れる。自分でいうまでもなく、人間てイヤな部分、あるでしょ。そういう奴が、どっちかいうと、こういうゴチャゴチャ描くような仕事するでしょ。そこでまで、思い出しとうないよね。言うてもしゃあないでしょ。そやから、傷を背負うて生きてる奴、とか描くのは、根っからの楽天家やないの？

**千夏**　そうかもしんないね。

**はるき**　そやないと、耐えられへん思うわ、あんな設定するの。描く時は気分よういきたいなあ。日常でかなりこたえてること多いんやから（笑）

**千夏**　今まで、アントニオだけが不幸なメに合って死んだね。でもハク製で出てるけど。

**はるき**　あれ死んで淋しかったから、すぐ、息子のジュニアを出したん、ぼく。

**千夏**　ああ、そうなのかー。

**はるき**　子供が絶対おるな、それは相当なやっちゃな、思うて（笑）

**千夏**　そうか、それで出てきたのね……。




**はるき**　俺ね、何となく漠然と頭の中にあったんですよ。俺は「こんなことになったらええなあ」なんて思わん男なんですよ。体に悪いから。

**千夏**　はずれた時に（笑）

**はるき** ほとんどはずれるのわかってるから(笑)。漫画売れたらええなあ、とか一切、思わん男。そやけど、いっぺん千夏さんに会えたらええなあ、と思うてたんです。

**千夏** へええ、よかった。

**はるき** ものすごおイメージ強かったもんなあ。あの『がめつい奴』の頃のイメージ。

**千夏** ひとつしか違わないから、あの頃は、はるきさんも小学生よね。

**はるき** 天才、天才て言われてたんでしょ？

**千夏** うん。

**はるき** ああいうこと言われて、こう、引きずってくると、どうなるんですか？

**千夏** ハハハ、こういう人になる(笑)

**はるき** ハァ…しかし、今のガキでうまい奴おっても、「私にはかなわん」思うでしょ？

**千夏** いや、それが残念ながら、自分では舞台を見てないわけよ。だから、ただ面白かったってだけでね。

**はるき** あ、そうか。俺は、あんなうまい子供は見たことないね。子供ごころに「なんちゅうやっちゃ！」と思うたもんねえ。あれはすごかったよ、ぜったい。

**千夏** みんながそう言うから、きっと天才だったんだろう、と(笑)。今度、五月に梅田コマ劇場で再演するんだって。

**はるき** あ、誰がやるんですか。

**千夏** やっぱり三益愛子さんがお鹿ばあさん。

**はるき** 出ないんですか。

**千夏** 私は出ないよ。大きすぎる(笑)

**はるき** それはしかし、イメージこわれるなあ。俺は、イメージ固まっとるからなあ。

**千夏** そんなら見んほうがええやろ(笑)。『チエ』は今んとこ、しばらく終りそうな見込みないわけでしょ？

**はるき** 描きたいことは、まだあるんよね。どのくらいまで続くんかなあ。そやけど、ある時、終るんやろね、いつもの調子で。

**千夏** そうだろうねえ。

**はるき** こう、終りにふさわしい話が出てきて終る、いうんとちゃうやろね。

**千夏** ホワッと終る。

**はるき** 思い浮かばへんもんなあ。こいつらに何も起きへんもんなあ。

**千夏** うん…。

**はるき** こういう連中、状況は絶対、変わらへんね。みんながみんな気分の悪いとこなんか行かへんでしょ。自分の生きやすいところだけで生きてるからね。ある意味では、何もない漫画なんやけど。

**千夏** こういう人たちが、ある程度自分の生活の中に住んじゃうわけでしょう。どっかの部分に。それは今、割といい感じで住んでるのかな。

**はるき** ぼくはみんな回りにおるような感じで楽しいねえ。そやから、話が絶対先行せえへんね。こういう話、描こうなんていうのは、全然起きてけえへん。ただチエが学校の帰りに歩いとったら、近所ウロウロしとるからね、今日はカルメラが出て来るか、お好み焼屋が出て来るか、テツに会うかで、話の筋が動いていくわけでしょ。こういう話にしよ、いうの全然ないから、何もない時もあるしね、一日中。

**千夏** アイデア、出て来ない時は大変だね。

**はるき** 出て来る方が多いんよね。テツが花井先生と会うてこういう話するとか。そういうええセリフって浮かぶのね。何となくええセリフが。そやけど、そういうの浮かんでも最近放棄してるもんなあ。もう意味ないよね。せっかく言わしたろう思うてんのに、テツがそこへ行かへんのよね。「花井なんかに会いたない」ゆうんでどっか行くでしょ。

**千夏** 「悪い予感する」ゆうて、辻曲がって

……

**はるき**　俺はもうそういうテツの方が面白なってんのよね。何か事件起きる所にみんな動いて行くよりも、それぞれの人間がそれぞれの毎日の気持ちで動いてるだけで。テツの鑑別所同窓会の時なんてね、随分ええ話考えたんですよ。反省なんかした人間は小さなるいうことを、どっかで花井先生はテツに教えてると思うのね。そういうことって重要なことでしょ。花井先生とテツの関係が成り立ってるということでは。俺はそういうことを言うために、せっかく同窓会いうのを設定したのよね。そやけどいざふた開けたら、久し振り、わー久し振り、いう感じでしょ。ハダカで踊ったりして。あの時ほんま思うたね。俺なんかが思うているほうにはとても動いてくれへんなて。せっかく考えたことが、全部アカンかったですね。がっかりしたなあ。

**千夏**　テツにこわされちゃったのね（笑）

**はるき**　何か状況作ってテツのある部分見せたろとか誰かのあの部分とこで喋らしたろと思うても、もうそうなれへんようになってしもうた。どう考えてもおかしいのよね。

**千夏**　こわいことやね。みんな勝手に生きとるんや（笑）

**はるき**　自分で手に負えんようなとこ出てきてるね。一巻や二巻の頃は、親子三人京都行って、チエが歌う。あれ、まあまあいい話でしょ。ああいう場面描けたけど、今もうアカンのよね。ああいう何となくしんみりしたええストーリー出て来てもね、もうアカンな。全然アカン。全く違うことしてしまうね。そこに持って行くの大変や。ボクシングなんて描いたけどね。テツなんてボクシングやるわけないでしょ。やるんやったらもっと最初にやってるやん。喧嘩強いんやから。あんなこと耐えられへん奴なんね、束縛に。俺はテツがね、あのええ歳でボクシングやってね、田舎から出て来て家立てようとか一所懸命燃えてる、根性だとか鍛えられてる若い奴を、たった一発でぶちのめすような話を描きたかったんや。なんぼ人間なんて苦労したとか根性やとか言うても、テツみたいな奴に一発撲られたらあからさまに現実が浮かび上がって来るでしょう。今、努力して努力してチャンピオンになって行くような漫画多いでしょ。あんなんはあるわけないんや、いうの描きたかったんやけど、まともにボクシングやれへんもんね、テツは。テツなんかにはもう、がっかりするのね。最近、何やっても裏目に出てる。アホとちゃうかなと思うわ（笑）

**千夏**　まあ、えらいこっちゃけど、はるきさんが作った人たちやから、付き合わんとしゃあないな（笑）

（3月10日・話の特集にて）

# 「なんとなく」じゃ、すまされねぇ

戸井十月

世の中、略語というものがある。サ店なんぞでは、レモンスカッシュを「レスカ」と言い、チョコレートパフェを「チョコパ」と言う。これ位は常識。で、話は横道にそれるが、面白い話があるので、突然紹介してしまう。

某月某日。新宿の某喫茶店に、頭(アタマ)角刈りに真っ黒なグラサン、黒のスーツにワニ皮の靴といった、一見してそれとわかる、コワーイお兄いさんが入ってきたと思いねえ。このお兄いさん、LARKに一服つけると、やおら「野菜サンドとアメリカン……」と渋くオーダーした。注文を聞いた、いかにも健康だけが取り柄といったウェイトレス、調理場まで行って注文を伝える手間をはぶき、その場から、こう叫んでしまったのだねー、実に。

――ヤーサンに、アメリカンひとつー

店内、シーンと静まりかえったね。お兄いさんの目が、黒いサングラスの奥でギラリと光ったかどうかは定かでないが、ホント、ヤバイったらありゃしない。略語も慎重に使わんと、しまいにゃどんな目にあうかわからんといった教訓の一コマ。無神経はいけないよ、無神経は。ちなみに、コレ、本当のホントの話であります。

で、本題。近頃、鳥肌総立ち、不愉快きわまりない略語をよく耳にする。「ナンクリ」ってやつ。そうそう、一橋大学の、田中康夫とかいう生タマゴ面のジャリが書いた小説(?)、「なんとなくクリスタル」の略語なわけね、コレ。

「ナンクリ」って、いかにもその本体のアーパーぶりを象徴した語感で、それはそれなりの略語とは思うけど、なにせ中身がなさすぎてハシにもボウにもかからない。コンニャク食いすぎて出る屁みたいなもん。

こういうのが「文芸賞」どか、もらっちゃうんだからさ。世の中、底抜けだ。どんなアホでも、結構やっていけるじゃん、みたいな気分になっちゃうね、まったくの話。

ところで、「純文学」って一体何なの?

㊟ここで、突然語調が変る。

「河出書房」の編集者よ。
「文芸賞」の審査員よ。
「朝日新聞」あたりで論壇時評かなんかやってる、評論家センセイよ。

冗談キツイぜ、ホントに。お前らの脳ミソ、マーボー豆腐かよ。理研のマボちゃんかなんか振りかけて、グチャグチャにかきまぜて食っちまうぜ。ま、食ったらこっちまでアホが伝染しそうだからやめとくけどよ。

「クリスタル族」っつうのは、頭の中、素通しガラスみたいにぬけっちゃってるアーパー野郎のことを指すと俺は解釈してるけど、書いた本人は勿論のこと、それを持ち上げる奴、賞をやる奴、本にする奴、本を買う奴……そういう手合い全部ひっくるめての総称でもあるわけだ。おーおー、あんまり寒くて涙も出ないぜ。

とまあ書いてはみたものの、ホントは、「ナンクリ」なんてどうでもいいのね。生来のアーパーを本気で構うほど暇でも貧しくもないしさ。原宿、青山あたりをウロウロしているイモは、昔から腐るほどいたしさ。ハマトラ、ニュートラの「JJ娘」の大半が、大根足のカボチャ面(ツラ)だってこともよーく知ってるしさ。「おーおー、そこらのダサ坊が勝手にや

れば」ってな感じなわけね。あんまり近寄ると、こっちまでダサくなっちゃう恐れの方が大きいわけ。だから、ホントは話題にもしたくないわけ。……口が腐りそうだから。

ただね、あんまりアーパーな物件見てると、「ちょっと調子に乗りすぎじゃない」って、優しく忠告したくなっちゃうのね、悪い癖で。

で、優しく忠告してやるからよく聞けよ。田中康夫。いや、生タマゴ小僧。

お前が、脳ミソスケケのパープー野郎だってことはよく心得ている。だから、優しく、わかり易く言ってやる。

――身のほど知らずのことはするな。

――知らんこと、わからんことは口にするな。

どうだ、これならお前にもわかるだろ？

ナニ!? まだ、わからん。それなら、二月二日付の朝日新聞から、お前自身の言葉を引用して説明してやる。よーく聞いてろよ、お前が言ったことだゾ。

田中　安保闘争や学園紛争のころは、全員が同じセリフをはいていたでしょ。でも、ぼくらはそんなことはしない。水晶に入ると光は直進するんじゃなくて、何度か曲がって出てきます。勝手に屈折するんじゃなくて、ぼくたち自身がクリスタルで、その光（情報）を選り分けているんです。

こういうことを言うナ、と言っているんだよ。いくらパープーとは言え、極度の軽はずみは慎しんだ方がいい。世の中、優しくて余裕のある人ばかりじゃないからな。だから、忠告してやってるわけだ。

俺は、「安保闘争や学園紛争のころ」大学生だったんである。この「安保闘争」が、六〇年を指すのか七〇年を指すのかハッキリしないが、ま多分、前後の脈絡からいけば、〝全共闘世代〟のことを指しているのだろう。

そう、つまりは俺たちのことだ。

その俺たちが、一体いつ、どこで、「全員が同じセリフをはいていた」のか。お前は、それを見たのか？　そこにいたのか？　体で感じ、手で触ったのか？

何を根拠に、お前はそう言えるのか――ハッキリしろ、ハッキリ。

小僧、毛ぐらいは生えているだろう。自分がはいたセリフの責任ぐらいは、キッチリとれるんだろうな。公のメディアで活字になった言葉の重みを、引き受けられるのだろうな。俺たちのことを分析し、解釈し、総括するなら、それ相応の覚悟はあるのだろうな。おいおい、今更逃げ腰は困るぜ。「学園紛争のころ」の人には、冗談もわからん不粋者が多くてな。「口がすべりました」じゃおさまらねえんだよ。ビッとしろよ、ビッと。

もう一度、聞く。

お前は、自分がはいたセリフにどうオトシマエをつけるのだ？……それだけが聞きたい。

お前らが「光を選り分け」ようが、「本当に日本が危ないって思ったら、だれもが行動する」（東大新聞）と思おうが、そんなことはどうでもいいんだ。水晶だろうがタコ焼きだろうが、好きにしな。関係もないし、興味もない。

ただ、嘘はつくなよ、嘘は。責任のとれない言葉ははくな。「自分はこれほどまでにアーパーです」と説明しまくるのは、お前の自由だ。勝手にやれ。ただ、その素透しの頭で、焦点の結べない目で、他人のことを見れると思うな。語れると勘違いするな。言いたいのは、それだけだ。

しつこいようだが、これは目一杯優しい忠告だ。これでもまだ意味がわからんのなら、小僧、あとは直接会うしかなくなる。

世の中、「なんとなく」じゃすまされないこともあるんだよ。どうだい、学校じゃ教えてくれなかったろう。ともかく、チョロチョロするな。目ざわりだ。






郵便はがき

150-

40円切手をお貼り下さい

東京都渋谷区神宮前4の30
セントラルアパート681号室
話の特集編集室行

住所
氏名
職業・年令

「話の特集」はいま新読者拡大、倍増めざして活動を進めています。ご支援をおねがいします。
**お知り合いの方を御紹介ください。**(試読誌呈)

| おなまえ | おところ |
| --- | --- |
| • | |
| • | |
| • | |

# 耽美の世界に生きる男たち

［トレネとルタンス］

永瀧達治







『トレネの魅力というのは、結局のところ、エメルヴェイエ（魅了され、茫然自失としているさま）ということに尽きるんじゃないかな』『エメルヴェイエ！　そうだ、まさに、エメルヴェイエなんだ！　やっと、的確な言葉を見つけたぞ！』

長い時間をかけて話していたシャルル・トレネに関する心酔談義にやっと、フィナーレを飾る満足のいく言葉を見つけた私たちは、嬉々として、予約時間をとっくに過ぎたレストランへ行くために、ウィスキーのグラスをテーブルに置いて腰をあげた。『エメルヴェイエ！　エメルヴェイエ！』……セルジュは私の定義した言葉に、ひどく感動した様子でレストランに向かう道すがらも、その言葉を何度もくり返した。彼が、くり返すたびに、何気なく口にした私自身までもが、われながら、何と、いい言葉を見つけたのかと、その言葉の美しさと的確さに感動してしまった。セルジュが、エメルヴェイエと呟く時、彼は子どものような笑顔を夜空に向けて、両手を広げて見せる。その姿は、まさに、その数日前にテレビで見た、40年代のドキュメンタリー・フィルムの中で歌うシャルル・トレネにそっくりであった。モンパルナスにある『ジョゼフィーヌ』という、セルジュ好みのどこか人を喰った大そうな名前のレストランに入り、シャンペンのコルク栓が一本、二本と、心地よい音をたてて、抜かれるたびに、私たちは、再びトレネへの果てしないエメルヴェイエの世界に没入していった。

＊

＊

すべての道には、始めと終りが必ずあり、往々にして、始めと終りというものは、同一地点であることが多い。だが、この同一地点に立ちながら、始めと終りでは認識ということにかけて、大きな違いがある。始めの地点に於ては、自分はそこにいるのだけれど、一体、そこがどこであるのか、本人には全くわからない。ところが、終りに、そこへ再びもどり、辿りついた時には、そこが、どこに位置するのか、明確な認識を持って位置している。禅に於ては、脱社会に始まり、悟りの後、社会にもどることに似ている。何やら、哲学的な命題で恐縮であるが、シャンソンの真髄というものが、シャルル・トレネに始まり、シャルル・トレネに終る——という今の私の個人的な見解を何とか、分析してみたいという論法なのでこの大上段の構えを許して載きたい。

シャルル・トレネは一九一三年に生れ、30年代から、現在（68歳）に至るまで唄い続けている。まさに、シャンソン界の生きた化石のような存在であるが、化石といっても、それは、ナウマン象の如く巨大であり、ただ、やたらに半世紀にわたって歌い続けてきたわけではない。《歌う狂人》の異名を、ジャン・コクトー、ボリス・ヴィアンといった違いのわかる男たちより冠せられ、その名は既に、シャンソン史上に、燦然と輝く存在である。

エディット・ピアフの如き、ドラマチックな唱法でもなく、又、彼女ほどの強烈な個性にも欠ける。しかも、レオ・フェレや、ジョルジュ・ブラッサンスのように、知性の輝きをともなった反骨精神があるわけでもない。トレネは、あどけない少年のような表情で、今やシャンソンのスタンダード曲となってしまった『ラ・メール』や『詩人の魂』など、間が抜けていると思われるほど、単純で、ナイーブな歌をひたすらに歌うのみである。——それにも関わらず、トレネは、モーリス・シュバリエ、ティノ・ロッシなどの大衆歌手とは明らかに一線を画し、ブラッサンスをはじめ、多くの現役知性派歌手たちからも、多大な敬意を集めている。

シャンソンがシャルル・トレネに始まると言うのは、その単純にして、明解なるシャンソンの魅力を凝縮した彼のスタイルで納得がいくのだが、トレネにして終るという考えを持つまでには、多少の経緯を要することになった。白状すると、私は一時期、トレネがなぜ、コクトーからあれほどまでに絶賛されるのか、理解に苦しんだことがある。同性愛者同志の奇妙な仲間意識に過ぎないのではないか——などと、今、思うと、恥ずかしいぐらいの下衆な邪推までしていたものだ。しかも、私にとって、メシア以上の存在であるボリス・ヴィアン、ジョルジュ・ブラッサンスまでもが、トレネに脱帽となると、私はいささか自らの不感症を恥じるようにもなった。シャルル・トレネの偉大さをいくら頭でわかっていても、心に、いや、腹に、いや、イチモツに響くような興奮を覚えなければ、すでに評価し尽くされているようなトレネに触れることはタブーでもあろう。

道を極めた時に、私たちが往々にして原点にもどるということを、多くの人が『初心を忘れず』の教えだなどと思い違いをしている。始めと終りの地点に於ける認識の違いとは、始めに於て、その道のことしか、わからなかった専門馬鹿が、終りに至って、あらゆる道に通じた悟りを得ていることだ。偉大なる職人が、往々にして同時に、偉大なる哲学者であるのも、その理由である。

勿論、シャンソン道などというものは存在しないし、トレネに興奮したからと言って、悟りが開けるわけでもない。ただ、シャンソンの

魅力が、始めとしてのトレネならば、終りのトレネには、シャンソンなどという音楽の一分野に過ぎないものを超えた人間性とか美への憧憬が、そこに宿っているようだ。

私がシャンソンの終りとしてのトレネを感じることができたのは、ファッション雑誌の何とも異様な美しさを持つ広告写真、そしてその隅にある Serge Lutens の名前……シャンソンらしからぬきっかけであった。




ルタンスによる資生堂ポスター

＊　＊

今年の一月、モンパルナスに近いセルジュ・ルタンスのアトリエでトレネ談義に夢中になった時は、もう既に、私は、トレネとルタンスという耽美派の狂人たちに完全に心を捉われていた。シャンペンの酔いが、すっかりまわった頃、セルジュは、エルテに舞台を、サン・ローランに衣装を、シャルル・トレネに音楽と歌を、そして自分はメイクと演出を担当するという20世紀最大のイヴェントを夢を見ていた。彼の夢は、彼が情熱をこめて語るほどに、明確な姿形となって、私の脳裡に投影されてくる。束の間の幻のスペクタクル――セルジュ・ルタンスはまさに、美の世界から送られてきた魔術師に思えた。

セルジュ・ルタンスを紹介するのに、メイク・アーチストとか、イメージ・クリエイターという言葉は、どうもぴったりとしない。メイクと言っても、デパートでのデモンストレーションなどとは、関係がないし、イメージと言っても、広告代理店の企画するような商業イメージとも違う。彼が作り出す世界というのは、ルタンスの作品以外の何ものでもない。又、例え、そこに商業主義の手が加担したとしても、それは、画家と画廊商人の関係に似ているだけだ。ルタンスの名は、12年間にわたる一連のクリスチャン・ディオール社のコスメチック広告によって、世界に知られ、今は、資生堂のイメージ・クリエーター

として、ポスターなどを手掛けているが、それにも関わらず、ルタンスの名前が出る時、ディオール、資生堂などの名が、つきまとうことはない。ファッションの世界に身を置きながら、セルジュ・ルタンスの名前は、ファッション愛好家たちよりも、芸術愛好家たちの間で囁かれることの方が多い。

一九三〇年代のブルジョア女性というのは商業主義によって画一された現代女性よりも装うということに、勇気と遊びの精神を持っていた。夜のパーティ・ドレスを較べてみても一目瞭然であろう。現代女性には、有名なオートクチュールを着ることだけが目的で、前衛的な装いの遊びはタブーに近い。装いに関しては何故か半世紀を経た今、その精神構造だけは、保守化して時代と逆行している。ファッションが大衆化し、ブルジョア女性が装う勇気をなくした時点から、ファッション界の芸術家たちは、消えていく運命にあった。最後の芸術家たちであるサン・ローラン、三宅一生にしても、その商業主義と芸術性の狭間に於て、精神的に不安定な生活を余儀なくされているに違いない。芸術家として最たる不幸を背負って生きている彼らに較べて、セルジュ・ルタンスの仕事は、ファッション界に残された唯一の芸術活動の場と言えるのではなかろうか。そして、彼が表現する女たちと言うのは、必然的に一九三〇年代のあの勇気あるブルジョア女性たちの、素晴らしき女性美を持っている。セルジュ・ルタンスは言う——

『私にとって、仕事は生きる歓びでもある。だから、もう一度、生れ変わったとしても同じことをするだろう。でも、ファッションの世界は選ばないだろう。私が13歳の時、その頃のファッションの世界は神秘のベールに包まれていた。〃高貴なる女性の世界〃というか、まさに、荘厳な寺院の如く、閉鎖的な存在で、女性たちは、威厳と神秘の美しさに満ちていた。私にとって、女性は神格化された存在だった。世界が変わったのか、私が変わったのか……何れにしろ、人生をやり直すなら、ファッションの世界にはノンとしか答えられない。今なら、映画の世界にでも……ファッションは私にとって可能性の選択に過ぎなかった』

後にひきつめた黒い髪、獲物を狙う鷹のように鋭く、それでいてインカ帝国の王を思わせる優しさと気品に満ちた黒い瞳、小柄な体つきさえも、その風貌によって、スクリーン上のヴァレンチノの如く神話に包まれた美青年と化してしまう。この男、セルジュ・ルタンスが、ファッション界の人間としては珍しく、シャルル・トレネに傾倒し、アトリエでは四六時中、トレネの曲をかけ続けるという。更に、このファッション界の異端児が、私に終りとしてのトレネを知らしめたのである。一見、何の関わりもないこの両者の結びつきには、ルタンス自身の口から語られた生いたちと、彼の内面を紹介しておく必要があろう。

*　*

一九四二年に、北仏の工業都市リールで生れる。数世代も逆のぼれば、スペイン系、ロシア系といった血に辿りつくが、生粋のフランス人として、質素な家庭に育つ。父は公務員であったが、実際には何をしていたか、本人も全くわからない。母は再婚で父に嫁ぎ、セルジュが生れ、更に2歳下の弟、10歳下の妹が生れた。

『私は家庭内では、全くの突然変異だ。血縁関係の中には、誰ひとり芸術とか、文化に関係していないし、私の家庭は、文化とか、知性という言葉から程遠い、環境だった。第一、家庭内の会話が全くない家族だったね』

彼が自分を突然変異と思うようになったのは、家庭内のことだけではなかった。幼い頃から、自分と他人の違いを感じとっていた。それは、自意識というより、外界に対する完全な関心の欠如であり、今で言う自閉症的な子どもである。

『私の幼年時代はひどく孤独だった。と言っても悲しくはない。ただ、自分の世界に閉じ込もっていた。他人は好きだし友人を拒んだこともないが、人とつき合うこと自体が難しかった。小さい時から、例え、両親とテーブルにいても、近くにあるもの、手あたり次第で、クレヨンや、パンくず、塩、紙きれで、人の顔を作っていた。色々な顔ができたが、顔しか作らなかった。引き出しには、シャンペンや、ワインのコルク栓がいっぱい詰まっていて、私は何時間も、コルク栓に顔を描いたり、服を着せたりして遊んでいた。勿論、今の仕事ではもっと上手になったけど、今でも私はコルク栓と遊んでいるのと、心の中では同じ気持ちなんだ』

彼がなぜ、顔にこだわっていたのか？——

『私は自分に対しての精神分析をしたことがない。私がなぜ、顔にこだわり、黒が好きなのか、わかってしまえば、私は顔も黒も嫌いになり、何も出来なくなる。この人間の脆さというか、病的なることの寸前という存在に私たちは安住しなくてはならない。それはとても大切なことだ。病的なる境界線を保つことは。いつも私の作る肌と比較するのだが、最も美しい肌は乾性の白い、なめらかな肌だ。同時にそれはもっとも、フラジル（壊れやすい）な肌でもある。この脆さということに、私は魅せられ、そこに美が存在すると思う』

学校に於ける少年ルタンスは、常に教師から叱られてばかりいた。教室から行方不明になることが多く、やっと、学校裏の林の中で見つけると、何時間も、しゃがみ込んで木を見つめていたり、又、教室にいたとしても、心は上の空で、窓の外の枝を見つめていたりストーヴの火を見つめていたり。

『現実の世界で何が起こっているかなど、全く関心がなかった。ボーッとしていたわけでなく、私はあるものに魅せられて、見つめていると、私自身がそのものになっていた。木を見つめると木になり、火を見つめると火になり、家にいる時は、一日中、暖炉の火を見つめていたことがあった。私自身であった時のことの方が少ないぐらいだ。女性を見つめても同じことだ。私が女性化するのでなく、私自身が彼女と同化してしまう。私が一旦、何かに魅せられると、茫然自失となり、それを防ぐ方法はないんだ。それが病的か、詩的かはわからないが、こういう自分というものを背負い、何をするかが大事なんだ』

現実の世界から、全く離れて生活していたルタンスの記憶からは、具体的な現実のイメージが全く欠如している。教師の言葉、友人の顔や名前などすべて、無関心が忘却のかなたに追いやってしまっている。彼の少年時代の記憶とは、紙きれやコルク栓の様々な顔、校庭の木々、ストーヴの火、女教師の大きなシャポーと金のブレスレット……そこには、言葉や物語はなく、すべて、断片的なイメージしかない。そんなイメージの中に、ある日、母親が一度だけ見せた彼女のウェディング・ドレスがある。母親の結婚は再婚であった為、白いドレスを身につけることは出来なかった。白は純潔の象徴であるから。だが、白で

なければピンクでも、赤でも、青でもよいわけだ。ところがルタンスの見たウェディング・ドレスは黒であった。

『今から思うと、実に奇妙なウェディング・ドレスだが、私はその美しさに魅せられて、今でも、そのドレスがどんなだったか、細かい所まで思い出すことができるよ』

＊　＊

ルタンスが夢の世界から現実世界へ生活を変えることを余儀なくされたのは、13歳の時、美容院に働きだしてからだ。

『リールでも有名な店だったが、下働きの2年間は悪夢のような時代だった。一日中、夢想の中で生きていたのが、美容院で人間の醜さとか、意地悪さ、偽善と、汚ない側面を、急に全部、見せられたものだから。最も下劣で、下品な世界があるとすれば、その時の美容院の世界だね』

二年間の下働きの間、彼は自分に潜んでいたエネルギーを発見した。自分の殻に閉じ込もっていた今までのエネルギーが爆発するかのように、彼は人より多く、早く仕事をこなし、覚えてしまった。ひと通りの技術を彼が学んでしまうと、今度は、コルク栓での遊びと、魅せられた対象に自分がなりきってしまうような喜びが伴って、ルタンス流のヘアーを作り出し、たちまち、店の看板スターとなる。

『今していることを、既に当時、作り上げていた。項の髪は剃り、その頃、流行のパーマでカールなどというボリュームを取り去って、短髪の平たい髪型にした。それはリールの町で大評判となり、店の階段にまで、客待ちの列が並んだことも始終だった。硬い髪、そしてギャルソン風のひきつめた短髪、それは、サスーンなどより、ずっと以前に、リールで私がしていた。イギリスのヘアー・モードが、後に流行したが、リールの街は工業都市で、店の客であった夫人たちは、いつもロンドンで週末を過ごすような人々だったので、その影響だと今では信じて疑わないね』

ルタンスの仕事は、今でも変わらぬが完璧すぎる程、完全主義を貫く。店の看板スターとなればなる程、仕事に時間がかかり、客がコートを着て帰ろうとする時に、一本の髪の乱れが気になり、廊下にまではみ出し順番を待つ客を尻目に、再び、前の客を椅子に座らせることも往々にしてあった。こうして、夢中になって、一週間仕事をする間、彼の生活は、仕事だけに塗りつぶされる。朝のネスカフェから、夜にわずかの食事をするだけである。わずかな収入ではあったが、彼はそれを土曜日の夜だけにすべてを使った。土曜の朝は、まず女友だちのメイク、ヘアーから始まる。その夜の外出の為に、彼は連れて歩く女性の頭からつま先までを、自分の手で作り上げるのだ。勿論、アクセサリーから服までも、自分で選ぶか、自分で作った。彼女が完成すると自分も盛装し、最高級のレストランへ繰り出し、ぜいたくの限りを尽くす。そして、翌週、無一文になって仕事に没頭する。彼のこの生活のスノビズムは、生活が安定するディオールとの契約まで続くことになる。その後も彼は、収入の殆んどを、仕事に費してしまう。例えば、十万フランの仕事であってもそこに、十万フランの宝石を必要とするなら彼は、買ってしまうであろう。

ヘアーだけをすることに、嫌気がさしたルタンスはリールの劇団に



アトリエでのルタンス（撮影＝筆者）

移り、舞台装飾と衣装を担当した。そこでも、彼は美容院で客を待たせたように、演劇の演し物については、全く無関心で、自分の世界を創り出すことに没頭した。古典劇の舞台で、コート掛けのハンガーが奇妙な風体をした人間であったり、彼の手掛ける舞台は台本と関係なく前衛的であった。彼にとって、コルク栓遊びをさせてくれる場さえあれば、よいのであって、美容院や演劇が成功するか否かには、全く無関心である。ディオールにしても、現在の資生堂にしても同様である。だが、ことごとく、彼の才能は画廊的存在のパトロンたちに、大きな利益を与える結果となっている。

ヘアー、メイク、衣装、装飾とひと通りの仕事をした彼は、ポケット・カメラを手に、20歳の時、パリに飛び出した。勿論、土曜の夜の散財で、金もなく、パリに友人がいたわけでもない。それでも、彼は自分の成功を信じていた。自分のしたいことをさせてくれるのは、ヴォーグ誌しかない。この雑誌だけが自分の才能に合う——地方都市出身の青年の自尊心は、楽天的そのものであった。公衆電話から約束をとりつけ、貴族の御曹子のようなイデタチで、ヴォーグ誌に向かった時、彼のポケットには、2フランの硬貨と2枚のメトロの切符しかなかった。残りの金は、ヴォーグ誌に見せる為の、自分の作品の写真を大きく引き伸ばすのにはたいてしまっていた。

当時のヴォーグ誌編集長、E・シャルル・ルーによって認められた彼は、ジャルダン・デ・モードを初め、数々のファッション雑誌のメイク・ヘアー・アーチスト、スタイリストとしてルタンスの世界を次次と発表していった。

一九六八年、ディオール社の専属となった時には、彼のヒッピー・スタイル（土曜の夜以外、彼はボヘミアンそのものであった。）に眉

をしかめる幹部に対して更に、眉をしかめさせる条件を提示した。
一、朝はゆっくり眠っていたい。
一、ネクタイは締めないし、髪は切らない。
一、時間に束縛されたくはない。
一、好きな時に、好きなことをする自由がほしい。
ディオールの幹部は、苦虫を噛みながら、この要求を受けた。ルタンスの才能が、ディオールに何をもたらすか、十分、承知していたからだ。以後12年間、芸術家としてのルタンスの名は、ディオールという商標と肩を並べる程、有名になった。
ヘアー、メイクを芸術に高めた男、自らの手で作りあげたアトモスフェール(雰囲気)を写真により映像化する男。——それは、『万物ことごとく装飾美術である』というアール・ヌーヴォーから、アール・デコまでの精神の息吹きを、再び80年代に感じさせる存在である。

＊　＊

今、パリのレストランなどを訪れると確実にアール・ヌーヴォー、アール・デコの復活を感じる。ハイ・テクノによって極められた人間性の排除のUターン現象である。
アール・ヌーヴォーの旗手、エミール・ガレは、芸術を《装飾的芸術》と《表現的芸術》に区別している。——装飾的芸術は、その気品と美しさによって、人を感動させる喜びを求めるが、何かを表現しようということには注意を払わない。えもいわれぬ魅力に知的歓喜と一体化した妙なる風味——
このエミール・ガレの区別は、シャンソンの世界にも言えることであり、明らかにシャルル・トレネは装飾的芸術としてのシャンソンであり、ブラッサンスは、表現的芸術としてのシャンソンとなる。
シャルル・トレネの評価を語る時、フランスの多くの評論家が、36年の人民戦線、つまり有給休暇を勝ちとった労働者の自由への目覚めを、社会心理学として、シンボライズさせる。確かに、トレネが、のどかな田園風景の自由を歌う時、そのスタイルは、アール・ヌーヴォー、アール・デコなどという、10年から30年の時代を逆のぼることは出来ない。スタイルとしてはやはり、ジョセフィン・ベーカー、ミスタンゲットなのだ。だが、トレネが歌に寄せる茫然自失としたそのエスプリは、まさに、アール・デコまでの装飾的芸術家の持っていたエスプリであり、セルジュ・ルタンスに共通するエメルヴェイエに他ならない。
トレネの歌を聞きながら、あのコルク栓で遊んだ頃の日々を回想するセルジュ・ルタンス——それは余りにも、ナイーヴな耽美の世界であり、トレネの歌にまつわりわく、労働者の有給休暇などという安っぽい自由の切り売りのイメージはふきとんでしまう。トレネにとって、彼の歌が、労働者に自由の息吹きを与えようが、与えまいが、どうでもいいことだ。ルタンスが、茫然自失として、コルク栓に夢中になるように、トレネも歌に夢中になっていただけであり、何かを表現しようということには、一切、関心を払わなかったに違いない。トレネの歌が持つ、この装飾的芸術としての真髄を感じさせてくれたのは、ルタンスという全く違った分野の男からであり、私は、彼ら、耽美の世界に生きる男たちの心に、ただ感動するのみである。

# 都市の記憶

⑤——［原の墓標］

金井一郎



これは、一九七〇年代後半から一九八一年にかけての「武蔵野台地と周辺の歩行記であり武蔵野大地と彼方の幻視録である。



●——一九七九年十月　品川区西大井六丁目

品川区西大井六丁目に、今は道路となった立会川に接して小さな児童公園がある。そこは人造芝の遊戯場と遊具(写真①)、小さな池、砂場そして一隅にはネットフェンスで囲われた狭いキャッチボール場がある。フェンスに寄り添って時計塔が立っている。それを良く見ると四角な時計を「原」という文字の「日」の部分に見たてた一種の隠し文字になっている。柱には「っ」と「ぱ」という文字が付け加えられ全体として「原っぱ」と読める。(写真②)公園の入口には「品川区立　原っぱ公園　昭和48年3月完成」という銘板が、壁にはめ込まれている。(写真③)この公園の開設とほぼ時を同じくする一九七二(昭和四七)年に「原っぱ・洞窟の幻想」という副題を付した『文学における原風景』(奥野健男)が刊行された。そこに次のようなくだりがある。

「同じ子供たちの遊びの小空間であっても〝原っぱ〟は区役所がつくる今日の児童公園とか、チビッ子広場などとは性格が本質的に異なっていた。滑り台やブランコやジャングルジムや砂場などの設備があるお仕着せの遊び場ではない。そういう公認された明るい、けれど味けないしらじらした遊戯空間ではなかった。それは非公認非合法に子供たちが占拠した秘密の遊び場であった。」

非公認非合法の原っぱと公認合法の公園が結合した「原っぱ公園」の出現は、けだし大正・昭和初期に生まれた「ぼくたち都会の子供たちにとって〝原っぱ〟が存在したということは何という幸福であったろう。」(前掲書)という感懐を共有する世代に属する人々が、小さな児童公園に仮託し



●——一九六八年二月　品川区西大井六丁目

た幻想であったのだろうか。

一九七六（昭和五一）年刊行の『広辞苑第二版補訂版』を開くと「原っぱ」という項目がある。しかし一九五五（昭和三十）年の第一版や一九六九（昭和四四）年の第二版には、その項目はない。原っぱとは世代の言葉であり、又時代の言葉でもあるようだ。一九六九年から一九七六年、列島狂乱の大地改変の渦中に原っぱを呼び起こし、託し



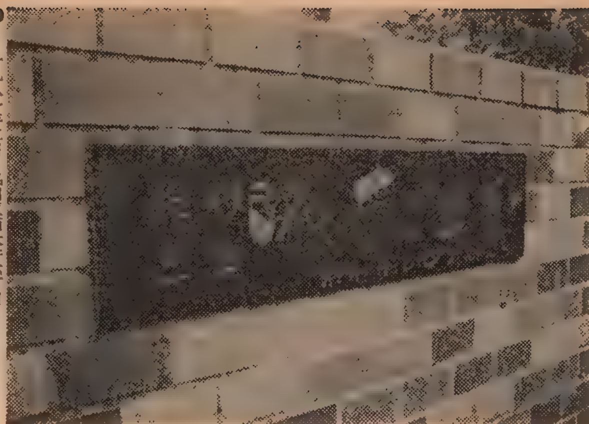

●—一九八一年二月　品川区西大井六丁目

た想いは何であったのだろうか。『広辞苑第二版補訂版』の原っぱは次のように記している。

【原っぱ】「原」のくだけたいい方。

(ちなみに原は【原】①平らかで広い土地。②耕作しない土地。野原。原野。)

「くだけたいい方」といういい方は、何故か苦い



●——一九八一年二月　品川区西大井六丁目




④一九八〇年秋　新宿駅で配布されたパンフレット

響きを持っている。くだけ、切れっ端となったのは言うまでもなく原である。しかし、そして何よりもくだけ、ちぎれ、片々となって飛び散ってしまったのは、平らかで広い原を渇仰する感性に他ならない。平らかで広い原への理性的な諦念は様々な形の歪みを生み出さずにはいない。

原っぱ公園のネットフェンスに囲まれた狭いキャッチボール場では、ユニフォーム姿の少年野球チームが三十人程ひしめき合い、数人の大人の叱声と罵声の中でキャッチボールをしノックの打球を受けている。この公園で時を過ごした子供たちは、大正、昭和初期に生まれた世代が郷愁と憧憬をこめて原っぱを語ったように、原っぱ公園を語りつぐことはないだろう。しかし公認合法の公園の名に冠せられ、辞典に登録されたかつての「健全な大人の目からは、凶々しい不吉な場所」(奥野健男　前掲書)原っぱの言葉は、世代と時代の幻想を介して市民権を得たのである。

今、手元にパンフレットがある。一九八〇年秋、京王線新宿駅に置かれたそれには、次のようなコピーが記されている。「**お父さんたちのゲームセンターは、原っぱだった。そこにいろんな工夫があった。**（傍点原文）青空の下なら、もっと裸になれます。かんけり、けり馬、茎ずもう…笹舟、草笛、竹とんぼ…。都会のゲームセンターにはない、お父さんたちの工夫した遊びの数かず。こんどの休みは親子で出かけてみませんか、おおらかなふれあいの場へ。――穴場は意外に身近にあるものです。親と子の青空学校　京王沿線　片倉城跡公園」（写真④）

「のどかな自然公園あるいは原っぱといった趣き」（同前）の郊外へ誘う文面に、野性へと呼びかける響きはない。親と子の共有すべくもない幻想を弄ぶ中で、子供達の秘密結社は解きはなたれ親と子の絆に結びなおされてしまった。そしてゲームセンターと等値された原っぱは、親と子に提供される慰楽とないまぜになった学習教化の手段として消費される場となったのである。陽光の下、昔遊びの本を開きながら過ごす親子連れの姿は想うだに凶々しいものだろう。「意外に身近にある」という句は、十年程前のディスカバー・ジャパンのよく知られた掛声「思い切って遠くへ出かけられます。」「もっと奥へ入りましょう。」の頓挫からの回帰であろう。しかしその言葉も穴場というカタログ文化の申し子が付けられ、身近な場所を見つめる事を語りかけることはない。原っぱは今、大地への萎縮した幻想そのものとなっている。

武蔵野台地にある、首都の残り少ない平らかで広い土地、立川基地跡地の一画に作られる国営昭和記念公園の中に「みんなの原っぱ」が出来るという。（朝日新聞東京版一九八一・二・七他）「非合法非公認に子供たちが占拠した秘密の遊び場」「健全な大人の目からは凶々しい不吉な場所」であったと語られ、「蔑称的語感」をもつという原っぱは、世代と時代の共感を得て、市民権を受け商品ともなり、ついに国の認証を受けたのである。しかしその言葉が大地を離れ漂い出し社会的認知を獲得していく過程で、「原っぱ」がもっていた人間と大地の歴史へと遡及し想像の翼を拡げる本源的意味合いは見事に捨象されていったように思われる。それは例えば「〝原っぱ〟は単なる野原ではない。野原の切れっぱし、それは都会の中にまぎれ込んだ自然、いや古代の原野なのだ。」（『文学における原風景』）あるいは「〝原っぱ〟は田園風景の田舎よりもっと古いものだ。それは農耕文化以前の原野なのだ。」（同前）という魅惑的な章句が、「律令時代、山野河海は『公私その利を共にす』とされ、だれもが自由に立ち入れた」「もともと山野河海には、だれでも立ち入ることができたはずである。そこに境を立てて制約を加えようとするものに対する人々の根強い反発」（『日本の歴史⑩蒙古襲来』網野善彦）という重い記述とが、交叉し出会う時、感受される昏い緊張の内にある。おそらく原っぱは山野河海への本源的権利が、くだかれ追いつめられていった、いやはての姿に他ならない。とすれば七十年代初頭、

列島狂乱の最中、顔を出した原っぱの幻想は気息えんえんたる本源的権利を渇仰する感性のあかしだったのかも知れない。国営昭和記念公園「みんなの原っぱ」は、隅っこにおしこまれ封じこまれた大地への本源的希求を看取した「みんなの感性」を記念する巧まざる墓碑銘であるかもしれない。

立川基地跡地には、国営昭和記念公園に隣接して広域防災基地（陸上自衛隊飛行基地）が作られるという。工事が始った跡地の北側に立つと、平らかで広い土地の向こうに、丹沢、道志、奥多摩、秩父の嶺々が、あますところなく見渡せ、その山なみの上には富士も姿を見せる。（写真⑤）永井荷風は『日和下駄』（一九一五年）閑地の章で、戸川秋骨の文を引いている。「戸山の原は東京の近郊に珍らしい広開した地である。（略）およそ今日の勢い、いやしくも余地あればそこに建築を起こす、しからずともこれに耒耜（鋤のこと）を加うるに躊躇しない。しかるにいかにして大久保のほとりに、かかるほとんど自然そのままの原野が残っているのであるか。不思議なことにはこれが実に俗中の俗なる陸軍の賜である。戸山の原は陸軍の用地である。その一部分は戸山学校の射的場で、一部分は練兵場として用いられている。しかしその大部分はほとんど不用の地であるかのごとく、市民もしくは村民の蹂躙するに任してある。（略）しかしこの不快を与うるその大機関は、また古の武蔵野をこの戸山の原に、余らのために保存してくれるものである。思えば世の中は不思議に相贖うものである。一利一害、今さらながら応報の説がことに深く感ぜられる。」

広開した地と強権との相関は、今も場所を替えて生きている。否、一層技術化され強まっているといえよう。工事が終了しても、広域防災基地は、よく市民の蹂躙しうる地ではないだろう。フェンスを巡らせた向こうに「平らかで広い土地」がある。そしてこの視線を通すフェンスは、基地の違和感、違圧感を消去させようとする狡知な霞網でもある。立川基地跡地では今、「武蔵野の美景は野の末を取り捲く連山に極まる。」（高橋源一郎『武蔵野歴史地理』一九二八年）といわれた光景をフェンス越しに目のあたりに出来る。一九五九年編図の地図を見ると基地の中には、西武蔵野、東武蔵野、武蔵野、武蔵野北、武蔵野下、北武蔵野、中武蔵野、南武蔵野の字名が記されている。跡地西北には西武蔵野と記したバス停留所が、撤去されたコンクリート塀に代って張り巡らされたフェンスに寄り沿っている。

武蔵野台地の平らかで広い立川基地跡地に相補い並ぶ、天皇在位五十年記念国営昭和記念公園と陸上自衛隊飛行基地（広域防災基地）という、慰楽教化の園の呪縛と、鎮撫訓化の地の緊縛という構図を抉る眼を獲得できるならば、それは大地と海原、あるいは山野河海への本源的権利を希求し見い出していく涯てない道への端緒となるだろう。

（写真撮影＝筆者）

⑤——一九八〇年十二月　立川基地跡地

# こども



北京、万年青賓館付近

上條恒彦


万里の長城の美少女


北京、故宮


北京、故宮



北京の小学校（中央は日青協の杉沢久雄さん）

長城付近で見かけた羊飼いの少



井の頭文化園






井の頭文化園、ふたご？



総武線の下り車内、市カ谷付近

神楽坂

明治神

上海

万里の長城の兄妹



上海、淮海

井の頭公園

神楽坂、赤城神社境内

# こども

北京に四日、上海に二日という短い旅でしたが、十一月の中国はとてもすてきでした。ぼくは観光には興味はないし「色恋沙汰は両人銃殺」などと怖ろしい情報もありましたので、ひと晩歌うこと以外には何の期待もありませんでしたが、そのせいか随分と収穫の多い旅でした。私達は「日中友好の翼」という日青協（日本青年団協議会）が中心の文化使節団といった体で、手塚治虫さん達日本アニメーション協会の諸氏・芙二三枝子さん達舞踊家諸姉、自主参加の人達、それにわが恵まれないバンドマン諸君が青年団の人達に加わって総勢四十九人、てんでんばらばらの奇妙に調和のとれた不思議な団ではありました。

北京三日目の夜、紅塔礼堂という、小沢征爾さんがブラームスを振ったあのホール、失礼ながらわが豊島公会堂をもうすこし粗末にしたふうな、とても感じのいい小屋でのぼくの体験は、すばらしい感動と教訓の入りみだれたそれでありました。スライドで字幕をつくる手法は一切使いませんでした。目線が合わないんじゃ、TVで歌うのと同じになってしまいます。歌の前や途中に通訳してもらいました。「途中」というのは「さとうきび畑」とゆう八分ぐらいかかる長い歌の時です。心配はありました。歌が途切れるとか変ってしまうとか……でも、美人で聡明なSさんのソプラノの通訳は、かつて無かったほど歌に広がりをもたせてくれる結果になり、むやみと感動させられて呆気にとられるほどでした。日青協の佐々木さんは、椅子の背にもたれて聴いている中国人がひとりもいなかったことにも驚いていました。じっさい、マイクを手に持てば笑い、椅子にかけて歌えば笑うその夜の聴衆は、言葉を吸取紙のように吸収し、想いを投げ返してくれるように思えて、かなりテンションの上っていたぼくをさらに昂奮させました。人々は評論家や批評家ややじ馬ではなく、まぎれもない聴衆でありました。ぼくは唐突だけれど「人間の豊かさって、こういうことじゃないだろうか」と思いました。例えば、情報の量を私達の国と比べてみても、気の遠くなるような差になるわけですが、そのことを、未発達とか未開発とか貧しいとか言えるだろうかと、最早私達が失ってしまったのかもしれない精神的な民度の高さみたいなものを人々の中に見ながら、考えてしまいました。

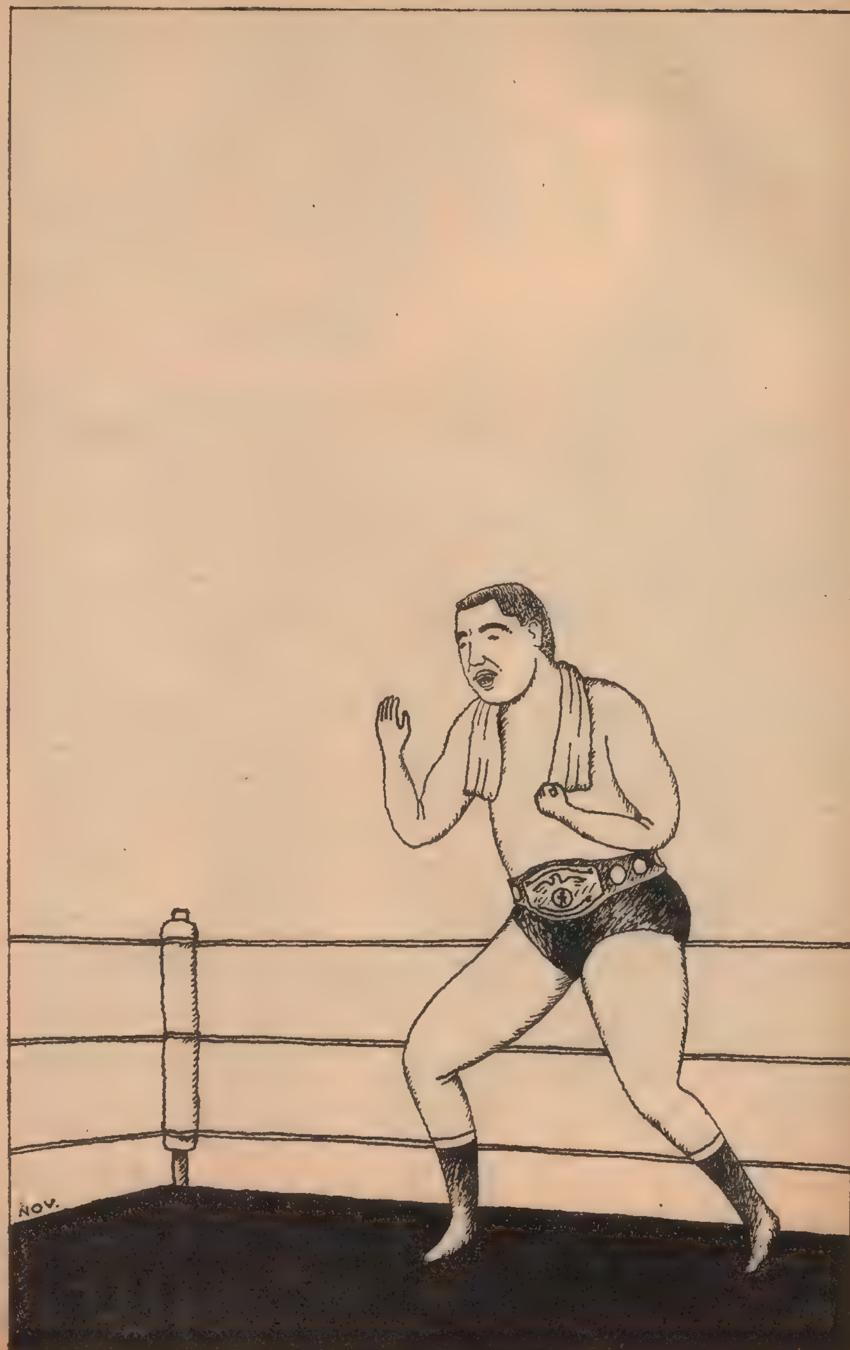
こどもはみんな、めいっぱい着かざっていました。いまは文字通り一粒種しかゆるされない、国のかかえている人口問題と、庶民の子育て願望、ぼくには人々の笑みをもった抵抗みたいに見えました。中国人は普段着で写真に撮られるのが好きじゃないのだそうで、事実、上海の裏通りでは囲まれて険悪なムードになって通訳をあわてさせました。でも、こどもにレンズを向けるともう無条件です。ことに爺や婆はもう相好をくずして、いつまででも一緒にモデルになってくれました。こっちは髭ぼうぼうの通りすがりの外国人なのに、もう自慢でならないといった風情で、心の中まで暖められました。

帰ってからはもう北京病です。焼酎を茅台酒に変更できないうらみはありますが自慢のコーヒーはジャスミン茶に、トーストは粥にといった具合です。芹をコショウを使わずに塩と少し贅沢ですがゴマ油だけでサッと炒めたやつなんか最高ですゾ。

さて四月は二十一日迄ずっと、銀座博品館で天本英世さん達と『ファンタスティックス』というミュージカル演ってます。是非観に来てください。

上條恒彦

イラストレーション＝矢吹申彦



# アントニオ猪木と石田長生　三上寛

久しぶりのレコーディングのプロデュースと編曲をしてくれた、河内出身・ギタリスト石田長生は、大の、プロレスファンで、スタジオに、アントニオ猪木の写真を貼りながら「それじゃ行くぜ、ギブ・ミー・トゥ・ベイビー」等と奇声を発する愛すべき男だ。

高まってくると、「燃えよ！　燃えよ！　闘魂」と言いながら指揮をとり、自らガッツポーズをとるのである。

おかげで、レコーディングが終る頃は、すっかり僕もプロレスのファンになってしまった。知人でもある村松氏が、プロレスの味方であるという風な本を書いて、それが大ヒットしたのだけれど、意外なプロレスファン、隠れたプロレスファンというのは、ずいぶんといるようなのだ。

大学生の友人で、本野という男がいるけれど、この男は、猪木氏のファンクラブの副会長をしているせいか、時々僕にプロレスの魅力を語ってくれるのだけれど、今一つノリきれなかったのは、やっぱり、生のステージを見たことがなかったからかも知れない。

昔は、力道山の大ファンで、これは何も僕だけでなく、昔子供だった人は皆力道山のファンだったものだ。力道山自身も、少年雑誌に自分の事が載らない号は、一度もなかったということが誇りでもあり、生きがいでもあったのだと僕は思っている。

力道山が死んで、僕もプロレスはあまり観なくなってしまった。プロレスのことはほとんど忘れていた。その時に、石田長生が登場してくるわけである。石田長生というのは、本名を土井長生と書いてオサムと読むのである。そしてある。一寛は、カズヒロと読むのではなく、ドイ・イッカンと読むのだそうで、これは、アントニオ猪木氏の本名の一字である寛を意識したらしい。将来はやはりプロレスラーにするのだ、と言っていたが、ギターの練習をしていると、ネックにかじりついて来るので、このクセが果して、音楽家としてのものなのか、レスラーとしてのものなのかは、まだ年月がたたないと解からないものだと本人は言っていた。

僕も誘われるままに、アントニオ猪木氏の経営する、六本木のレストラン、「アントン・リブ」に行ってきたけれど、ここの、マテ茶というお茶が最高においしく、おいしくというよりも、身体に良い、という感じがあって、ここんとこ、ずっと愛用してるってウケである。

石田長生は、だいぶ前に、少しだけ本誌にも紹介した男だけれど、「Fがむこうからやって来る」という、日本音楽史上、最大の名言を吐いた男である。コードが、むこうからやってくる時に、初めて自分の内の音が、鳴り始めるという発想は、シャーマニズムのそれであり、インディアンの発想であり、ことのほか、僕を説得するのである。

久しぶりの今度のアルバムが、最高のものになったのは、この石田が、Fがむこうからやってくるのを、どんな時でも待ち続ける、という固い意志をレコーディング中守り続けてくれたからに他ならないと僕は思っているのだ。

スタジオに本野が遊びに来て、石田とプロ

レス談義が始まった時は、何も知らない僕はアホだった。
知らないということは恐ろしいことである。瞬間的に自分が、アホになってしまうのである。僕は本野にたのんだ、「ぜひ本物を観に連れていってくれ」と。
一度、いや、一度ではない、二度だった。二度僕は、実は、ある女子プロレスラーから招待券を送ってもらったことがある。「三上さん、素晴らしいファイトをお見せしますから、ぜひ観に来て下さい」と、あまり上手ではない字だったけれど御手紙まで入れてあり、僕はせめて花束でも、と思ったのだけれど、差し出し人の名前が書いていない。本野に何んとかして相手を知ることはできないものかと言ってみたけれど、ムズカシイですなあ、という答えだった。
もしも、その人が、この文章を読んでいるのでしたら名乗り出て欲しいです。ぜひアナタのファイトが見たいし、どうやら僕も、本格的なプロレスファンになりそうなのです。
今まで僕がつき合ってきた人間の中で、プロレスの好きな奴で、イヤなヤツはいなかった。そのことが、うっすらと僕に、プロレスへの憧れを、持たしてはいたのだけれど、どうにも会場まで足を運ぶということができなかった。
闘う、ということを、一つの表現にまで高めるという仕事は、大変なことだろう。闘うということを、闘うことの、すごさや、美しさや、苦しさを、一つの表現にして、誰かに伝えるということは、やっぱり、すごい事だ。
考えてみれば、すべての芸術家達は、この、人間が何かと闘う、ということを表現するために生き続けるわけで、美しさ、とか豊かさということも、やはり、人間が何かと闘うために必要なことで、そのことを、様々な形でデフォルメして表に出すのが芸術だとすれば、プロレスは、まさに、闘う、そのことを何んの形容もなく、実に直接的に見せるということになるだろう。
あまりに、デフォルメされて、闘う、ということの本質が見えなくなっている時代である。
アントニオ猪木氏が、未来の子供達の教育ということに興味を持ち、現実に、そのような事業をしているということも、彼の中では大いなる必然のような気がしてくる。
人間は闘うものである。
人間は闘いながら生きていくのだ。それは非文明的なことではない。もっとも進歩的で未来を志向した生き様なのだ。
闘うということが文化なのである。文化人は皆、プロレスラーの心情を持たなければいけないのである。ひと昔前まで、文化人は、ヤクザ者の心情を持たなければいけなかったけれど、二十一世紀の文化人は、すべからくプロレスラーの心情を持ち合わせなければならないだろう。
つまり、「ガッツ」である。
今また、「根性」が問い直される時になったのである。「根性」が軽蔑されていた。「根性」がカッペ扱いされて長いのである。「勇気」や「根性」が、保守的な政治観に支配されて長いのである。プロレスが、人間の根性に、新しい意味をふき込むのに、そう時間がかかるとは思えない。
石田の仕事は、その創り出される音と同じにパワフルで正確で、そして美しい。それを支えるものは、芸術家の苦悩でも、美へ対しての追求ということでもない。
ひたすらに、アントニオ猪木さんのようになるためになのだ。感動的なことだ。実に迫力のある、スケールの大きな生き方、哲学ではないか。人間、いいことには素直に影響されるべきだ。
アントニオ猪木バンザイ。

プロレスよ永遠なれ、と、僕も末席から声を張り上げたい気持ちだ。

僕はまだ、一度も猪木氏のファイトを実際に見たことはない。けれど石田が見せてくれたプロレスの専門誌の読者コーナーの、スナップ写真をみた時、その中に写っている猪木氏の、横顔を見て、ここにある世界はすごいのであるという直感を持ったのだ。その横顔は、挑戦していた。その横顔は充分にたくさんの人達を魅了する迫力に満ちていた。

ああ、一日も早く本物を見てみたいものだ。

秋田の友人に七郎氏という男がいて、この男は酔っぱらってブッチャーと勝負するとホテルにかけ込んだそうだけれども、正しい狂気、ためになる狂気、創造する狂気、変革するための狂気、というものが、もしかしたらプロレスの中には伝統みたいにして残っていたのかもしれない。

狂気が見下されてからも久しいのである。

狂気が破壊のエネルギーにしかならないと言われてから長いのだ。狂気が今、大誤解を受けているのだ。

中傷や誤解の中で守り続けられてきた、意味のある狂気こそ、プロレスの世界に息づいているのかも知れない。そういえば石田も、すべての狂気を肯定する姿勢を見せる。すべての狂気を愛する心を持ち出して来る。簡単に人間の狂気を否定してしまわないところに、ミュージシャンの反骨精神やパワーや創造力があるのではないだろうか。今、最も闘うための狂気を養っているのがミュージシャンのような気がしてならない。二十すぎて食えない連中というのはミュージシャンの他にはあまりいない。いまや、食えないということは、誇りのようなものだ。明日から食えなくなってみろ、と言われても簡単にはできないが、音楽を始めると、とたんにそれができるのだ。

音楽をやる人間がなぜ食えないのかというのは、やはりこれは「不思議」ということの一つだろう。食えなくてもいい、と思うこと自体、すでにもう、りっぱに狂気なのだ。

「狂気」という、こんなにもいいものを、なぜ人々は、変態扱いにして「狂気」ザタであるとかという風にして暗いイメージをつけるのだろうか。

「狂気」というのは、いわゆるアメリカでは、「クレージー」ということになるけれど長部日出雄氏が、アメリカの黒人達は、気分が良くなってくると、「オー！　クレージー。オー、クレージー」と連呼し、青森県人は、高まってくると「シディもんだ、シディもんだ」と言い続ける。シディというのはヒドイということで、よくなればなる程ダメだダメだと言って喜んでいる。この辺で何か黒人と津軽衆は関係があるのではないのかというようなことを言っていたけれど、やはり僕も絶対に関係があると思っている。

アメリカの黒人達も津軽の人間達も皆、狂気というものを認め、それを賛成しているのだと思う。両者には始めからこういう風な気質が備わっているのだろう。

そういう風に「狂気」を認め、「狂気」を愛する風土に生まれたということに嬉しさを感ずる。

津軽にも「モツイ」という言葉があって、これは、「無意味なことにガンバル人間」というような意味があるけれど、これもやっぱり、「狂え狂え、一人前の男が、一つ二つ狂えるものがなくてどうする」と言っているようで好きな言葉だ。

何々を愛すとか何々を好きだというよりは、何々に狂っているという方が僕は好きだ。「狂気」の中にはインスピレーションや直感の基になるものがゴマンとつまっているような気がするのだ。

何かに狂わないと、そういう人間の精神の中で最も合理的で科学的な即決めるという、

即というスピード感が出てこないものだろう。「狂気」の中には現代人が忘れてしまった智恵や、発想やパワーがふくまれているのである。「狂気」を道徳のワクにはめ込もうとする力こそ恐ろしいのである。

だいたいが権力が狂気の中に入ってしまうことが最も恐ろしいのである。つまり、権力の中にある狂気のかたまりを、人々は分配して、日常の中で使用しなければいけないのだ。

何事にも狂うことができない人ほど悲しいものはないだろうし、狂うことをやめなければいけない程つらいこともないだろう。「狂気」は非合理的なもののように思われているのだろうけれど、そうとばかりも言い切れない。「狂気」の中にはもちろん破壊のエネルギーもあるけれど、そうとばかりも言いきれないのだ。

おそらくアントニオ猪木の中にある正しい狂気、ためになる狂気を、僕は感激の中で見ることになるだろうけれど、その日が楽しみだ。

ある人間がある人間のファイトを見て興奮するというスタイルは、何もプロレスだけではないものかもしれない。

書くこと、唄うこと、みんな、それは自身の燃焼である。みんな誰でもが、誰かのファイトを見て、お互いにみせ合って生きていくのである。素晴らしいことだ。

人間同志がお互いの燃焼を見せ合って生きていくということは限りなく合理的なことだし、美しい形だ。」

詩を一つ。

「まだ見ぬアントニオ猪木」

四角いリングの上に燃える一つの火
あかい。
少年の目がそれを見る。
すると
一つの唄が流れてくる。
海だ。
青い海のむこう側から
人々が人々でいるための理由が
その理由が
カタマリになって
流れてくる。
あふれる。
まきこむ。
とぶ。
一つの唄が流れるために
そのための血。
一つの唄を聞きとるために
そのための歓声。
たくさんの時間が
四角いリングの上で遊ぶ
それは儀式であり
日常であり
熱だ。
アントニオ猪木が闘う。
燃える闘魂が
そのままの形で消えない。
憎しみよりは
せつないまでの人恋しさが
肉になりぶつかりいつまでも続く
ふと誰かが
その場内でふと誰かが孤独になる
アントニオ猪木ではなく
彼以外の誰かが
ふと一人きりになる
すべての人々の意識が
そのたった一人の孤独のために
消化される
イノキ！　イノキ！　とくりかえされる
場ちがいな一人の孤独が
さらに深くなり
世界というものが
バランスをとっていく。

*column*［ぼくだけの取材メモ］――*journalism*

# 「みせしめ」の季節

田原総一朗

田中角栄、創価学会、そして加藤暠…。ついでに左とん平やドリフターズの仲本工事、志村けん、久世光彦を入れようか。

一つの風が吹きあれている。この風のことに、どうも多くの人々はあまり気づいていないようだ。

さきに挙げた名前の中で、おそらく読者が知らないのは加藤暠だろう。

加藤暠は、去年は英雄だった。ジャーナリズムは加藤を追いかけまわし、わたしも何度か会ったことがある。

宮地鉄工…御存知だろうか。あるいは仕手戦。去年、兜町は大荒れに荒れた。いくつかの会社の株が、十倍以上に急騰した。

こうして兜町に嵐を呼んだ男、兜町の風雲児とも呼ばれたが、それが加藤暠なのである。

加藤暠。広島生れで、幼児のときに原爆に会った。だからいまでも被爆者手帖を持っている。

中学時代に、父親が株で大損をして倒産。それ以後、加藤の家は、株がタブーとなった。

高校時代に、病気で休学。早稲田大学を卒業したが、年令制限でまともな就職ができず、いろんな職を転々とする。そして黒川木徳という小さな株屋の外交員となった。

その加藤。去年の収入は五億円を越えている。加藤軍団と称される投資家グループを率いて仕手戦を挑み、次々に嵐を呼び起こしたわけだ。

その加藤。去年の英雄は、いま逮捕されて獄中にいる。ジャーナリズムは寄ってたかって加藤を叩いている。まるで、かつて海部八郎を袋たたきにしたようにだ。

加藤が逮捕されたときに、どこかのテレビのキャスターが正義面して、加藤をまるで極悪非道の人間のように非難していた。

加藤が、黒川木徳という小さな株屋の、一外交員だとくり返し強調して、その一外交員風情が、とんでもないことをしでかした、一外交員があんなことができるような仕組はあらためなくてはならないと力説していた。

どこの何様だと思っているのだ、キャスター風情で！　と思わず怒鳴りたくなるような高飛車口調だった。そのとき、これはあぶないぞ、と思ったのだ。本当にあぶないぞ、と。

逮捕される前に加藤が、何度もわたしにいったものだった。

四大証券が自分をつぶそうとしているの

だ、と。なぜか。

「個人投資家を取材してみて下さい。九〇パーセント以上は間違いなく損をしています。四大証券のいうままに株を買っていたら、損をすること間違いなし。げんに、わたしがそうだったのだから……。当然ですよ。株というのは、誰かが儲けるためには誰かが損をしなきゃならない。四大証券もね。そして、株をできるかぎり高く投資家に売りつけて企業が儲ける。泣きを見るのはいつも個人投資家……。こんな馬鹿なことはありますか。そこで、ぼくは、四大証券や企業の好きなようにはさせないぞ、と。仕手戦やったのですよ。はじめて個人投資家たちは儲けた。はじめて四大証券に勝った。四大証券の好きほうだいにはさせなかった。ぼくのやったことに、少なくとも個人投資家たちは拍手している。よくやってくれた、と、いってくれているはずです」

加藤は雄弁に喋った。

「だが、それが四大証券には気に入らなかった。好きほうだいにできない。それどころか、個人投資家たちに儲けられて、結果としては経営的にピンチになってしまう。そこで、ケシカラン加藤をつぶせ、やっつけろ、と、こうなったのですよ」

加藤のいい分が全て正しいとはわたしも思わないが、加藤がつぶされたのが、四大証券による証券界の再編成の一環である、とは業界の定説になっている。四大証券にとって都合がよいように業界を完全に系列化する。そのために四大証券にとって不都合が、つまりいうことをきかぬ勢力はぶっつぶす。加藤逮捕は、いわばそのためのみせしめだというのである。

それを、わけもわからずマスコミは、正義の味方面をして加藤を袋だたきにする。

実はわたしは、田中角栄問題も、創価学会問題も、この加藤事件と似ている、と思えて仕方がないのだ。

わたしには、ここで田中角栄や創価学会の弁護をしようとしているのではない。

・ドリフターズ事件までを含めて、クリーンアップ旋風が吹いている。いや吹き荒れている、とわたしには思える。ダーティな部分が摘発され、きれいになる。結構なことじゃないか、と、あるいは読者は思うかもしれない。

はたして、そうだろうか。

クリーンアップ。一体、誰にとってのクリーンアップなのか。

あるテレビキャスターがいみじくもいったように、いま摘発され、一掃されようとしている連中は、いずれもウサンクサイ。ウサンクサイとは、ちゃんとした学歴も、ちゃんとした軌跡も経ていないということだ。

小学校卒の分際で、土建屋風情で……。田中角栄に対する批判だ。それが加藤だと、小さな株屋の一外交員風情で……となる。

創価学会だって、前二者に負けずウサンクサイ。わけのわからない宗教グループが何十人もの国会議員まで出してのさばっている、ケシカランということになるだろう。

ウサンクサくない、ちゃんとした資格のある、いってみればエスタブリッシュメント、誰もが、資格ありと認識できるしかるべき人間が、しかるべきポストにつくべきであって、わけのわからん連中がのさばるのを許してはならない……。そして有資格者とは、東大法学部を卒業したキャリア組の官僚たち……。つまり、現在の、このクリーンアップ旋風の仕掛人は、官僚エスタブリッシュメントであった。マスコミは、その片棒を担いでいるのだ、と。こう思うのは、わたしの偏見だろうか。

*column* [シアターノート] —— *play*

# いい父親、いい息子、いい嫁

## 小田島雄志

「昭和十九年の春ごろでしたか」と演出の宇野重吉は上演パンフレットに書きはじめる、「私は陸軍一等兵としてシンガポールに駐留していました……」 街の日本人書店に入った彼は、『息子の結婚 武者小路実篤』という背文字に目をひかれ、買い求め、ローソクの灯りで読みふけった。「私はそれから北ボルネオに移動しました。サラワク川のほとりの兵舎で、まだ陽の高いうちにすませた夕食の後などに、私は班の戦友たちを集めてその『息子の結婚』を朗読して聞かせると、みんなは実に快活に大声で笑い、拍手し、ある場面などではポロポロ涙さえ流しました」

舞台を見る前にこの文章にふれていたとしたら、ぼくは戦争体験者の感傷的な思い出の一コマと読みすごしていたかもしれない。だが、舞台を見てしまったあとでこれを読んだので、そのときの情景が目に見えるようであり、共感と感動を味わうことができた。なにしろぼくも、舞台を見ながら、大声で笑い、拍手し、ある場面ではポロポロ涙を流したのだから。そして、「この『息子の結婚』一冊は、捕虜生活の私たちにどれほど強く生きることの意味を教えてくれたかわかりません」ということばにも、素直にうなずくことができたのである。

武者小路実篤がこの戯曲を雑誌「いのち」に発表したのは、昭和十二年七、八月号であり、日中戦争がはじまったときであった。桜井書店から単行本として出版されたのは(のちに宇野重吉がシンガポールで買い求めることになるが)、昭和十七年五月であり、太平洋戦争に突入した翌年であった。そのため、単行本では、戦争への不安から「男の子をもっていない者は仕合せだと思うね」という台詞があるが、その前半が検閲により伏字にされたという。

いずれにしろこの戯曲は、時代背景も、家族関係も、いまとはまるっきりちがう状況で書かれたものである。民芸がこれを山本有三の『嬰児ごろし』と二本立てで上演すると聞いたとき、昔の日本人はこうだったのか、と他人事のように納得することになるのだろうと思った。ところが、三越劇場の舞台を見ているうちに、その小さな世界がわがことのように思えてきたのである。

物語はごく単純である。有名作家(とおぼしき)仲田広雄(米倉斉加年)と、その妻米子(仙北谷和子)は、一人息子の広一郎(竹内照夫)にいい嫁がきてほしいと願っている。そして、友人に紹介された三好たか子(大竹

しのぶ）に会って、その気立てのよさときりょうのよさにすっかり気に入ってしまい、仲田は秘書としてやとうことにする。大学を出ながら画家の修業をしている息子広一郎は、たか子にモデルになってくれと頼む。若い二人は、父親のおもわくどおり、愛し愛され、めでたく結ばれることになる。

これだけのストーリーに、ぼくをふくめて観客はなぜ笑い、なぜ涙を流したのか。ぼくは分析することが苦手な男だが、少なくともこうは言えるだろう。ここに登場する人物は、武者小路作品がつねにそうであるように、いい父親、いい母親、いい息子、いい娘、いい友人たちである。では、「いい人」とはどういう人か。他人を思いやり、おのれをわきまえている人である。他人をかえりみずおのれを押しつけたり、他人のためにおのれを見失ってへりくだるようでは、「いい人」ではない。

たとえばこの父親は、「こんな時勢に生れた人間が幸福だかどうかを考えると、僕はかえって気の毒な気もするのだ。戦争にでもなったら死ぬために生れて来たということになるからね……だから僕が地上に生れさした広一郎だけは、生れた甲斐のある人間にしてやりたいと思っている」（宇野重吉のテキスト・レジーによる）ために、息子にほんとうの恋というものを知らせてやろうとする。

ほんとうの恋を知った息子は、自分の才能がまだたか子の美しさにはおよばないと思い、たか子はその逆と思うので、肖像画を見ながら次の対話になる——

「ほめるとお怒りになるのね」

「ええ、怒りますね」

「悪口言ったら」

「なおせるだけなおしますよ」

「私、この画の悪口言う人があったら、怒りますわ」

「僕だって、あなた以外の人に悪口を言われたら、腹を立てるかも知れません。しかし自分のだめなことはよくわかっているのです」

「少し私より美しすぎますわね」

「又喧嘩がしたいのですか」

「美しいものを美しいと言ってはいけないのですか」

「だって、この画よりあなたのほうが百倍も美しいのですよ」

こうして、父親と息子も、愛しあう二人も、おたがいに相手を思いやるゆえに小さな言い争いをくり返す。観客にはその気持ちが十分わかるゆえにたまらなくおかしくなる。しかも、それぞれが自分をひかえめに見てのことだから、さわやかに笑えるのである。また、大竹しのぶのたか子が、身分のちがいゆえに広一郎の愛を避けようとし、自分の愛をおさえようとするけなげさに、さわやかに泣けるのである。

もちろん、いまの世の中を生きていく上で、このような「いい人」ばかりに出会うわけではない。ぼくたちはしょっちゅう傷つけたり傷つけられたりしながら生きているし、校内暴力、家庭内暴力の話もよく耳にする。にもかかわらず、と言うより、それだからこそ、この「いい人」たちの芝居に胸をうたれるのだろう。心を洗われて、自分のなかにも「いい人」が生きていることを笑いと涙のうちに発見するのだろう。

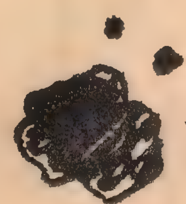
ぼくも、米倉斉加年の父親を見ながら、いい父親になろうと決心した。いままでは、伜がガールフレンドを連れてきたりすると、思わずそのかわいさに心ひかれ、父と子の三角関係になってはまずい、と不安になったりしたものだが、これからは伜を思いやり、おのれをわきまえることにしよう。

私は嘘が嫌いだ　第十七回

# 酒屋の娘と犬屋の親父。







糸井重里

うちの犬はカンが鋭い。

現在、私と家庭の間で問題になっていることが、自分のことであることを察してヒガミっぽくなっている。

自宅の引越を考えているのである。

どーも、家主の多田さんには言いづらいのだが、ここは陽当りがかんばしくない。

とはいえ、三年も住んでいるのだから、居心地が悪いとゆーことではない。

突然、陽当りのことが気になりはじめたのである。ビタミンDの問題が、ある日気に懸りだしたのである。

気にしはじめると思いつめるのが、私の美点である。小さな目的については、猛烈にハングリーな魂になってしまうのだ。

で、早速、新しい棲み家を探した。当然、陽当り中心に考えたわけだから、それ以外のことについては、また三年後位に新しい問題にぶち当るかもしれない。しかし、それはまた三年後に考えればいい。

三日前に、引越先が決定した。

私は下見に行ったのだが、家中に敷きつめてあるカーペットに一番に目が行った。

次には、一階と二階にまたがる、階段に注目した。

一緒に行った家庭も、「カイダン」と、小さく、引率の不動産屋に聞こえないようにつぶやいた。私は、「カーペット」と、やはり低い声で返事した。

うちの犬は階段が大好きなのだ。カーペットの四方の隅も、負けず劣らず大好きなのである。別に、階段やカーペットに異常な性欲を感じるフェチシズムがあるわけではない。

実は、お恥ずかしい話だが、階段やカーペットに、おしっこをひっかけるのが、彼の趣味であり得意技なのである。

そりゃあもう、自慢気に、チッとかピッとか、ひっかけては、ニコニコ笑いながら私らの方に走って報告に来るのだ。

これは、私の実家でも、いまだに語り草になっているほどスゴイことなのである。

いまの家は、三階の一部分を借りているから、階段は共用のタイルのものが外にあるだけである。散歩に出かける度に、そこで、それをすることは大家さんへの我が家の秘密だ。しかし、ま、それにしても、この外の階段は土足で昇り降りするためのものだから、いくらかはましであると言える。

ところが、今度は、家の中である。

彼は、新しい自分のテリトリーを誇示するために、母さんが手袋編むみたいに夜なべでもなんでもして、しまくるにちがいない。しないわけがない。乾いては濡らし乾いては濡らし、といったパートタイムの娼婦みたいな感じで、してくれるに決まっているのだ。

私と家庭は、こんな特異な得意技を持った彼を、困ったものとして見るようになった。

犬は、その眼差しに、ピンときているのである。だから、「アッタマ来ちゃうんだよな、オレ」といった態度で、ここ数日を過ごしているのである。

犬の機嫌が良くないと、私の肩こりもひどくなる。私は、いまでは、押しも押されぬ人の道を外れかけた獣愛に生きる中年寸前の人間なのである。

ついこの間も、犬のことでは悩んだばかりなので、いまこういうことを考えるのは、とても苦しいのである。

前にも書いたことのある、近所の酒屋の娘が、発端であった。

とにかく、よく家に来る娘である。

一時、私がちょっとイジワルをしたため、一週間ばかり近寄らなかったのだが、その後は以前にも増してひんぱんに出入りしている。

その日は、家庭が朝から用事があるとかで、お昼頃まで私はひとりで眠っていた。

寝呆けまなこで、シャワーを浴びているとチャイムが鳴って、ドアが勢いよく閉まる音が同時に聞こえ、その娘安子があがりこんできた。

家に私一人しかいないことに彼女はすぐ気付き、いくぶん私に遠慮するように「また、来ようかナ」と言った。

私は子供相手だからと、バスタオルを腰に巻きつけ、頭をふきながら「いいよ、別に。でも、お前学校行かないのかよ」と、体育の教師のような口調でたずねた。

「創立記念日だから、午前中だけ。おじさん、タオル外れたら、あれが見えちゃうよォ」

「見なきゃいいじゃないか、アホ。

第一、外れないように、ギュッと結んであるのだ」私は、もうすでに安子とのいつもの会話に入りこんでしまっていたようだった。

「おじさん、さー、ゆらゆらモックと、ブカブカビーチと、どっちが好き？」また例の、店のものをくれる話か。

「いらないよ、そんなもの」

「ハンモックみたいのと、浮き袋とさー、両方あるんだよね。本当はジュースを1ダース買わないと当らないんだけど、お父さんがお客さんにあげないで、かくしといたんだ。どっちか1個ならイトイさんにやってもいいって、言ってたから」

「あ、そ。じゃ、おくれ。どっちでもいいよ」

「おじさん、この前のこと、結婚のこと、まだ怒ってる？」

この前の結婚というのは、彼女が、うちの犬を連れ出して、近所の牝犬と交尾させた件である。仔犬を産ませて、それを自分の家で飼うという心算だったらしい。

「おまっちゃんも喜こんでたしさー、ベスも気持良さそうだったし、よかったじゃん」

「おまっちゃんじゃないってば、これはトロちゃんって名前がちゃんとあるんだ」

「あたしがおまっちゃんって呼ぶと来るんだもん。ねぇ、おまっちゃん」犬は、自分の名前がふたつあるものだと思っているらしく、どっちの時にも尻尾を振って飛んでくる。

「本当はさー、あたし、おばさんに頼みがあったんだ。すっごい、いいことなの」

しばらく、私は彼女の頼みというものについて質問を続けた。

「要するに、二千円貸してくれってことか。だめだよ、子供が借金なんかおぼえちゃ。お年玉があるだろ、自分の」

「お年玉は、お父さんに貸しちゃったよ。二万八千円、あったけど」

しばらく話して、彼女の二千円のつかい道がわかった。現在、彼女は千二百円を持っていて、それに二千円足して三千二百円にすれば、犬を買えるということらしい。

「三千二百円の犬なんてあるのかい」その半端な数字と、買い物の対象に私は興味を持ってしまった。

私と安子は、青山墓地近くの、その三千二百円の犬を売っている犬屋に向うことにした。彼女の、不用意な買い物を手助けするつもりは皆目なかったけれど、そのおかしな犬屋をのぞいてみたくなったのである。

「おじさーん、お金持って来たから、おしずちゃん売ってよ」

看板には『青山墓地ケンネル』とあった。極度にヘタクソな犬と猫の絵が描いてあって、その横には、犬のセリフのようなふきだしがついている。『いなりずしアリマス』と、読めた。墓参りの客に、いなりずしも売っている犬屋なのだ。

イラストレーション＝浅葉克己



おしずちゃんは、私の家のトロちゃんと似ている。「シーズーですか、やっぱり」
「純血じゃないの。日本犬の雑種と混じってる。可愛がってくれるなら、五千円にしてドッグフードとシャンプーとリンスといなりずしをね、二千円分つけましょう」すごい商売をする親父だ。
他の犬も、5頭いるのだが、どれも、血統から外れて我が道を行っているものばかりらしい。
「そうですよ。マイウェイね。シナトラなんて名前のもいます」
しかも、仔犬を売るのが犬屋だと思っていた私には信じられないことなのだが、この店にいるのは成犬や老犬ばかりなのだ。
「仔犬、じゃないんですね」
「そう、お客さんが育てるの大変だから、うちで育ててあげてお渡ししてるんですよ。
ほら、これなんか、もう12年も生きてんの。丈夫だしねぇ、利口だし、私になつきぬいてるのね、ねぇ」そ、そんな犬を、一体、誰が買うというのだ。
「おじさんおしずちゃんを買って行こうよォ」安子は、三千二百円也の犬を背中におぶって子守歌でもうたうように私に言った。
「あ、ちょっと、待ってな。
おじさん、この犬、どこから来てるんですか？」私は、好奇心から、いろいろ聞いてみたくなった。
「青山墓地ケンネルの、中央研究所からね。最良の設備と愛情をかけて、手間ひまをかけて、かけてかけて、かけぬいた犬が来てるの」
「はー、かけぬいて、ねぇ」
「ほら、この子なんか、お手も、チンチンも、おあずけも、ちゃんとできるでしょ。これーゆー教育料はサービスになってるの。
私ら、もう20年から、ここでやってますしね、信用が大事だから、そりゃもうキチンとやってますよねぇ」犬屋の親父は、自分の言葉に感心するようにうなずきながら言った。
「イトイのおじさん、この犬屋さん、知らなかったの？」
「ああ。ここは、よく通る道だったんだけど、気付かなかったなぁ」
「おじさん、地方出身の人だから、詳しくないんだよね。この間、ここにあった魚屋が引越して、犬屋になったんだよ」
「私は、その裏で、やってたんだけど、表に出てきたんですよ」
「え、裏にいたのォ?! 知らなかった、あたしも」
「あ、魚屋なら憶えてるよ、オレも」
「ここで、20年から、ずっとやってますからねぇ」
私は、安子をうまく言いくるめて、その日は、犬屋を出た。
それから、数日経った夕方だった。
家庭が、私に言った。
「なんか、安子ちゃんが、犬屋のおじさんが警察に捕まって、犬屋がなくなったって伝えてくれって言ってたわよ」
「なんじゃ、それは?!」
「犬はみんな保健所に連れて行かれたらしいわよ」
「なんじゃ、それはー？」
私には、いまだに、その事件の事実関係がよくつかめていないのだが、あんまり喜ばしい話でないことだけはわかる。
カンのいいうちの犬も、そのあたりの詳しいことはわからないらしいが、そのことを聞いた夜は、いつもより早めに一人で先に寝てしまった。

# 急いで口で吸え!

ALFA
アルファレコード株式会社

## スネークマン・ショウ御一行様御案内。

①●**細野晴臣**(ほそのはるおみ)イエロー・マジック・オーケストラの一員。問題作「開け心」で明日なき人類への鎮魂を奏でる。②●**シーナ**(SHEENA)シーナ&ザ・ロケットの一員。「レモンティー」の再レコード化に大喜び。というのも、この曲をバックにプロポーズされた経験あり。無論、相手は鮎川誠。③●**星ひろあき**(ほしひろあき)ザ・スポイルの一員。大学の吹奏部で先輩後輩だった星と横山が、大志を抱いて卒業後、その大志を寝かしつけ、水商売、美容師等で身をたてた末、遂に大志立ち、ザ・スポイルを結成。「ストップ・ザ・ニューウェイヴ」で伊武雅刀と共演。④●**小林克也**(こばやしかつや)ディスク・ジョッキー。数々のラジオ番組で活躍の片手間に、その他多数、クラップヘッズに参加。気分は竹の子族で「黄金のクラップヘッズ」をプレイ。⑤●**浅田孟**(あさだたけし)シーナ&ザ・ロケットの一員。⑦●**スマティ・スミッフ**(SMUTTY SMIFF)ザ・ロカッツの一員。アンディ・ウォーホールが早くもツバをつけたN.Y.のロカビリー・グループ、ザ・ロカッツ。グラビア印刷インクのりのよいルックスで、アイドル必至。「オール・スルー・ザ・ナイト」聴いて、先物買いに走るか、日本ロック商社。⑫●**川嶋一秀**(かわしまかずひで)シーナ&ザ・ロケットの一員。⑬●**ディップス・プレストン**(DIBBS PRESTON)ザ・ロカッツの一員。⑭●**ドクター・ケスラー**(DOCTOR KESSELER)謎のスノッブ・アーティスト。正体隠して、声隠さず。「メケメケ」聴けば、すぐ正体判明。⑮●**ティム・スコット**(TIM SCOTT)ザ・ロカッツの一員。⑰●**横山ただまさ**(よこやまただまさ)ザ・スポイルの一員。⑱●**坂本龍一**(さかもとりゆういち)イエロー・マジック・オーケストラの一員。㉑●**バリー・ライアン**(BARRY RYAN)ザ・ロカッツの一員。㉓●**小畑しんいち**(おばたしんいち)ザ・スポイルの一員。㉕●**伊武雅刀**(いぶまさとう)マルチ・タレント。戦艦ヤマトのデスラー総統、ジャンキー大山等に身をやつし、テレビ、ラジオ、舞台で大活躍。ストーンズの「黒く塗れ」に精射的衝撃を受けて以来の夢をかなえ、遂にヴォーカリストとしてデビュー。㉘●**高橋幸宏**(たかはしゆきひろ)イエロー・マジック・オーケストラの一員。㉙●**クラウス・ノミ**(KLAUS NOMI)エンターティナー。日本ではレコード、資料とも入手不可能ながら、ドイツよりN.Y.経由東京上陸許可申請中のところを、「コールド・ソング」独占スクープ。ピアフ、カラス、プレスリーの影響を感じるという変態的歌唱を聴かせる。㉛●**鮎川誠**(あゆかわまこと)シーナ&ザ・ロケットの一員。㉜●**サンディー**(SANDII)メタ・ポップ・シンガー。デビューLPにも入っていたモータウン'65年の大ヒット「ジミー・マック」を再現。

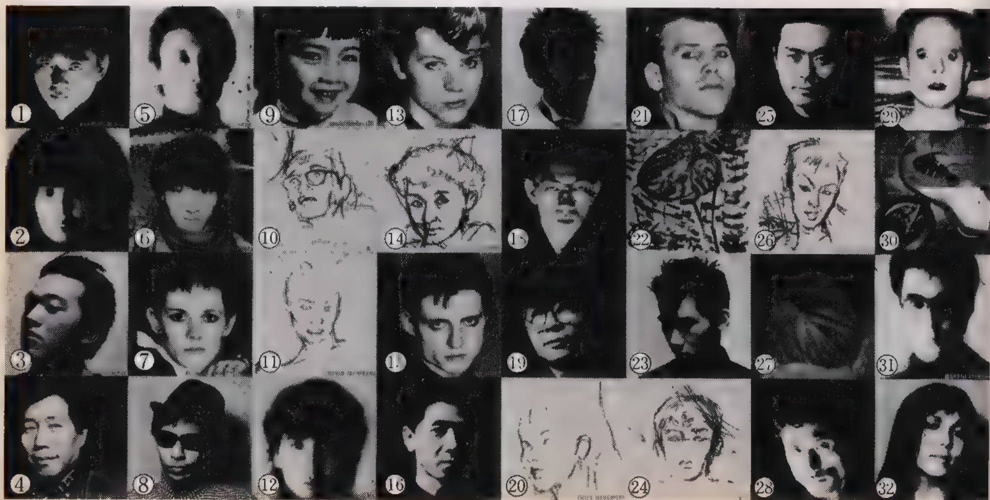


YMO、シーナ&ザ・ロケット、サンディー、ザ・ロカッツ、クラウス・ノミ等豪華キャストの共演による傑作ギャグ・パロディー集。その他名前を言えない有名ミュージシャン多数参加の、きっと驚くデビュー盤。

## スネークマン・ショー

ALR-28009/📼ALC-28008/好評発売中

**シングル:ごきげんいかが1・2・3**
**ユー・アンド・ミー・オルガスムス・オーケストラ**
ALR-727/¥700/好評発売中



# クワルテット

## 中山千夏

女を育てる——それはいつのころからか男たちの楽しい夢となり、いまだ消え去ってはいない。第一線の流行作家と写真家とプロデューサー、三人の男たちがその夢を見た。たぐいまれな美貌をそなえながら、伸び悩んでいるひとりの女優を、成熟した女、ビッグ・スターに育てあげようと彼らは企てる。

金も地位も能力もある三人の教育者と、生真面目で熱心な美しい生徒の四重奏（クワルテット）。当然ながら男と女、恋の不協和音が響かぬわけにはゆかない流れのなかで、彼らの夢はすっぱい目覚めへと向かう——。

人間関係のなかに女みずからの成長の糸口を捉えようとする、中山千夏の初の長編小説。鋭い洞察と得難い筆力で独自の創作を続ける彼女が、『ダブルベッド』『子役の時間』に次いで人々に投げかける、これは新しい文学への偉大なる挑戦ともいえる。この書を手にすることによって読者は自分の中に、別の世界を見つけだすだろう。

**980円　絶讃発売中**
**装幀＝灘本唯人**
**四六判上製 300ページ**



**井上ひさし氏**
**激賞**

*Quartet*

**話の特集・刊**

紙芝居緋細物語

再出発 第一回

# 牛若の東下り（上）

あずまくだり

井上ひさし・文



山下勇三・絵

前回と前々回の二回にわたって、摂政藤原基房公に対する平家の乱暴狼藉のこまかい顚末について申し上げましたが、この事件は都の心ある人びとに強い衝撃を与えました。静かに、ではありますが、反平家の気運が都に高まってきたのです。

洛北は鞍馬山の牛若丸（すでに遮那王と名を改めておりますが、遮那王では何だか気分が出ませんので、この物語では「牛若丸」で通させていただきます）は、もとより清和源氏左馬頭義朝の九男坊、ライバル平家の評判が揺らぎだしたから「時節近し」とよろこんだ。かというとじつはそうでもない。ライバルの動静なぞより、都の浮かれ女の動静の方がずっと気になるという、仕様のない若大将であります。

近頃の牛若丸の日課は、

夜明け　就寝
正午　起床
夕景　鞍馬を下りる
深夜　女と別れる
夜明け　山へ帰って寝る

という繰り返し、夕景、鞍馬を下りるときにはきっと僧正が谷の貴船明神へ回って、

「南無大慈明神、八幡小菩々、牛若に千人斬りを成就させ給え。宿願まこと成就あらば、玉の御宝殿をつくり、千町の所領を寄進し奉らん」

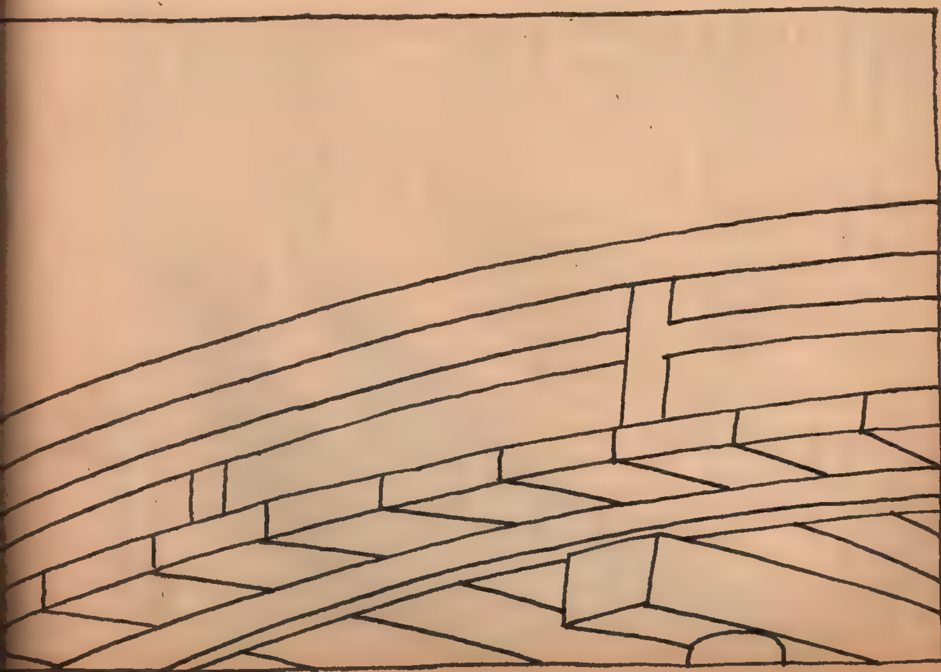
と祈請し、念誦するのですから御念が入っている。この夜毎の漁色行に、牛若丸の生母である常盤御前の依頼で、牛若丸の家庭教師役をつとめている、われらが主人公のうちの一人、武芸自慢腕自慢の橘角人が同行していることは申すまでもありません。

さて、ある年の秋のことです。大きな盆のような月が京の都を冴え冴えと照しているある夜更、牛若と角人は五条大橋の袂で女の通りかかるのを待っていた。この名月の夜の牛若のいでたちは、白い小袖一重に唐綾を着重ね、はりま浅黄の帷子（裏地のついていない衣服）を上に召し、白い大口袴に唐織物の直垂（菊綴・袖括りのある無紋の衣服）をつけ、下腹巻。腹巻などというと何となく艶消しですが、これは二十世紀人の感覚、『平家物語』の世界では、略式の鎧のことです。それで衣の下に着るのが下腹巻です。腹に巻き、背で合せるようにしたもので、草摺はあるが袖はない。そして牛若、高下駄はいて紺地の錦で柄鞘を包んだ守刀をさし、黄金造りの太刀佩いて、薄化粧に眉を細く作って、髪を高々と結いあげている。このいでたちを今様に翻訳すれば、ダーバンの三ツ揃いに、サン・ローランのネクタイ、靴はチヨダシューズの上物、MG5の男性化粧品でおめかしして、アンヌマリー・ベレッタのベージュ色のショルダーバッグ、ハンティングワールドの武骨な洋雨傘にデュポンのライター……といった、精一杯の洒落男ぶり。苦心しているのはわかるけれども、どっか間が抜けている。しかも美少年ならとにかく、フーテンの寅の少年時代そっくりの御面相ですから、どうもちぐはぐ。そこで頭から敷妙という薄物をかぶっている。「敷妙」とは、敷物にする布のことで、いわば軽ふとんの類。この敷妙に「の」の字がつくと、「床」「枕」「袖」「衣」「袂」「衣手」（歌語で袖のこと）「家」「黒髪」などにかかる枕詞になります。牛若が敷妙をかぶっているのには御面相を隠すほかにもうひとつ目的がある。共寝の女が見つかったら、敷妙を地面に敷いてふとんにいたします。

一方の橘角人のいでたちは、帷子に上腹巻、短カ刀に塗籠藤の弓。

背中の鏑矢を五本。

牛若と角人のいでたち説明分量に大いなる差がありますが、牛若は有名人、ひきかえ角人は無名。差がつくのは当然です。そのかわり有名人がへまを仕出かせば即座に叩かれます。無名人の場合、よほどのどぢを踏まぬかぎりマスコミは騒がない。これで五分と五分、釣り合いはとれている。そういえばドリフターズの志村・仲本両氏に対して、「だれでもやっていることなのにあんなに騒がれて可哀想だ」と、同情する人がいる。気持はわかりますが、これは無意味な同情論でしょう。世の中に名を知られ、また収入の多い人は、その知名度と収入に応じて「私」部分を売り渡しているのです。つまり彼はその分「公」に属することになる。したがってスターや人気者には「私」部分、プライバシーはありません。公人ということは、「私」部分がないということなのです。そこでプライバシーがほしければ、知名度や収入を捨てて、「私」人になるほかはない。「名前や顔を知られたい。お金もほしい。サインもねだられたい。……でもへまやどぢを叩かないでもらいたい」というのではあんまり虫がよすぎます。そういうわけで、たとえばおそれ多くも上御一人には「私生活」はない。大臣諸公、議員諸氏、高名小説家、有名芸能人、人気スポーツ選手、それから、何の苦もなく一億円を拾った幸運児などの皆さんにも「私」部分はあまり残っていない、彼等の生活のほとんどが「公」に属することになる。だから同情はいりません、それどころか同情は禁物です。ちょびヒゲの元宰相も、その大いなる知名度と莫大な収入によって「私」部分のおおよそを「公」に対して売り払ったお方であります。だからどぢ踏んで叩かれたのは当り前、裁判では自分の生活はむろんのこと、金庫や大福帳の中味を公にする義務がある。「偉くなり



たい、お金もほしい。でも、どぢ踏んだときは手心を加えてくださいよ」では、卑怯であります。あんまり図々しすぎます。

千葉県の前知事川上紀一氏の奥様は「このたびの念書事件で、わたしの夫に対してペンの暴力を振ったものに、やがてかならず天罰がくだるでしょう」とおっしゃっている。このご発言は残念ながら愚か者の弁ですね。千葉県知事といえば知名度高く、俸給だって月百万近いでしょう。さらに知事には、作家・芸能人・スポーツ選手・一億円拾った人などにない、権力というものがある。おまけに人々には尊敬もされる。つまり彼は頭の天辺から足の爪先まで公なのです。どぢ踏めば完膚なきまで叩かれて当然だ。それがいやなら知事選に立候補しなければよかったのだ。

……という内に、五条大橋の向うの袂に、夜目にもあでやかな紅色の敷妙をかぶった女の姿があらわれました。

「若大将、獲物がやってきましたよ」

と角人が牛若の腰をポンと叩いた。

「あの女をものにすれば千人斬の宿願めでたく成就です。ひとつ気張ってこいなをかけてください」

牛若は月下の橋の袂にただずむ女の姿を見ていたが、眉の間をすこし寄せて、

「大薙刀を持っているみたいだよ」

といった。

「やらせろ、なんていったら、薙刀ふりまわすんじゃないのかなあ」

「かえっておもしろいじゃありませんか。手向うところを押え込んで、出船の体位で後から攻めるなぞ、結構ですよ。あるいは相手を抱き上げ、欄干にのせてあぐらをかかせる。若大将はそのあぐらの中に



入って立ったまま攻める。とまり蟬といいましてね、気が変っていいもんです。とにかくあんな薙刀どうということはない、護身用ですよ」
「でも万一、薙刀の使い手だったらどうしよう」
「鏑矢の名人の橘角人がこうやって控えているではありませんか。頃合いを見計ってひゅうと射てさしあげます。例によってたいていの女子は鏑矢の音を聞くだけで腰を抜かしますよ」
「抜かさなかったら？」

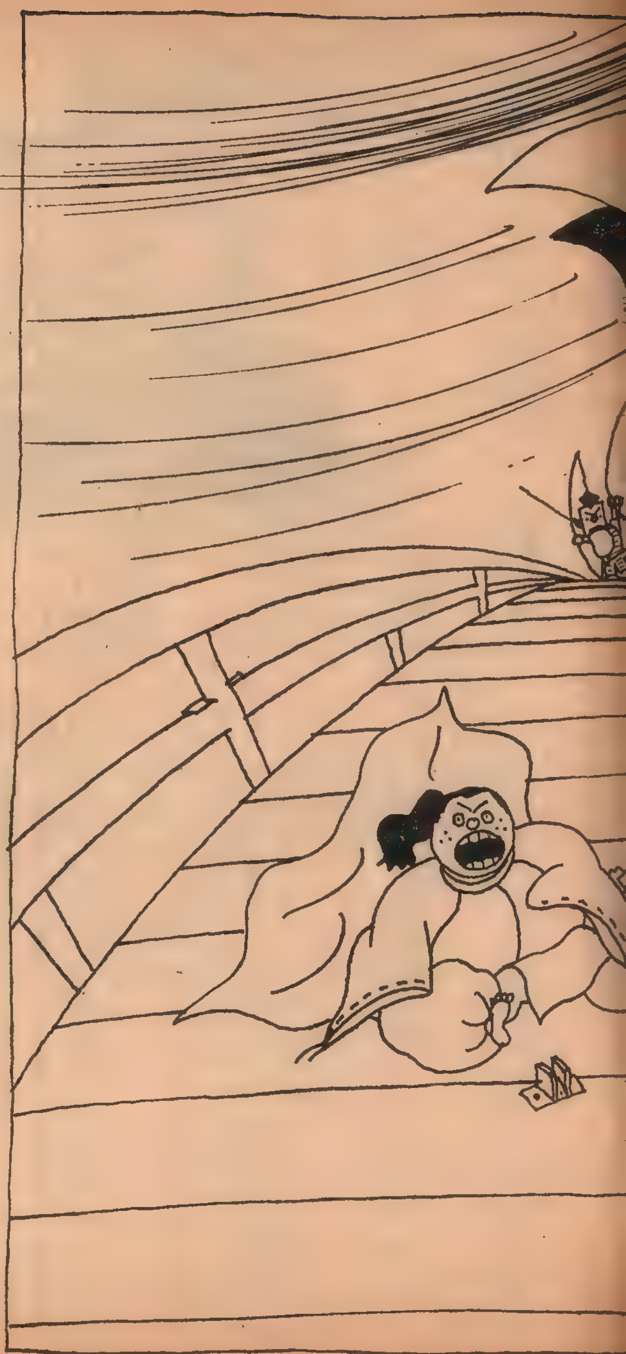
「二本目の矢で、あの女の裾を射る。裾を橋板に縫いつけてしまう。動けなくしてしまいます」
「じゃ、声をかけてくるか」
「行ってらっしゃいまし。若大将、あとでいつものようにおさがりをくださいよ」
おっかなびっくり足を運ぶ源氏の若大将の背中にそう声をかけて角人は塗籠藤の弓に鏑矢をつがえた、ところで話はさきほどの志村・仲本両氏のノミ行為事件に戻ります。この事件をもうひとつ別の視点か



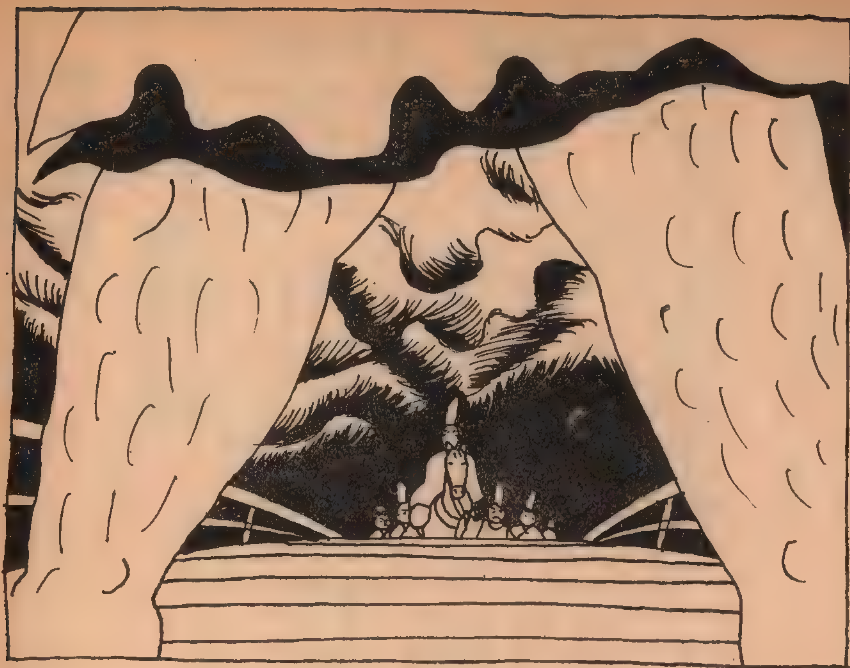
らみると、わが国の競馬は、一種の国営賭博です。国が、中央競馬会を手先に使って安からぬ寺銭を巻き上げている。いわば胴元が国家で、壺振りが競馬会だ。つまり国家はやくざの一家なのですね。ところが縄張り内で、こっそり小胴元になって遊んでいた奴がいる。放っておいては統制がとれぬ。そこで取っ捕えてお灸を据えた。国家はやくざ一家、その縄張り内で庇護されているのがわれわれ、そのかわり税金と称する場所代のようなものを納めている。そびえと一家のアフガニスタンへの侵攻も、あめりか組のエルサルバドルへの介入も、やくざの島争いと思えばわかりやすくなるのではないでしょうか。まあ、海外旅行などするときは（つまり他の一家の縄張り内へ行くときは）、パスポートという名の通行証をくれますから、国家も役に立たないわけではないけれど。

「おれたちはまともにお天道様の拝めねえ裏街道を行く人間よ。だから堅気衆にはなるたけ迷惑をかけちゃいけねえんだ」

が口癖の座頭市のようなやくざが出てきてくれれば、世界の政治の風向きもすこしはましなものになるのではないかと思うのですが、と



床屋政談をぶっているうちに、ようやく牛若丸は五条大橋を渡り切り、
「ねえ、そこな女子、お茶でも飲みません？」
こわごわ声をかけました。「こわごわ」というのは、近くへ寄ってみればみるほど、女の体躯堂々たるもので、すこしばかりおじけづいてしまったのです。
「でも、急用がおありなら次のときにのばしてもいいんだ」
「誘ってくれてありがとう」
返って来たのは、四十五回転ドーナツ盤を三十三回転でかけたような、間のびした胴間声。
「お情けをかけていただくその前に、お願いしたいことがありますわ」
胴間声に魂消げた牛若は思わず二、三歩とび退ったが、高下駄の歯が橋の継ぎ目に突っかかってずでんどう。起きあがろうとしたとき、チラと女の足が見えた。熊も顔負けの毛脛です。ぎゃっと叫んで見上げると、敷妙の下の相手は、げじげじ眉。
「わあ、千人目の女が男だった。助けてくれ」
牛若は四ツン這いになって逃げ出す。ひょーっと鏑矢が飛んでくるのを、そいつは大薙刀で苦もなく払い落し、その長柄の得物の石突でトン、牛若の大口袴の裾を押えた。彼の敷妙が飛んで、月光にすっかりあらわになったのは、
《……元来、色黒、高法師なり。身の色より上の装束まで、牛おどろくほどに有しければ、焼野の鴉に似たりけり。》（巻三十五・鷲尾一谷案内者事）
といふような並外れて魁偉なる荒法師。
「奇妙なる暗合だわ。貴様にはどうやら女千人斬りの悲願があって、あと一人でその悲願が成就するところらしいが、じつはこのおれも千本の太刀を奪う悲願を持つ者、貴様のその黄金造りの太刀を頂戴すれば、それが丁度千本目、悲願成就じゃ。さあ、大人しくその太刀をおいて行け」
ぶるるるんと大薙刀を風車の如くぶん回した。そのとき荒法師の巨体がふわっと一尺ばかり浮き上り、二つ三つ数える間、そのまま宙に漂っている。今の人ならばプロペラの原理を心得ているからさほど驚かないが、この時代にはまだプロペラは知られていない。
「宙に浮く妖術を使う太刀盗人……？　するとおまえはいま京で噂に高い、あの武蔵坊弁慶か」
「おお、その弁慶さ。母親の胎内にあること十八個月、生まれた時は二、三歳の児と同様に、髪は肩を覆い、歯も生え揃っていたという鬼子だ。そこでおれの幼名は鬼若……」
「ぼくは牛若っていいます」
「たがいに幼名を打ち明け合ったところで仲よし時間はおしまいだ。さあ、太刀をいただこうか」
と、京の五条の橋の上、大のおとこの弁慶は、長い薙刀ふりあげて、牛若おどしにとりかかる。牛若丸は飛び退いて、持った扇を投げつけて、
「角人、助けに来い来い」
と、橋板ころげて逃げまわる。そこへ角人かけつけて、大のおとこの弁慶に、大手ひろげて声高に、
「待った、待った」
と、止めに入る。
「だれか近づく、この月の夜に」



ちょっと調子が変ったのは、下敷きが『牛若丸』（文部省唱歌）から『茶摘』（文部省唱歌）へと移ったせいですが、弁慶と牛若、角人の指さす方を窺って、

「あれに見えるは美人じゃないか。あかいはかまに菅の笠」

「一町つづきのあの行列は、金売吉次の都入りでしょ。停めておそってやらねばならぬ。やらにゃわれらの名がすたる」

……金売吉次の都入りの行列といえば有名です。陸奥産の砂金はむろんのこと、秋田おばこに荘内おばこ、最上の紅花娘に平泉美人、花巻乙女に多賀城おなご、陸奥産の美人を数十人も引き連れて都へ戻ってくるのが常。その行列が、いま、月の光のふる都へついたのです。行列の中央に、馬の背にまたがった男がいる。腰のあたりに、月の光を冷たく照り返しているものが見えた。

「やっ、黄金造りの太刀だ」

弁慶がいうと、牛若すかさず話を合せて、

「ぼくのはメッキだけど、あれは本物みたいだ。あっちの太刀のほうが値打ちがあるんじゃないのかな。ぼくは美人をやるから、弁慶君はあの太刀をおやりよ」

「うむ」

弁慶は大きく頷きました。そしてばたばたと橋のまんなかまで走って行き、

「その行列、とまれ」

と大音声で呼ばわりました。

「五条大橋を通るには、それ相応の挨拶がいるぞ」

牛若と角人も弁慶の横に並び、行列に通せんぼしたことはいうまでもありません。

（つづく）

# 話の特集・近刊案内

## 矢崎泰久
# 編集後記

＊話の特集創刊第4号（1966年5月号）からずっと続けている編集後記の、1980年12月号までの全179回分（ビートルズ・レポート、話の特集の特集も含む）を集大成！
＊激動の60年代から、混迷の70年代へと、本誌編集長であり、またジャーナリスト、革自連代表として時代を鋭く生きてきた筆者の、忌憚なき意見と、真実の叫び声はいま、15年間の時間をさかのぼって、時代を容赦なく照らすだろう。話の特集の創刊と時を同じくして、『11PM』が放送を開始し、寺山修司の『天井棧敷』が旗上げをし、『平凡パンチ』が創刊された。ミニコミ誌の元祖的存在となった本誌の編集後記は、雑誌界や読書界の諸問題のみならず、政治、文化など広範囲の問題を提示する。

四六判　460ページ　装幀＝和田誠
予価1500円　四月刊

## 中山千夏
# 議員ノート

＊一九八〇年、参議院全国区に立候補し〈80年千夏の陣〉で善戦し、全国から幅広い支持を受けて、6月22日の投票日に、1、619、629票という全国第5位当選を果たし、若々しく力強い期待を一身に受けて、80年7月17日に初登院した筆者が、参議院議員として国会での活動を刻明につづった注目すべき議員ノート。
＊初当選の日に「おめでとう、1、619、629の人たち」とメッセージを贈り、支持者に熱い連帯の弁を述べた筆者が、国会内で何が行なわれているか、議員として国会で何をしているかを初めて明らかにした本書は、大きな波紋を投げかけるだろう。
・80年千夏の陣・選挙日記
・議員ノート
・法務委員会での奥野国務大臣との質疑の議事録

四六判　300ページ
予価980円　5月刊

# 連載㊈ 芸人 その世界

## 永六輔




○

今年になって元俳優の名演技をみることが多い。

レーガン・江青・ローマ法王。

○

法王がアグネス・チャンと歌ってみたり、ミサの最中にあくびしたりしているのをみていると、日本の皇室が、いかに非人間的かよくわかる。

非人間的だからこそ神様にもなれるのだ。

○

「日本人の心性に適合した聖歌を欲するなら我々も日本民謡の研究を始めねばならない」

ピオ十二世

○

「俺たちはペテン師さ、ベートーベンだって同じこと、しかし、だますというのも結構エ

ネルギーを消費するものだからな」
ザ・ビートルズ

○

「音楽が感覚の限度を越えて、哲学的観念を表現しようとすれば、その瞬間、音楽は堕落となる」
林語堂

○

「音楽の様相が変化すれば、それに従って、国家のすべてが変化する」
プラトン

○

「地獄とは素人音楽家の寄りあいである」とバーナード・ショウがいったが、今や、この世は地獄というべきか。

○

「大衆の賛美しない作品は何の価値もない」
ベルリオーズ

○

「ジャズは、たとえば音をもって行うボクシングやサッカーのようなものだ」　山下洋輔

○

具志堅は負けた理由を「肝臓が弱っていたから」といっていたが、筋肉は練えられても、内臓は練えられないということがよくわかる。

○

「芸術、それは肉づけした科学だ」
ジャン・コクトー

○

「芸術品から生ずる感動の脅迫によって得たものでないときだけ、真の価値がある」
ジャン・コクトー

○

「私は歌舞伎座で『鏡獅子』を見物しましたが、あなた方の名優六代目菊五郎、あれは神職です。出囃の音曲と、彼の典麗な所作が作り出す神々しい礼拝のあの気持は、西欧で神秘劇と呼んでいるあの宗教劇などとは、似ても似つかぬもの、菊五郎の所作は舞台の上の宗教神事の高さだと信じます。長いくせに退屈の感じられないあの舞踊、あの見事さを私は一生忘れません」
ジャン・コクトー

○

「私、歌が生命と思っていないし、思えもしない。ただ、女にはこれが本当の私なのよって思いこみたい瞬間があるんですけど、その瞬間を私はわりとステージでつかんでるんじゃないかって気はします。その程度なんですよ、私の歌も人生も」
浅川マキ

○

「長い間には、そら、きょうやめようあすやめようと本気で考えたこともありますけど、そのたびにここでやめたらもう一生舞われへんのやと思うて、どんなつらいことでも辛抱

でけるもんどす」　　　　井上八千代

○

「私は何ものにも囚われたくない、囚われるということの一面には、みずから亡びるということが暗示されているように思われる」
宮城道雄

○

「眼の見えないものには、眼の見える人よりも見えるものがあるんだ」
高橋竹山

○

「ある役の人物に何か生命力を見つけた瞬間、僕の背後にある霊気——背後霊といっていいかもしれません——がその人物に移って僕は演じているわけです。僕の作る役の人物はまったくのにせものであって——もっともまったく似せようと思いませんが——そこで観客は、実は僕の背後霊に共鳴しているわけです」
三国連太郎

○

「切れば血の出るような芸をめざして、出来得る限り体力を保ち、また練り、何とか迫力と技術との接点のピークに近づくよう努力したいと思います」
仲代達矢

○

「何がどう変わろうと俳優という仕事ははかなさの極、限りある生身をひっさげて激しく労働し、ある幻にむかって一瞬を生き、そして消える……その原形に変わりがあろうはずはありませんし、またそれに徹するべきだと思います。
労働を嫌い、報酬のみを愛するのが当たり前の世の中にあって、ともかくも労働を愛し、ものを作る作業そのものの中に報酬を見出せる事は、俳優をなりわいとする者の幸福な点である」
仲代達矢

○

「演劇の仕事は一種の労働で、肉体と才能が一致しなくてはいけない。
年をとると、どんな偉い俳優さんでも、自分で自分の声色を使うようになる。
過去の自分が創りあげたものの真似になる」
武智鉄二

○

かつて武智鉄二が選挙に出た時の言葉。
「私は歌舞伎にはじまって、演劇、オペラ、映画いろいろやってきましたけれど、人間は年をとると能力が落ちる、丁度政治レベルまで落ちてきたんです」

○

「人間の情況を些末な点まで洗いざらいすくい上げるという仕事があることを知っておく必要がある。
俳優はそれを発見し、観察し、時に応じて使い分ける」
ローレンス・オリビエ

○

「六百円でおいしい天丼があったんですよ。だから私の『授業』（イヨネスコ）も六百円

でがんばっているんです。私のライバルはその天丼なんです」　中村伸郎

○

「賞が人に権威を与えるのではない。受賞した人のその後が、その賞に権威を与えるのだ」　なだいなだ

○

イギリスのチャールズ王子の言葉。
「私は自分を笑える英国国民としての誇りを持っています」
……日本の皇太子にはとてもいえない。

○

フランス国営放送のプロデューサーがいった。
「日本は過剰情報の中で人間がどこまでも耐えられるか、そしてスタッフがどれほど苛酷な制作労働に耐えられるかについて貴重なサンプルを提供してくれるモルモットの役割を果たしている」

○

『ええじゃないか』について語る今村昌平と小沢昭一の言葉に……
「俺たちは変態になってもがんばってみせる」

○

「カッコよいとか、突っぱっているというのは必死に生きていない証拠である。必死というのは不様なものだ」　奥井一満
動物行動学の学者の言葉だが、突っぱっているタレントの皆さんに！

○

「芸能人が人見知りをしないこと、これはまさに異常としかいえません」　北山修
ドリフターズの事件にしてもそうだが、みんな人見知りをしないのが理由である。
暴力団とのつきあいが、その典型。

○

長嶺ヤス子のカスタネットをみていて、それが布にうるしを塗ってあるという材質に驚いた。
木製のカスタネットは、つまり安物なんだとのこと。

○

「名前が八分、やっていることが二分というタレントが多い」　石井好子
――ということもあって無名のタレントを探してみることにした。
海老名泰葉。
新宿ルイードでの小さなコンサート。
亡くなった三平の娘だが、詞・曲・演奏とも、のびやかで楽しい。
『劇団・青い鳥』
池袋グリーン・シアターで。
女性七人のコメディ。
おかしくしようと努力すると、おかしくなくて、その意識のないところがたまらなくおかしい。
だから若い客と、中年の客の笑いがチグハグにずれて奇妙な体験。

○

那司行雄。

日本を代表するショーダンサーの一人だが彼が中心になって『ニューナイトライフ・エンターティメント』というショーをやっている。

(モーツアルト・サロン)

ここで聞いた荒井洸子のシャンソンが背筋をゾクッとさせた。

フルートとギターの伴奏でマイクをつかわない。

マイクはシャンソンに似合わないことをあらためて教えられた。

○

二月十四日、バレンタインデーの若手落語会をのぞいた。(本牧亭)

楽屋には大量のチョコレートの差し入れがあったようで、若手の一人がそのことを高座でつぶやいた。

「……小朝の独演会じゃねェや」

○

久し振りにコロンビア・ライトの舞台をみたら、漫談の中で「教育勅語」を讃えていたのでビックリした。

○

久し振りに大江美智子の早変りをみた。

沢竜二の『はぐれ雲』。

沢竜二の舞台でいつも注目するのは津川晋の存在感である。

○

久し振りにミスター・珍がプロレスのリングに戻ってきた。

力道山時代の生き残りで現役の最年長。

プロレスラーの中で唯一といっていいエンターティナー。

プロレスがショウとして再認識されてきた時期だけに貴重なカムバックである。

○

マラソンの聴視率が高いということで各局がマラソンを主催しているのが面白い。

そしてどれも駆け引き中心のレース展開になっている。

こうしてあらゆるものが芸能化していくのは、いいことなのだろうか、いいことなのだ。

# 政治寄席

●主催：革新自由連合

●日時：81年5月5日(火・祭)P.M.6：00開演

●場所：上野・本牧亭

●入場料：前売券￥1,000円(たたみ席ざぶとん付、数有限)当日券￥1,200円

さて今月は………

**●白井佳夫＝「監督の椅子」「評論家の椅子」** 映画『四季・奈津子』で自ら監督役を演じて評判になった映画評論家の白井佳夫さんが、日本映画を代表する10人の監督との対話を通して、各々の作家論を「監督の椅子」に書きあげた。本日の映画の話は………。

**●八代英太＝車椅子泣き笑い巷談** おいらは〝片輪〟じゃないよ両輪だよ！今年は「完全参加と平等」をテーマにした国際障害者年、国会で活躍する車椅子議員の話。

**●永六輔＝六輔七転八倒** 5月5日は子供の日、本牧亭の高座では、六輔巷談おもしろく、八面六臂の活躍話、抱腹絶到。抱腹絶到。

**●狭間組(矢崎泰久VS中山千夏)＝精力舌論** 通常国会も終盤近く、予算は自民に「減税できぬ」と突き放されそのうえ参議院議員選挙の全国区制度廃止を持ちだす自民の暴挙、憲法違反、主権者無視の悪法とたたかう狭間組の国会報告。

政治寄席は毎月5日です。前売券はおはやめに。前売券の発売、お問い合せ先。
革自連事務局(青山)：479-4306～7　話の特集編集室(原宿)：405-0810

**港区南青山2-7 26青山浜ビル302革自連「政治寄席」**

# CINEMA

■『イメージフォーラム・シネマテーク』
3月29日まで、第34回新作ショーケース（飯面雅子、中島崇他）、4月2日〜5日、映像メカニック・九州芸術工科大学作品集、以上料金＝500円。「チェコ映画傑作集」、9日〜12日、『悪魔の発明』監督＝カレル・ゼーマン、原作＝ジュール・ベルヌ、アニメと実写を交えたユニークな作品、63年、1時間30分。16日〜19日、『すばらしい映画野郎』監督＝イジー・メンツェル、78年、1時間24分。23日〜26日、『アデルハイト』監督＝フランチシェク・ヴラチール、チェコ・ヌーヴェルバーグの代表作、69年、1時間37分。以上料金＝600円。5時・7時開映（日曜1時・3時）。四谷・イメージフォーラム。問合せ＝358・1983

■『ブリキの勲章』
4月3日・6日、川越市民会館、7日、所沢市民会館、5月9日、蕨市民会館、以上問合せ＝0488・22・7428。4月4日、横浜市民ホール、問合せ＝045・461・1731。4月26日、福岡・電気ホール、5月9日、北九州・八幡市民会館、16日、大分文化会館、23日・31日、福岡・都久志会館、以上問合せ＝092・271・2207。今日、大きな社会問題となっている校内暴力、中学生の非行を真正面から捉えた問題作。監督＝中山節夫。出演＝中村嘉葎雄、鈴木秀一、木村理恵、堀内正美、常田富士男、林美智子、市原悦子、三上寛。時間料金等詳細は各連絡先に問合せてください。この他、札幌のプラザ2で4月中旬から公開予定があります。

# CONCERT

■『知念良吉in文芸坐ル・ピリエ　赤花ブルース』
4月2日、7時開演、池袋・文芸坐ル・ピリエ。ライブハウスで唄いつづけてきた、沖縄出身28歳のブルース・シンガー知念良吉の初めてのコンサート。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝367・2753、971・9423

■富樫雅彦＝山下洋輔デュオのコンサートツアー『兆ライヴ』
4月7日、新潟市県民会館ホール、問合せ＝0252・45・5982。10日、札幌市教育文化会館、問合せ＝011・251・1090。13日、釧路市市民文化会館小ホール、問合せ＝0154・23・4742。16日、7時開演、東京・都市センターホール、S席＝3000円、A席＝2500円、問合せ＝478・0331。23日、那覇市労働福祉会館、問合せ＝0988・66・5759。26日、宮古市「ライヴ・ハウスあしび」、問合せ＝09807・2・7807。5月1日、福岡・都久志会館、問合せ＝092・771・3859。4日、砺波市チューリップ・フェア、問合せ＝0766・21・2494。7日、京都市教育文化センター、問合せ＝06・345・3616。11日、倉敷式市民会館小ホール、問合せ＝0864・21・9333。パーカッショニスト富樫雅彦とピアニスト山下洋輔の共演アルバム『兆』は80年度ジャズ・ディスク大賞日本ジャズ賞を受賞。80年12月、東京に於けるライヴ・アイバム『兆ライヴ』の発表を機に行なわれる、デュオ・コンサート・ツアー。時間料金等詳細は各連絡先に問合せてください。

■パフォーマンス『田中泯＋佐藤康和（perc）』
4月9日、7時開演、赤坂・国際芸術家センター。前売＝1200円、当日＝1500円。問合せ＝0426・62・8502、585・3784

■芸能山城組『第二回がんばれ一年生春祭（れっしゅまんこんさあと）』
4月13日、6時ごろより、渋谷公会堂。演目＝第一部・山城村への招待（ケチャの手ほどき、ブルガリア女声合唱、シルクロード幻唱ハイライト他）第二部・群芸「鳴神」。前売＝（一年生＝128

0円、一般＝1500円)、当日＝(一年生＝1500円、一般＝1800円)。問合せ＝945・1957

■『キース・ジャレット・ソロ』
4月17日・21日、7時開演、大阪・フェスティバルホール。S席＝3800円、A席＝3000円、B席＝2500円。問合せ＝06・344・0500。19日、6時開演、24日、7時開演、日本武道館。アリーナ＝3800円、S席＝3000円、A席＝2500円、B席＝2000円、C席＝1800円(2日間特別通し券＝5500円)。問合せ＝478・6611

■シェリー・マン＝ハリー・スイート・エディソン5『ジャイアンツ・オブ・ジャズ』
4月15日、7時開演、大阪・サンケイホール、問合せ＝06・313・7181。16日、熊本・郵便貯金、問合せ＝0963・24・8352。17日、宇部市文化会館、6時半開演、問合せ＝0836・33・4088。18日、福岡・都久志会館、問合せ＝092・741・9596。19日、高知・アルティック、問合せ＝0888・84・5636。21日・30日、6時45分開演、東京・芝郵貯金ホール、S席＝3000円、A席＝2600円、B席＝2200円、問合せ＝455・6971。22日、前橋・群馬県民会館小ホール、問合せ＝0272・31・6520。23日、八戸市公民館、問合せ＝0178・44・1244。26日、酒田・クレオール、問合せ＝0234・23・2040。28日、名古屋・ラブリー、問合せ＝052・951・6085。29日、6時半開演、清水市民会館、問合せ＝0543・52・1033。
シェリー・マン(ds)ハリー・スイート・エディソン(tp)マイク・ウォーホード(p)チャック・ドメニコ(b)スペシャルゲスト＝エディ・ロックジョウ・デイビス(ts)。料金時間等詳細は各連絡先に問合せてください。

■水牛楽団『ワルシャワ物語』
4月24日、7時開演、中野文化センター(中野駅南口下車5分)。高橋悠治を中心に、アジアやラテンアメリカの民衆の生活や戦いの中から生まれてきた歌を演奏してきた水牛楽団。作曲家の林光とシャンソン歌手の水木陽子をゲストにむかえ、第二次大戦中、ナチ占領下のワルシャワの街角で、密かに楽師たちが演奏した〝禁じられた歌〟のかずかずや、抵抗の精神から生まれたショパンやシマノフスキーのマズルカを演奏。ほとんどが日本では演奏されたことのない曲目ばかり。前売＝1500円、当日＝1800円。問合せ＝398・1572(福山)

■『ストーミー・サンセット・イン・ヒビヤ』
4月26日、3時半開演、日比谷野外音楽堂。雨天決行。出演＝ジョニー・ルイス&チャー、バウワウ、TEN SAW、レベル。前売＝2000円、当日＝2300円。問合せ＝496・1306

# BOOK

■豊田勇造著『歌旅日記 ジャマイカ――日本』
独自のレコードと演奏活動を開始して5年目、ジャマイカレコーディングにはじまって、3枚目のレコード発表、続く半年間の全国ライブツアーと80年一年間を通じて旅をしつづけた著者のやさしさと強靭な行動の記録。プレイガイド・ジャーナル社刊 1000円。

■黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』
小学校一年で退学になったトットちゃんと、型破りで、おかしなトモエ学園のめぐりあい。――個性尊重の自由な教育をめざした校長先生のもとにちょっぴり「落ちこぼれ」だったトットちゃんたちは、大人も思わず感動する生き生きした学校をつくりあげる。黒柳徹子の自伝的エッセイ。さし絵(カラー多数)＝いわさきちひろ。装幀＝和田誠。講談社刊 1000円。

■『ジョン・レノンを抱きしめて』
『ミュージック・マガジン』執筆陣による、永久保存版ジョン・レノン・ブック。12月5日のジョンとヨーコの国際電話トーク、ビートルズのいた時代を語る＝相倉久人、かまやつひろし、小島武、中村とうよう、年表＝ビートルズの歩み、ビートルズ／レノン関係レコードガイドなど掲載。執筆＝横尾忠則、沢田研二、篠山紀信、湯川れい子、

山川健一、亀渕昭信、グリール・マーカス、筑紫哲也、平岡正明、上野昂志他。イラストレーション＝後藤一之、小島武、浅葉克己、舟橋全二、上條喬久。ミュージック・マガジン増刊。ニューミュージック・マガジン社刊　1380円。

■『ジョン・レノン』

死の48時間前に行なわれたアンディ・ピープルズによるジョンとヨーコのインタビューと27人の追悼文を収録。執筆＝北山修、横尾忠則、高橋康也、谷川俊太郎、村上龍、蓮實重彦、川本三郎、小林信彦、糸井重里、粟津潔、亀渕昭信他。写真＝篠山紀信、浅井愼平。イラストレーション＝永井博、佐々木マキ、ジョン&ヨーコ。ジョンの小説集、詩集、年譜、ディスコグラフィーも合わせて収録。中央公論社刊　1500円。

■『ジョン・レノンPLAYBOYインタビュー』

『月刊PLAYBOY』に掲載されたジョン・レノンのインタビューを完全収録。ジョンが自ら語った127曲の解説も合わせて収録。集英社刊　680円。

■河村要助イラストレーション集『EXOTICA（エキゾチィカ）』

76年からの『ミュージック・マガジン』、78年からの『アングル』の表紙や、サルサのレコード・ジャケットなど、トロピカル・ムード溢れるイラストレーションを集大成。浅井愼平との対談、矢作俊彦の小説、田中一光、中村とうようの作品論の他、小池一子、谷川晃一、土屋耕一が執筆。パルコ出版刊　2400円。

■『マン・レイ写真集』

“前衛芸術の先駆者”“暗宝の大詩人”として、光によるイメージの造形に不滅の足跡をしるした写真家マン・レイ。パリに残る彼のアトリエから出た紙焼きのみによって、原板の忠実な再現をめざし、その多彩な業績を集大成した、世界で初めての本格的写真集。朝日新聞社刊　7800円。

■ダイヤグラム・グループ編著『絵で見る比較の世界――ウィルスから宇宙まで』

『ゲームのルール』『マンズ・ボディ』『ウーマンズ・ボディ』などで知られる、ロンドンを中心に活動するリサーチャー、ライター、エディター、デザイナー、イラストレーターらのチームが作った、人間の身の回りのものから宇宙までを、どのようにして測るかを、一目のもとに示す手引き。草思社刊　2500円。

■戸井十月対論集『セイリング』

アナーキー、石井聰亙、糸井重里、泉谷しげる、宇崎竜童、田村光昭、笠井潔、柳町光男、白竜、橋本治、原田美枝子、パンタ、山下達郎など現在を走り続ける16人と、戸井十月との対論集。写真＝守屋裕司。八曜社刊　1200円。

■桝田武宗・渡辺美充著『関東年少ブルース』

ラジオ・ディレクターと、元暴走族の幹部で、自らも少年院をくぐりぬけてきた少年が、赤裸々な証言をもとに、繁栄の陰に隠されたもうひとつの世界〈少年院〉の実態を追求する。戸井十月との対談も収録。八曜社刊　980円。

■外山滋比古著『フェスティナ・レンテ』

折にふれて経験する日常の出来事の中から、著者特有の洞察で摘み取ったクオリティ・ライフのための“いそがば回れの生き方論”。『ロアジール』（余暇開発センター刊）に毎月連載されたものをまとめたもの。創知社刊　1200円。

■坂口三千代著『安吾追想』

夫人が鎮魂の想いを込めて語る人間坂口安吾の魅力。その溢れんばかりの人間性とスケールの大きさを実生活を通して伝える回想記。27回忌記念出版。冬樹社刊　1200円。

■松本克平著『私の古本大学』

新劇人生50年、俳優座所属の著者が、『日本新劇史』『日本社会主義演劇史――明治大正篇』執筆の際に、参考資料として集めた古本にまつわる話。付録＝谷沢永一との対談。青英社刊　2000円。

■C・ダグラス・ラミス著『内なる外国』

旅について、沖縄の基地生活、『菊と刀』批判などを通して語る、60年以後、10年以上日本で生活したアメリカ人の生活体験による、日米比較文化論。加地水都子訳。時事通信社刊　1300円。

■P・D・ウスペンスキー著『奇蹟を求めて』

神秘思想家グルジェフの全体像を明らかにする、著者がグルジェフと共に過ごした8年間のドキュメント。平河出版社刊　1900円。

■鹿追義彦著『解体珍書』

著者の幅広い付合いのうちに養われた眼による、エロチックで切れ味の鋭い文明論。仕事人間、大義名分人間、会社人間などといわれる、40代後半から50代前半までの、セミ・戦中派の男たち“イッショケンメ人間”の肉体を腑分けする。ブロンズ社刊　1200円。

■イングマール・ベルイマン著『ある結婚の風景』

昨秋日本でも放映されて話題を呼んだTVシリー

ズのシナリオ原本の翻訳。三月に岩波ホールで、劇場用映画に再編集されたものを上映。ある一組の夫婦の結婚と離婚を通じて、人間の真の結びつきとは何かを問う、ベルイマンの問題作。木村和男訳。ヘラルド出版刊　1300円。

■**青井陽治**訳『**ちいさき神の、作りし子ら**』
「もしサラが帰ってきてくれたら、ぼくの人生でこんな素晴らしいことはない」。聾唖の女性とその教師との愛と別れ。80年トニー賞最優秀賞受賞のブロードウェイ・ベストプレイ。人がめぐりあいたいと望む、強烈で深い思考を持ったマーク・メドフの傑作戯曲。劇書房刊　1300円。

■**川上美由紀**著『**わたしは負けない**』
サリドマイド児に生まれた悲しみを、母子の努力で克服し、ついに高校陸上部の主将になった少女の記録。イラストレーション＝永田力。角川文庫　角川書店刊　300円。

■**鹿島和夫**編『**一年一組せんせいあのね**』
TVで放映され芸術祭のドキュメンタリー部門優秀賞を受賞した、神戸市立志里池小学校1年、鹿島学級の子どもたちの、詩とカメラによる記録。灰谷健次郎との対談「子どもに学ぶ」も収録。理論社刊　940円。

■**桃井かおり**著『**うつむきかげん**』
『J・J』『日刊スポーツ』『サンデー毎日』『カイエ』他に掲載されたものを集めた、『しあわせづくり』から三年ぶりのエッセー集。大和書房刊　880円。

■季刊『**文学的立場**』第3号
特集＝再び現代文学の基本を問う。共同討議〈敗戦・占領・憲法―江藤淳・清水幾太郎ら改憲論者の虚妄をあばき、〈右傾化〉を破る方法を探る〉＝本多秋五・関寛治・神井林二郎他。小田切秀雄「新たな〝転向の時代〟のはじまり」、伊藤成彦「『同時代ゲーム』の読み方」、渡辺広士「ヨーロッパの危機」など掲載。編集＝小田切秀雄。日本近代文学研究所刊　800円。

■『**半身**』11号
詩と小説と評論と戯曲の同人誌。小池多米司「状況・一九八〇・韓国と日本」、尾関忠雄「森杏太郎詩論・時間の変位」など掲載。半身の会刊（東京都世田谷区代沢4―45―4―304）500円。

# PLAY

■**劇団創現**アトリエ公演『**すいみんこんさるたぁんとすいみんグーくらぶ**』
3月27日～29日、7時開演（土日2時あり）、新宿西口・劇団創現アトリエ。ぐっすりとした眠りを創造する、眠りのコンサルタント。そこで訓練された不眠症の男が、立ったままの眠りで見る夢は――。作・演出＝井上文夫。出演＝三浦啓治、中山真理子他。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝365・4690。劇団創現では劇団員を募集しています。連絡先＝〒160新宿区西新宿7―20―14大城ビル、365・4690

■**本郷劇場公演『わるい眠り、わるい夢』**
3月28日～29日、2時・7時開演、目黒・レアリテ。作・演出＝藤山直樹。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝376・9328。本郷劇場は、劇団員を募集しています。連絡先＝490・8529（本郷劇場事務所）

■**俳優座映画放送・つかこうへい事務所**提携公演『**ヒモのはなし**』
3月31日～4月15日、6時半開演（土日祝2時あり）、六本木・俳優座劇場。作・演出＝つかこうへい。出演＝根岸季衣、田中邦衛他。入場料＝1900円。問合せ＝499・2213

■**発見の会公演『よろめきの星座』**
4月1日～4日、7時開演、京王線明大前・キッドアイラックホール。78年上演の『不純異星交遊』のパロディ版。作＝上杉清文。演出＝立川好治。出演＝牧口元美他。前売＝1000円。当日＝1200円。問合せ＝982・7073

■**劇団碧季**4月興行『**飛ぶ教室　改訂版川口編**』
4月1日～7日、7時開演、碧亭川口第5現場（京浜東北線川口駅下車5分）。作・演出＝田中正志。前売＝1200円、当日＝1300円。問合せ＝0482・55・4521

■**博品館劇場・アトリエ41**提携公演　ミュージカル・プレイ『**ファンタスティックス**』

4月1日〜21日、6時半開演（土日1時・5時）、銀座8丁目・博品館劇場。オフ・ブロードウェイで21年、8000回を超す驚異のロングランをいまも続けている今世紀最大のヒット・ミュージカル銀座に初登場。恋人役コンビに新人出演。脚本・作詞＝トム・ジョーンズ。作曲＝ハーヴェイ・シュミット。訳＝渡辺浩子。訳詞＝小池一子。演出＝中村哮夫。音楽監督＝福森湘。振付＝坂上道之助。出演＝天本英世、上條恒彦、近藤準、友竹正則、山中堂司、坂上道之助。全席指定＝2800円。問合せ＝571・1003

■劇団銀河ステーション・シアター・グリーン提携公演『メランコリア』

4月7日〜15日、7時開演（土曜2時あり、日曜2時のみ）、池袋シアター・グリーン。80年10月劇団魔天楼解散後、有志によって結成された、劇団銀河ステーションの第一回公演。作・演出＝ちあき由宇。出演＝杉政俊哉、今田穂積、左田野公、岸田哲也、橋本紀代子他。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝988・0714

■五月舎公演『小林一茶』

4月5日・7日、川崎、問合せ＝044・244・7481。8日〜10日、横浜、問合せ＝045・231・8425。13日、長野、問合せ＝0262・34・1786。14日〜18日、前橋、問合せ＝0272・32・2863。20日〜21日、高崎、問合せ＝0273・23・0955。23日〜24日、新潟、問合せ＝0252・23・1444。26日〜27日、松本、問合せ＝0263・34・2747。28日、上田、問合せ＝0268・22・9697。30日、諏訪、問合せ＝0266・53・6147。作＝井上ひさし。演出＝木村光一。音楽＝宇野誠一郎。出演＝矢崎滋、金井大、冷泉公裕、塩島昭彦、南祐輔、松熊信義、仲恭司、蔵一彦、永江智明、二見忠男、菅沼赫、渡辺美佐子。料金時間会場等詳細は各連絡先に問合せてください。

■悪源太義平構成・演出『つんつん月夜だ、みんなでてこい、濃、恋』

4月10日〜14日、7時開演（12日3時あり）、京王線明大前・キッドアイラックホール。19日、3時・7時開演、横浜・石川町南口駅前に浮かぶ緑の舟。出演＝悪源太義平、上野真人、紅恍司、柴優子、東風乙女、久生久美、速水恭子他。前売＝1200円。問合せ＝394・3225

■演劇舎蟷螂公演『新版イジチュールまたはエルペノンの狂気』

4月17日〜19日、7時開演（土日2時あり）、下北沢スーパーマーケット。作・演出＝小松杏里。出演＝大鷹明良他。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝460・7487

■つかこうへい事務所公演『熱海殺人事件』

4月17日〜5月2日、6時半開演（土日祝2時あり）、新宿・紀伊國屋ホール。作・演出＝つかこうへい。出演＝風間杜夫、平田満、加藤健一、角替和枝。全席指定＝1800円。問合せ＝499・2213

■劇団黄色舞伎團公演『半月夜』

4月24日〜26日、7時開演（土日3時あり）、西武池袋線東長崎・索行社工房。作・演出＝真壁茂夫。出演＝新井由子・君塚正実他。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝954・3361（劇団索行社）

# ETC.

■武山忠道・木の動物展『ザ・カップル』

4月1日まで開催中、10時〜6時、西武池袋店・ロアジール館8階・ボビーハウスフレンドシップ。入場無料。問合せ＝981・0111

■石垣章・泌尿器写真展『OH! MANKO 改メ 自動販売機のアリスたち』

4月1日まで開催中、11時〜7時、六本木・アートセンター・イベントスペース。入場無料。問合せ＝479・2644

■『素人音楽家長濱治・素人写真家宇崎竜堂による二人展』

4月3日まで開催中、TOKYO DESIGNERS SPACE オープンギャラリー（表参道・ハナエ・モリビル1階ファサード）。「若妻 阿木燿子」「ミスターブルース 大木トオル」「蘇生 シャ

ネルズ」「美少女　石黒ケイ」などの作品を展示。入場無料。問合せ＝405・4815（TOKYO DESIGNERS SPACE）

■『ニューウェーブマガジンの旗手たち――バックナンバーフェア』
4月22日まで開催中、10時～6時、池袋西武11階・ブックセンター（木曜定休）。『話の特集』を初め、27誌のバックナンバーを一堂に展示・即売。出品誌＝話の特集、イメージフォーラム、噂の真相、NWSF、奇想天外、キネマ旬報、広告批評、写真装置、ジャズ批評、GOCOO、世紀末研究、ソムニウム、宝島、ZOO・DOOL、ぱふ、美術手帖、ビックリハウス、FOOL'S MATE、HEAVEN、放送批評、本の雑誌、マスコミひょうろん、マイノリティ Movie magazine、ミュージック・マガジン、ユリイカ、夜想。問合せ＝981・0111

■『菊池俊治展（版画水墨）』
3月27日～4月1日、10時～6時（1日5時まで）、小田急新宿店本館7階・美術サロン。メキシコをテーマにした墨画と木版画に、今年は北海道の港町を加えた。入場無料。問合せ＝342・1111

■『HALCインテリアギャラリー』
3月27日～4月8日、「森麗子さわやかな春ファブリック・ピクチャー展」スウェーデンの手芸デザイナーに師事し、新しい分野の手芸を身につけた森麗子の詩情あふれる手づくりの世界。4月10日～22日、「創作家具展・小島伸吾・幻想家具の森」埼玉県飯能市の山中に木工の工房を営む小島伸吾の〈家具という名の木彫〉。4月24日～5月6日、「漆へのチャレンジ・和の漆から洋の漆へ」デザイナー野口寿郎と野口デザイン、メーカー文新堂とが協同した、現代にふさわしい漆器。10時～6時、新宿・小田急ハルクインテリアギャラリー（木曜定休）。入場無料。問合せ＝342・1111内線2982

■『ニュー・アート展』
3月28日～31日、11時～8時、ラフォーレ原宿6階・ラフォーレプラザ。クリエイターをめざす学生たちの企画運営による、絵画・彫刻・工芸・デザイン・映像・コンピューターアートなどの作品展示。28、29日には、ファッション・ショー、レーザー・ショーを含む新しいイベント、ニュー・アート・ショーを上演。前売＝300円、当日＝400円。問合せ＝0426・64・2845

■『橋本ルシア・フラメンコ・パーティ』
4月2・9・16・23・30日（毎週木曜日）、6時開演、NCホール（新宿センタービル地下一階）。日によって天本英世のロルカ朗詠があります。入場無料。問合せ＝346・2902

■大駱駝艦四月「桃夭會」発足記念公演『娘工場』
4月1日～5日、7時開演（土日2時あり）、大駱駝艦・豊玉伽藍（西武池袋線桜台駅より5分）。勝又敬子、田村千代美を中心にした、女性だけの舞踏グループ「桃夭會」。振鋳＝麿赤児、原田南天。舞台監督＝原田南店。前売＝1800円、当日＝2000円。問合せ＝994・2211

■『中国上海美術電影制片廠作品展』
4月3日～8日、3時～5時・7時～8時半、中国アニメーション上映、5時～7時、シンポジウム・中国訪問報告会・ビデオ上映、西武池袋店8階・スタジオ200。3日、テーマ＝中国唯一のアニメーション工房上海美術電影制片廠とは、出席者＝中国側来日者（撮影技師・演出家など）、手塚治虫他。4日、テーマ＝日中人形アニメーションについて、出席者＝持永只仁、河野秋和、岡本忠成、林静一、小野耕世。5日、テーマ＝日中切絵・水墨アニメーションについて、出席者＝島村達雄、尾崎真悟、木下蓮三、林静一他。6日、テーマ＝日中セルアニメーションについて、出席者＝手塚治虫、久里洋二、古川タク、鈴木伸一、小野耕世、福島治他。7日、テーマ＝日本アニメーション協会の中国訪問報告、出席者＝手塚治虫、中島興、鈴木伸一、古川タク、相原信洋、木下敏治、小野耕世、林静一。8日、テーマ＝中国アニメーションの今後、出席者＝中国側来日者、手塚治虫他。7・8日は8時半まで報告会で、後半のアニメーション上映はなし。日中アニメーション文化交流のためのシンポジウムと上映会。水墨画のフルアニメーション、切紙アニメーション、孫悟空の長篇など、世界初公開のものも含めて多数の中国アニメーションを上映。水墨セル、人形、絵コンテ、仕事場の写真なども展示。前売＝1600円、当日＝1800円。問合せ＝981・0111内線5328～9（スタジオ200）

■『政治寄席』
4月5日、6時開演、上野・本牧亭。出演＝宇井純、小室等、狭間組。前売＝1000円、当日＝1200円。問合せ＝479・4306～7

■コメディマイムミュージカル『ピエレット』
4月6日～11日・7時開演、モーツアルトサロン（新宿伊勢丹前スカラ座ビル6階）。作・演出＝ヨネヤマママコ。音楽＝いずみたく、照明＝沢田祐二。監修＝藤田敏雄。出演＝ヨネヤマママコ、ママコ・ザ・マイム。料金＝2500円。問合せ＝356・6580

■『ストリッパー・マリ千鶴・直観の世界』
4月11日～20日、12時～11時（4ステージ）、ニュー池袋スカイ劇場。木戸銭＝1000円、予約＝500円。予約・問合せ＝985・8979

■『フサロ展――光への讃歌』
4月20日～5月2日、10時～7時（日祝休廊）、銀座7丁目・ギャルリーためなが。新具象リヨン派の旗手として親しまれるジャン・フサロの展覧会。入場無料。問合せ＝573・5368

■『鬼太鼓座・東京公演』
4月24日～28日、7時開演（25日2時あり、26日2時のみ）、有楽町・読売ホール。全席指定＝2500円。問合せ＝408・3919

■『現代革命論研究会四月合宿案内』
4月25日、午後6時から、26日、正午まで。場所＝埼玉県越谷市袋山687―10、太田宅。テーマ＝日本原住民史、その他。合宿費＝一人千円（一泊二食）。申込み＝0489・77・2392

■『68／71黒色テント〈赤い教室〉81年度開講』
81年度の〈赤い教室〉を下記のとおり開講します。①演劇のつくりかた　Ⅰ期、4月6日～7月24日、月・金、6時半～10時（32回）、入室料＝1万円、受講料＝3万2千円、申込〆切3月末日、定員40名。Ⅱ期、9月7日～12月11日、曜日時間同じ（28回）、入室料＝5千円、受講料＝2万8千円、Ⅲ期、82年2月1日～4月3日、曜日時間同じ（18回）、受講料＝1万8千円、他に実費。演劇のつくりかたは3期連続して受講することを原則とします。②演劇のつくりかた・出張講座、各期のカリキュラムをコンパクトにした1週間ほどの講座、不定期（年3～4回）。③大神楽、4月15日～7月1日、水曜、7時～9時（12回）、入室料＝5千円、受講料＝1万2千円、申込〆切＝4月10日、定員15名。④サーカス、7月8日～9月23日曜日・料金は③と同じ（12回）、申込〆切＝6月末日、定員15名。⑤朝鮮の民衆文化、9月10日～12月17日、木曜、7時～9時（15回）、入室料＝5千円、受講料＝1万5千円、申込〆切＝8月末日、定員20名。〈赤い教室〉も今年で5年目をむかえました。わたしたちは運動のなかで獲得してきたたくさんのものを私有するつもりはありません。だれにでも使える単純で有効なものとして、伝えていきます。それがこの〈赤い教室〉です。多くの方々の参加をお待ちしています。〈赤い教室〉についてのくわしい案内書があります。60円切手4枚同封の上、〒176練馬区中村南1―9黒色テント68／71〈赤い教室宛申込みください〉。問合せ＝926・4021

■『大笑い大学校入学案内』
演出家・大島信久の呼びかけで、峰岸綾子・三木のり一などの若手俳優・コメディアンなどが、自己啓発と、相互の信頼を深める為に開かれるもので、プロ・アマの差別なく誰でも参加できます。週一回勉強会を開き、その成果を発表。第1回は4月26日。費用＝入会金2千円、年会費千円。催物・勉強会の経費はそのつど徴収。詳細問合せ＝〒162新宿区神楽坂6―56荒井ビル1F青年芸術家協会・劇団吹きだまり内「大笑い大学校」。問合せ＝268・5049

■自主制作レコード『友部正人、1976』
曲目＝どうして旅に出なかったんだ／びっこのポーの最後／君のからだはまるで／はじめぼくはひとりだった／ある日ぼくらはおいしそうなお菓子を見つけた／へマな奴／フーテンのノリ／ぼくのこと君にはどう見えるのか／ユミは寝ているよ。ミュージシャン＝スカイドックブルースバンド、中川イサト、佐久間順平他。録音＝76年大阪サウンドクリエイション。このレコードは、76年に某レコード会社から発売され、差別用語を使用したという事で後に発売中止されたアルバムです。このたび、自主制作で再発表することになりました。尚、事情により「びっこのポーの最後」という曲は81年の録音です。購入希望の方は、代金1枚につき2500円に送料（2枚まで500円）を添えて郵便振替で申し込んでください。郵便振替口座＝東京3―88194「友部正人オフィス」。問合せ＝〒168杉並区宮前5―4―5友部正人オフィス、333・5096

**お詫び**　本誌三月号広告でお知らせしました、アルファレコードの『戦後日本歌謡史／タモリ』は事情により発売延期となりました。ご了承ください。

アルファレコード株式会社

▼三月の「メモランダム・音ランダム」は、私が日頃感じていたのと同じことが書かれていて嬉しかった。

本来、英語は音、聴覚にうったえるもの、それに対し日本語は目、視覚にうったえるもの。

私がある先生から教わったのによると、たとえば gl ではじまる単語には「光る」といった意味の語が多い。gleam, glimpse, glitter, glory, gloss, glow……。gila, gila（ギラギラ）だからだそうだ。こじつけに近いかもしれないが、こんな例は他にも見られる。

又、日本語では、物の形がそのまま字になっていったものが容易に挙げられる。「木」とか「山」とか、それに「皺」という字なんかいかにもそのものだと思いませんか。

「ア」という音にも〔a〕〔ə〕〔ʌ〕〔æ〕……と何種もの音があってやはり聴覚にうったえているけど、目に見えるのは、たった26文字しか持たない英語に対して、「ア」とよめる漢字がとても多くあるのは、例を挙げるまでもない。

そこで八木正生さんが書いておられたように、英語は借用するなら、やはり源（original）を大切にして正しい発音でとりいれるべきである。でも日本語にないような音が会話の端々に（たとえば [a:] とか）現われたのじゃ、鼻持ちならないだろうなあ。もちろん音楽の場合はそんなことは言っておれないけど。

英語は耳にうったえるものであるから sound は大切に、発音を正しく、そしてそれならば日本語の方も目にうったえる漢字、仮名と漢字のバランスをもっとだいじにしてほしい。

誤字なんて最低次元の問題だけど、漢字が正しく使われてないことは多いし、当然、漢字が使われるべきことばであってもそれが思い出せないことは多い。

生まれつきのセンスもあるだろうけど、我らの国のことばであるので、もっと気をつけて美しい漢字づかいをしてほしい。そして外来語は正しい音で発音して、ね。

兵庫県加古川市野口町北野1310—26　**近藤美那子**

▼沖縄を離れて七年が過ぎました。五年間学生やっていて、社会に出て二年目です。沖縄でも最大の激戦地だった南部の糸満市で育ちました。お正月に帰省したら、ついに糸満市でも自衛隊募集業務をやっているとのことでした。

沖縄に派遣される自衛隊員は、幹部から沖縄県民をお嫁さんにするように勧められるそうです。まだまだ反戦、反自衛隊意識の高い沖縄県民の中に入っていく一つの手段なんですね。全くいやな世の中になってきた。

第二次大戦で米軍に全土をめちゃくちゃにされ、いや味方のはずだった日本軍にすら虐殺され、その後アメリカの半植民地となり、いまなお米軍の極東最大の軍事基地のある沖縄。

いったいひめゆりの女子学生が、訳も分からずに死んでいってしまったのは、今日の沖縄に米軍と自衛隊を駐屯させるためだったのか。守るにあたいしない国をどうして守る必要があるのだろうか。

もうこれ以上沖縄をひっかき回すのはやめてほしい。ヤマトンチュー（日本人）よ、もうたくさんだ。

東京都狛江市岩戸2—7—2　**砂川豊**（芸能プロ制作部員・25歳）

▼ニカラグアで革命が起きたり、エル・サルバドルのゲリラにソ連が武器を供給しているという情報が入ったりして、中央アメリカの国々は、今までになく、アメリカ合衆国の注目するところとなり、マスコミで、有名なジャーナリスト達が、いろんなコメントを言っています。

そこで一番気になる事は、彼らが一様に、これらの国々を指して、「ライト・イン・アワ・バックヤード」と言っている事です。つまり「我々の裏庭で」。自分の国をアメリカの「裏庭」と呼ばれた人々は、何と思うでしょう。その調子でゆくと、日本などせいぜい「表庭」というところでしょうか。中国やソ連に近いから。

東京都世田谷区桜新町2—2—2荒川荘203　**末松良道**（無職・27歳）

▼実は、太田竜氏の「アマテラス女神と白山ヒメの霊的戦争」を読みたくて、はじめて貴誌を買ったのですが、内容が充実して、素晴らしいデキだったと思います。雑誌で論じるには、重いです。一さつの本でまとめて欲しい。

東京都渋谷区東3—9—15　**山崎昭夫**（学生・22歳）

▼「新映画の夢・夢の女」は、もはや広告ではない。山口はるみの画は一目見て誰を描いたものか判るし、強調するべきポイントだけ色をつけているのも、あっさりしていてスマートだ。『青い珊瑚礁』は私も見たが、みなが言うほどブルック・シールズが好きになれなかった。山田宏一は「不自然でカマトトふうで、生彩がなかった」と言っている。しかし『アニー・ホール』のカットされた部分に出ていたとは初耳だ。カットされた分を見てみたい。

「マンズワイン」の広告も上品である。大阪の心斎橋を歩くと、各店が、商品台を通りの方へ突き出していて通行の邪魔にさえなる場合があるが、ある食堂とある靴屋だけは、通りの方へ出しゃばっていない。純粋に自分とところの店の内部だけで営業している。この広告を見てそれを思いだした。控え目で、上品である。いらぬ文句は総て省いている。押しつけがましくなくていい。

大阪府泉大津市松之浜町2―12―12　**重政隆文**（大学講師・29歳）

▼わたしは『話の特集』のことすっかり誤解していたみたいです。何故かといっても深い理由はなく、ただ題名が軽薄そうで、『週刊実話』の親戚かと思っていて……で、開いてみたこともありませんでした。

そんなわたしの蒙を啓いてくれたのは、今月号の表紙です。かなり遠くから、あ、三上寛！　とわかり、三上寛の書いてる雑誌なら……と買うことにしました。しかしレジでびっくり。四五〇円もするんですかぁ？　アルバイトのおねーさんの手前、もう止したとも言えず……

でも値段だけのことはありました。ここ数日、新聞は自民党強行採決の非難をしているようですが、その自民党を選んだのは、アホな国民なのに……と思っていたところへ、「中山千夏のアンダーライン」。ウン、ウン……でもわたしだけ納得してても仕方ないのだネ……アホな国民がかわらないと……遠い道のりでしょうネ。

福岡県福岡市東区原田2―24―24　**望月正道**（学生・24歳）

▼七九年三月号が一冊、うちの便所においてあって、いつもくりかえしくりかえし、よんでおります。田島征三さんの「山羊(しずか)とぼくの日記」をよくよみます。我家は牛を五〇頭ほどかっておりますが、牛のお産もたいへんで、いつもドキドキいたします。

主人も私も東京もんで、私はとくに去年、いやその前の十月におよめにきたのでなにもかもめずらしく、とくに今は流氷がきたりしてるので毎日外をながめております。家の前が海なのです。重なりあった氷が水色に光っています。夕方、ゆうやけがうつってピンク色にかわります。波の高い日はホタテが岸にどっさりうちあげられ、トラックいっぱい、みんなひろって帰ります。

『話の特集』の本を毎月ほしいと思うのですが、本屋までちょっと遠いから、送ってもらえるのかなぁとか考えてますが、郵送料も高くなったから本屋にとりに行った方がいいかなぁとも考えます。この本は古いから、もう値だんも上がったのかしら、この本はもうつぶれてないのかしら、とか、北のはてで思ってます。

北海道宗谷郡猿払村字シネシンコ　**あらい・ようこ**（酪農・31歳）

▼僕は、今、仙台に住んでいますが、ラジオは大体TBSを聞いております。そのTBSで去年の春までやっていた、『スネークマン・ショー』という番組。これは、当初、『ウルフマン・ジャック・ショー』のもじりとして出発した、音楽番組だったのですが、次第に、コントなどが入るようになり、しかも、そのコントが、国家や、警察を風刺するという、他に例のないものになったのです。

僕が今でもおぼえているのは、警官と強盗の会話で、警察が強盗にピストルをうたれ、強盗が警官に「あんたの愛している物は何なのさ？」と言う。そして、警察が「国家だ」と答えるのです。そして、更に、強盗が「あんたの片思いじゃないの？」と言って終わるのですが、やはりこの番組に圧力がかかったのでしょうか、去年の四月に終わってしまいました。

それが、今度レコードになったという事で、さっそく買おうと思っています。皆さんも、ぜひ『スネークマン・ショー』を聞いて、その風刺を楽しんで下さい。

宮城県仙台市旭ケ丘4―34―14　**斎藤尚文**（学生・18歳）

▼ヤッター！ ついに戸井十月氏らが、レコ倫を直撃。レコ倫のバカタレが、ざまーみろー という気持ちです。私は、白竜のファーストアルバムを首を長くして待っていたのです。発売延期に、もうガックリきて、ポリドールに問い合わせたところ「光州シティを除いてすぐ出しますから、もう少し待ってください」だって。冗談じゃない。音楽っていうのは、その時代時代を反映してその中から生まれてくるのだ。その時代時代を撃つ音楽でなければ、HEARTにも響かないし、叫びも聞こえない。私達が待っている音楽をまっ殺してしまうような、レコ倫なんか、いらないじゃないか。お年をめされて感性も鈍くなった方々、あなた方ががんばると、日本の文化は滅びてしまう。

白竜へ、これからも不惑症人間にシンパラム（新しい風）を吹き込んでほしい。応援するヨー

レコ倫なんかに負けずにガンバッテいる白竜に心から声援を送りたい。白竜ガンバレー！

東京都国分寺市本町2―9―7美佐見荘6号　加藤裕乃（学生）

▼昨日〝テレビアンナイト〟という番組で三上寛さんのコンサートを見ました。ぼくは、はじめて三上さんが歌っている姿を見たのです。ある時は、虫ケラのようなチンピラやくざであったり、また、ブラウン管では、ハナモゲラを巧みにあやつる一員で、突拍子もないギャグを見せ、ぼくには、三上さんとは、歌い手ではなく、役者さんであったわけですが、歌っている姿というのは、実に実にカッコよかったですよ。役者、物書き、歌手という三つの顔をもった三上さん。今度は、じかにコンサートで、本物の三上さんに触れてみようと思います。

大阪府大阪市東住吉区田辺5―13―7　岩城克尚（学生・21歳）

▼私達の住んでいる府中寮は、一九六五年に建設、運営が開始されました。

当初の府中寮には寮監がおり、寮生の私生活から思想に至るまでチェックし、大学に報告するという許せない行為をしていました。

私達の先輩はこれに反対し、一九七一年に寮監制度を廃止し、自治会の名のもと自主管理・自主運営を開始しました。そして大学が決めた入寮資格（一部一年男子）を一・二部全学年男子、更には女子へと寮を開放していったのです。

しかし大学当局は学生管理支配強化・廃寮攻撃をつづけ、現在では民事・刑事告訴恫喝という暴挙に出てきています。

勿論、府中寮自治会はこのような新局面を迎え反撃に打って出ましたが、今後の闘いを組むにあたって情報・資料の収集が必要です。

全国の皆さん、とりわけ大学寮自治会寮生の皆さん、府中寮自治会への圧倒的な情報・資料・資金カンパ・支援の要請を訴えます。

東京都府中市北山町3―15―7　法政大学府中寮自治会

▼決起一年目をむかえて

あれから早一年、めまぐるしい、夢のような一年でした。

何から何まで初体験で、そして私の生涯忘れることのできない一年でもありました。

入所の時にも言いましたが、私の闘争は、やっと出発点に立ったところです。私の闘争の本番はこれからです。

私はこの内に入り、多くの人々を見て、人間のもつ哀しさ、卑しさ、いじらしさ等を心底知り、そして毎日の様に、自己の小ささを反省しながら、このすさまじい体験を血肉にして、ここからさらに大きく育ち、私は闘争の本番に立ち向かいたいと考えて居ります。

この内でどんなに苦しくとも、辛くとも、淋しくとも、心から悲しくなったことは全くありません。なぜならば、私には、私の行動、私の闘争、私の芸を愛し、信じてくれる人々がいる、それも、日に日に増えている、このことが私を勇敢にさせ孤独にさせないからです。

一年目をむかえた今、変わることなく、私は、家元制度打倒の闘争の勝利に向かって、獄中にて元気に過ごして居ります。

私の闘争を信じ、芸を愛してくれ、支援してくれているみなさん、本当にありがとう。一日も早く、私の元気な舞台姿をお見せしたい……待っていて下さい。

栃木刑務所にて　花柳幻舟

**編集部より**　先月号、永六輔さんの「旅に病んで」のグラビアで半鐘（山口）とあるのは岡山の間違いでした。お詫びして訂正致します。

# ティ・ユー・シー通信 5




外部の人間にとっては、なんだか気楽に時間がたって、気楽に放送が流れていく様子が、おもしろい。

## 榎さんのおはようさん〜!

三菱ふそう・全国縦断

ティ・ユー・シー制作のドラマ「新聞が死んだ日」海外取材番組「千夏&ニューヨークの女たち」コマーシャル「ポラロイド・サイパン篇」、そしてホーガン音楽事務所「井上陽水・クレイジーラブ」とティ・ユー・シー・グループの紹介をしてきましたが、今回もその中の一つ㈱トミー制作にスポットをあててみました。

●

トミー制作は主にTBSラジオの局外制作番組の企画・制作をしている。

月曜から金曜まで毎朝午前五時半から六時半までの生放送「三菱ふそう全国縦断、榎さんのおはようさん〜!」もその一つで、パーソナリティは〝榎さん〟こと榎本勝起TBSアナウンサー、新旧歌謡曲と榎さんのお喋りを中心に天気予報やニュース、交通情報そして工夫をこらした企画コーナーまで、早朝にしては盛りだくさんの内容。

●

とにかく朝五時半からだから榎さんとスタッフは前日からTBSの近くの赤坂東急ホテルに泊り込む。午前四時にモーニングコールと目覚し時計で起き四時半にホテルを出て、五時にはスタンバイ。毎朝、こんな番組を続けるのには、やっぱり体力がものをいう。榎さんとスタッフたちは毎日皇居の周囲をジョギングするそうだ。

先日行なわれた「TBS三菱ふそう三浦国際市民マラソン」にはスタッフ全員




が出場して走った。

とくに榎さんはよく走る人で一度、鶴川の自宅までの道のり33キロを走り抜いたほどの健脚。

●

三年目を迎えて、なお新鮮、話題も豊富なのは、スタッフもさることながら、榎さんという人間が、旺盛な探求心を持ち続けているからだろう。ラジオをよく聴いているとわかるけれど、ラジオというのは喋っているパーソナリティが勉強しているか、馬鹿か、いい人間か、悪い人間かが、しっかりと出てしまうメディアだから、毎日毎日、話題がいっぱいでしかもアドリブの多い榎さんの喋りの巧さは、キャリアだけでなく、人間性のすばらしさによるところが大のようだ。

●

榎さんの趣味の一つは回文、時々放送でも、出てくるそうだけれど、曲の紹介のマクラにも、言葉を遊ぶ感じがあって楽しい。そのへんの手のうちを掴んでいるディレクターたちとの息の合い方もぴったりのようでTBSパノラマ・スタジオは明るい雰囲気だった。榎さんがサブに向って話しかけるように喋り、これにスタッフが頷きながら放送がされていく光景は、ラジオでは、あたり前なようだけれど、送り手→受け手が一方通行に近いテレビをやっている人間にとっては、うらやましい感じさえして、毎日全国から300枚ぐらいのハガキが聴取者からとどくのも当然のように思えた。

●

今日も朝早い五時半から、榎さんの声のようにスタッフ一同元気です。一度聴いてみて下さい。

objet magazine

月刊 毎月4日発売

定価980円

# 遊(ゆう)

5月号

特集

# 聴く

『遊』がおくる

[解放!サウンド回路]

楽器・細野晴臣

オトツレ 松岡正剛

重力音 L・ルッソロ

音霊 小杉武久

アルファ波 藤原新也

ポップ・オカルト P・フリップ

イア・クリーニング D・ペイリー

レイ・ブラッドベリー ほか

別冊特画企

《創造的緊張》

『螺旋の神秘』のジル・パースによる



遊星的郷愁を求めて

工作舎

〒150 東京都渋谷区松濤2-21-3

☎(03)465-5251

振替・東京6-74868

# 書店・話の特集

## ●四月の特集
## 横田順彌が選んだ名作SF一〇〇冊

『宇宙ゴミ大戦争』『対人カメレオン症』『脱線！たいむましん奇譚』などのハチャハチャSFでおなじみの横田順彌氏にSFの名作中の名作と言われるものを100冊選んでいただきました。海外、国内を問わず、SF作家のベスト作品100冊です。何が選ばれたかはお楽しみに。SF文学の研究家としても著名な彼が最近完結した『日本SFこてん古典』全三巻も含めた著書も同時に展示、即売いたします。また、サイン会とゲストを迎えての対談も行ないます。是非御来店下さい。

＊4月1日から30日まで（但し、29日を除く水曜定休）（勝手ながら最終日は午後から入れ替えさせていただきます）

**●横田順彌さんサイン会と対談**（両日とも午後2～4時）

4月19日（日）ゲスト・鏡　明（SF作家）
4月26日（日）ゲスト・高信太郎（漫画家）

＊次回予告　5月の選者は片岡義男さんです。

＊書店・話の特集では読者より企画を募集中。（担当＝近藤、清家）

店長・永六輔　西武渋谷店B館地下1階

### 『話の特集』定期購読のお願い

一年以上前金で購読を希望される方には、当方が送料を負担し、お手元に確実にお届けいたします。尚、**定期購読者**には、当社発行単行本をお求めの際、**一割引**にいたします。本を当社に直接お求めの方に限りますので、お申し出ください。

一年間　五千円
二年間　九千円　（共に割引料金）

お申し込みの際は、住所、氏名、電話番号、何年何月号より希望と、楷書で明記の上、**話の特集定期購読係**まで、現金書留または郵便振替（東京八＝九〇七一四）でお申し込みください。

### バックナンバーについて

創刊号（昭和41年2月号）より本号で通巻184号を刊行いたしました。3月末現在の在庫分は42年12、44年10～12、47年11、50年6、51年7・10、52年2・6・7・9・10、53年1・5・7・10～12、54年1・3・6～12、55年2～12、56年1～4月号の各号のみです。ご希望の方は月号数を明記の上、代金（42年12月号は150円、44年12月号まで180円、47年11月号は200円、50年6月号は350円、55年2月号まで380円、56年1月号まで400円、以後450円及び送料一部につき60円）を添えて現金書留または郵便振替（東京八＝九〇七一四）で**バックナンバー係宛**お送りくださるか、**書店・話の特集**へどうぞ。（なお、手数料は現金書留より郵便振替の方が少額です）

# 編・集・後・記

＊参議院の全国区を廃止しようという動きが、活発になっている。自民党が発案し、小委員会をつくり、拘束名簿式比例代表制というものをまとめた。これを各党に持ち回って、とにかく実現する方向で固めている。この改正の理由は、全国区選挙は金がかかりすぎるということだが、最大の目的は無党派、または小政党を国会から締出すことにある。八〇年参院選で、市川房枝、青島幸男、中山千夏、美濃部亮吉といった人が上位当選したが、四人の合計選挙費用は千五百万程度であるにもかかわらず、得票数は八百万票を越え、野党第一党である社会党を上回った。単純比例式ならば参院で十二議席を確保できる数字である。現在自民党が各野党に示している方法によれば、市川さんも千夏さんも、地方区から立候補しなければならず、この四人が連合したとしても、八〇万票集まるかどうかということになり、拘束名簿による当選者は一人あるいはゼロという結果に終る。いきおい、日本各地に候補者を出している政党に有利になり、大政党が議席をほぼ独占できる。

＊もともと、参議院は、衆議院のチェック機能を果たすために存在しており、衆院の党派色に対しては、無党派的な良識が強く要望されている。つまり、全国区の意味は、全国的に知られた、学識経験者やいろいろなジャンルの有名人が、選挙費用をほとんど使わずに選出されることにある。いわば国民的な良識の代表であり、そういう人を直接選挙で国会へ送ることが課題であることはいうまでもない。市川、青島、中山、美濃部の四氏はこの条件にピッタリ当てはまる議員であり、各政党の企業ぐるみ、組織ぐるみの議員とは、存在価値がまるで違う。こうした人たちを国会から追い出そうというたくらみは、国民の意志を全く無視したものであることは、いうまでもないだろう。憲法四十三条には「全国民を代表する選挙された議員」でなければならないとある以上、この自民党案は、憲法違反でもあるわけだが、特例法によって自衛隊の存在が認められている現実を考えると、立法化される恐れは十分ある。しかも、大政党が一致して採択すれば、アッという間に決まる。

＊自民党のねらいは、おそらく憲法改悪への布石だ。衆院で三分の二の議席を獲得することは、それほどむつかしくない。事実これまでにも自民党は衆院で、憲法改正への絶対条件である三分の二を占めたことは、たびたびあった。しかし、参院では全国区制が仇になって、自民の三分の二議席は不可能に近い。はっきりしていることは、すでに自民党は支持率五〇パーセントを、とうの昔に割っているのである。定数是正をしないことによって、常に過半数を確保しているものの、参院の全国区になれば、議席数をゴマ化す方法は全くない。そこで思いついたのが、前出の名簿式である。地方区の自民党候補に投じられた一票は、そのまま名簿に計上される。人物本位に投票したい有権者にとっては、無理矢理政党を選択させられる。自分の選挙区に適当な候補者がいない場合は一体どうすればいいのか。こんな阿呆らしい制度が出来るのを、手をこまねいて見ているわけにいかない。政党エゴに対して、有権者の一人一人が反対の叫びを上げるしかないだろう。

（矢崎泰久）

話の特集　五月号　定価四五〇円　一九八一年五月一日発行（毎月二十七日発売）
編集兼発行人　矢崎泰久　印刷人　北島義俊
発行　〒150　東京都渋谷区神宮前四―三〇―六　セントラルアパート六八三号　電話〇三（四〇五）〇八一〇　振替　東京八＝九〇七一四
印刷　東京都新宿区市ケ谷加賀町一―一―二　大日本印刷 

# 我が社の問題児、ペイントマーカーです。



いままでのマーカーには、こんないたずらはできませんでした。黒地の上に、色で書く。ガラスや皮、石、金属、ビニール、木何の上にでも美しい色で書ける。これが、新発売のペイントマーカーの特長です。つやつやとした美しいカラーが、ほんとうに、目に飛びこんでくるという感じ。

ただ、こんなに画期的にすばらしい可能性がありながら、他の我が社の製品のように、「何に使用するものです」とハッキリ言えないのです。鉛筆やボールペンなら、紙に書くことが目的、消しゴムならば消すことが目的。とてもわかりやすいでしょう。しかし、このペイントマーカー君、つくった私たちにもはかれないような能力の持ち主らしく、使用目的を簡単に決めつけられないのです。

でも、この我が社の問題児とも言うべきペイントマーカー、自信を持って発売しました。つくった私たちが、手にすると、楽しい気分になって、やたらとアチコチに画や字を書きたくなってしまう。この新鮮な驚きと感動はほんものだ、と考えます。使い道は、使う人が決めてくれる。無責任に思われるかもしれませんが、私たちの気持です。

書くことの楽しさを、あらためて教えてくれるペイントマーカー。とても、我が社らしい製品です。

正座して呼吸をしずめてから書くことも、気のむくまま手の動くままにラクガキすることも、人間だけの楽しい行為なんですね。どうぞ、ペイントマーカーで楽しくお書きください。




## 三菱ペイントマーカー

エナメルトーン（油性・中字・不透明）

赤・桃・橙・黄・黄緑・緑・水色・青・紫・茶・白・黒・灰色・金・銀　1本200円　三菱鉛筆株式会社

話の特集
第184号 昭和56年5月1日発行毎月1回1日発行 昭和42年2月14日 国鉄東局特別承認2542号 昭和41年3月18日第3種郵便物認可
定価四五〇円






雑誌 07569—5 HANASHI NO TOKUSHU MAY 1981 NO 184 printed in Japan